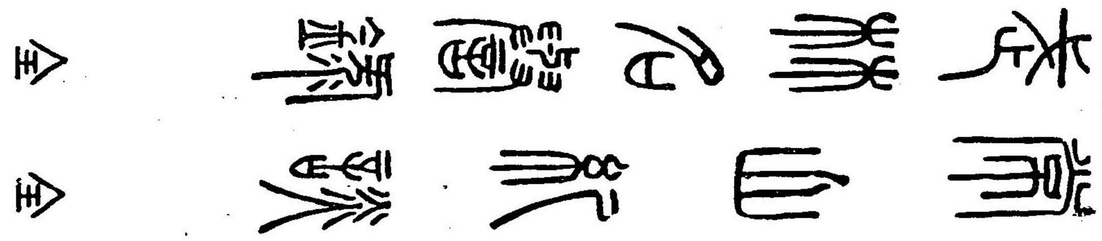

緒言

本編には常山紀談(正編二十五卷拾遺四卷附錄一卷合三十卷)を收載し、これに添ふるに武林名譽錄(五卷)を以てす。

常山紀談は上應仁文明より下元和寛永に至る、戰國將士の武功雜談を輯錄せるものにして、英豪俊傑の逸話集とも見るべく、名君賢佐の言行錄とも見るべきものなり。著者湯淺常山もと修史の志あり、ひろく諸家の記錄を涉獵して、史料をさぐること多年、その捃摭蒐集せるもの、漸く累積して本書を成す。自ら曰く一生精力半在茲書と、蓋し苦心の編著也。

常山姓湯淺、名元禎、字文祥、通稱新兵衛、常山は其の號、備前岡山の藩士なり。少壯江戸に遊びて服部南郭に學び、後太宰春臺、松崎觀海、井上蘭臺等の諸名儒と交りて名聲世にあらはる。常山學古今を綜べ、文武の大略を

抱き、且つ親に事へて至孝、主に仕へて方正、よく貧を賑し窮を救ふ。後年危言禍を買うて貶黜せられ、爾來客を謝して、ひとり筆硯に親む。著すところ常山文集、常山樓筆餘、文會雜記、東行筆記、西歸筆錄等十數部あり。天明元年四月歿す、年七十四。

武林名譽錄は專ら戰國將士の勳功榮譽に關する事實を撮記し、これに評論を加へたるものなり。著者栗原柳庵、その乃祖三世の武功を錄して家に傳へんとて、洽く雜書をさぐりて鉛槧に從ひ、かたはらその餘力を本書の編述にそゝげりと稱す。

柳庵本姓源、名信充、字伯任、孫之丞と稱す。柳庵はその號、甲斐源氏の後裔なり。幼より學を好み、年十六京都に遊び中山大納言に謁す。爾後古典の研究に志し、最も有職故實に通せり。柳庵雜筆、先進繡像玉石雜誌、武器袖鏡、甲冑圖式、刀劍圖考、鞍鐙圖式等の著書あり。明治三年七十餘歲にて京師に歿す。

常山紀談には異本ありて、其の條目に多少の異同あり。本書の據れるは美濃版本にして、卽ち普通の刊本なり。この書著者の歿後に上木せらる。然してその拾遺の如きは、ことに未定稿とおぼしく、文章しどけなくして、意義の通じ難きところも見ゆれど、すべて私意を加へざることゝせり。

明治四十五年仲夏

校訂者識

目次

山紀談

巻之一……九……二七

長尾輝虎越後を治められし事　九
輝虎平家を語らせて聞れし事附佐野天徳寺の事　一一
参河國伊田合戦の事　一三
江州國首羽城軍の事　一五
荒木安藝守討死の事　一五
甲斐國韮崎合戦の事　一七
筑平三郎功名の事　一七
佐伯惟常高崎城を乗取る事　一八
北條早雲智計の事　一九
毛利元就厳島合戦附盲人間者の事　一九
元就伊予の河野に船を借られし事　二三
那須の臣大関夕安深慮の事　二三
太田持資歌道に志す事　二三
持資京に上りし時の事附かゝるときの歌の沙汰　二四
木全知短連歌の事　二五
輝虎私市城を攻られし事　二六
輝虎太田三樂が子を質に取られし事　二六

巻之二……二八……五七

東照宮大高城へ兵粮を入れ給ひし事　二八
大久保忠俊の事　二九
桶はざま合戦今河義元討死の事　二九
信長上京の事　二九
東照宮大高城を引取給ふ事　三一
武田信玄忍びの者を討たれし事　三二
信玄鹿島傳右衛門を呼れし事　三三
備前國龍口落城の事附浮田直家の事并岡剛助高名　三五
遠藤喜三郎三村家親を打つ事并備前明禪寺合戦の事　四一
上杉謙信小田原へ攻入られし事附上京の事　四八

新發田治長が事　四九
信濃國川中島合戰の事　五〇
謙信軍中に青竹を持れし事　五三
謙信松山城後卷の事　五四

卷之三……五六

中島元行が母備中經山城を守る事　五六
石川數正淺岡某に鞠の緒の結び樣を習ふ事　五八
東照宮三河國一宮城御後卷の事　六一
三好松永光源院殺輝朝臣を弑する事　六三
三好實休戰死の事附光忠の刀の事　六五
浦兵部功名の事　六六
中村新兵衛永原安藝守一騎打の事　六六
北條綱成地黃八幡の旗を捨る事　六七
柴田勝家水缸を破りて城を守りし事　六七
勝家先陣の將となる事　六七
坪内某料理の事　六七
大澤左衛門が手の者ども東照宮を窺ひ奉りし事　六七
濟洲にて東照宮信長公御對面の事　六七
信長公伊勢の國司を亡し給ひし事　七〇
大久保忠隣功名の事　七一
高木主水村越與三左右衛門後殿の事　七二
太田下野鐵砲の事　七三
北條丹後指物の事　七三
淺井長政齋藤龍興と軍の事　七四
丸毛兵庫助軍配の事　七四
馬場美濃守今河の館を燒く事　七五
大友義鎮肥前國退口の事　七五
信長公東照宮に爲朝の鐵を進らせられし事　七五
姉川合戰の事　七六
姉川榊原二の手功名の事　七六
三井角右衛門生瀨平右衛門功名穿鑿の事　七七
金松彌五左衛門物見の事　七七
信長公朝倉を擊給ひし事　七八
長野信濃守上野國箕輪城を守る事　七九
箕形原合戰の事　七九
箕形原合戰信玄遠謀の事　八〇
箕形原合戰東照宮御退口の事　八〇
東照宮一向宗の黨と厚木坂にて御軍ありし事附峰谷牛之丞が事　八五
東照宮針崎合戰の事　八六
向井與左衛門かへり忠狀の事　八七

卷之四……八七

山崎長門守路美越前守討死の事　八七
中川重秀和田惟政を擊つ事　八七
梶川彌三郎横島先陣の事　八八
山内一豐馬を買れし事　八八
奥平貞能父子歸降の事　八九
東照宮大井城御退口大久保忠世高名の事　九一
渡邊守綱を槍牛藏といふ事　九二
謙信軍騎佐野城に入られし事　九二
大河内政房節義の事　九三
鳥居強右衛門忠節の事　九四
酒井忠次鳥巢城を乘取られし事　九六
長篠合戰の事　九七
内藤四郎左衛門返答の事　九七
多田久藏が事　九八
佐久間信盛僞て勝賴に降る事　九八
二股城攻内藤櫻井功名の事　九九
芦田信蕃二股城を退く事　一〇〇
信長公秋山伯耆を刑し給ふ事　一〇一
松平忠次諏訪原城を守らるゝ事　一〇一
山内治大夫進士清三郎功を譲る事　一〇三
長九郎左衛門能登國發向の事　一〇三
越中にて謙信月を賞せられし事　一〇四
信長公松永彈正を恥しめ給ひし事　一〇五
山口六郎四郎奥田三河守高屋城を落る事　一〇五
長坂釣閑跡部大炊邪佞の事　一〇六
東照宮勝賴と大井川にて御對陣の事　一〇六
栗田刑部幸若が舞所望の事附時田が首實檢の事　一〇七
岡田竹右衛門見切の事　一〇七
朝日千介四郎伊勢を討つ事　一〇七
菅沼定盈膽氣附山口五郎作後藤金助討死の事　一〇九
岡崎三郎君の御事　一一〇
攝津國花隈城落る事　一一三
高天神落城仁科信盛戰死の事　一一五

卷之五……一二七

勝賴の首穿鑿の事　一二七
秀吉勝賴の滅亡を惜れし事　一二八
信玄の館の跡を信長公見給ひし事　一二八
勝賴天目山にて最後の事　一二八

禪僧廣嚴院勝頼の屍を葬る事　一二七
信忠懸林寺を燒かるゝ事　一二八
東照宮依田信蕃を助け給ふ事　一二九
武田信綱誅戮の事　一三〇
戸田半右衛門山口小辨佐々清藏功名の事　一三一
小山田信茂誅戮の事　一三二
馬場美濃が女召出さるゝ事　一三三
辻彌兵衛が事　一三四
明智光秀信長公を弑する事　一三五
秀吉備中にて光秀が書を取られし事　一三六
秀吉西國の米を買れし事　一三七
光秀居城を築く事附辛崎の松の事　一三八
森蘭丸才敏の事　一三九

卷之六……一四五……一六七

山崎合戰の時堀秀政寶寺の山をとる事　一四五
森寺政右衛門武名の事　一四五
則武三大夫功名の事　一四六
瀧川一益廐橋を退く事　一四八
光秀愛宕山にて連歌の事　一四九
幸田彦右衛門が母義死の事　一四九
志津が嶽合戰秀吉智謀の事　一五〇
堀七郎兵衛見切の事　一五〇
志津が嶽七本槍の事　一五〇
石川兵助戰死の事　一五一
佐久間盛政生捕るゝ事附久右衛門安次源六郎實政が事　一五一
尼子家の十勇士　一五二
信雄長臣を除せられし事　一五二
平松金次郎始末の事　一五五
水野勝成高名并行狀の事　一五七
本多忠勝忠勇の事并忠信の曾の事　一五八
光秀反狀の事　一五九
秀吉浮田を欺きて上洛の事　一六〇
黑田孝隆思慮の事　一六一
池田家の使者筒井順慶を試る事　一六九
明智秀俊湖水を渡して坂本城に入る事　一七〇
東照宮和泉國堺より御歸國の事　一七一
小寺黑田始末の事　一七四
井口兄弟武勇の事　一七八
吉田六之助首供養の事　一七〇
生田木屋之介武功の事　一七〇
備前國福岡城合戰福井小次郎歌を遺して討死の事　一七一
再福岡合戰藥師寺額田片岡三士討死の事　一七二
榊原康政秀吉を誹りて札を立てられし事　一七四
初鹿傳右衛門が事　一七四
秀吉東照宮の御陣へ戰書を贈られし事　一七六
東照宮蟹江御出陣の事　一七六
東照宮の御軍略に依つて蟹江城降參の事　一七七

卷之七……一六八……一九一

前田利家末森城後卷合戰の事　一六八
利家島越城を攻めらるゝ事　一七七
本多重次强諫の事　一七九
秀吉東照宮に和を乞はれし事　一八〇
東照宮聚樂にて秀吉公に御對面の事　一八一
九鬼嘉隆蟹江の湊出船の事　一八四
中村一氏紀州の一揆を追拂はれし事　一八四
竹中重治の事　一八六
戰國の士功を讓る事　一八六
羽柴勝雅敵を免す事　一八七
本多正信遠謀盲上の事　一八七
東照宮伊豆にて北條父子に御對面の事　一八四
信長公平手政秀を惜み給ひし事附小瀨甫菴信長記太閤記を著はし事　一八五
謙信信玄二將の批評　一八七
甲陽軍鑑虛妄多き事　一八七

卷之八……一九三……二一五

仙石權兵衛九州に間者の事　一九三
島津家久島原合戰の事附黑藤某が事　一九三
立花道雪行狀の事　一九四
道雪仁愛深かりし事　一九六
立花道雪高橋紹運猫尾城の寄手に加はる事附道雪死去の事　一九七
紹運一徹頑人を免さるゝ事　一九九
高橋紹運討死の事附立花統增薩摩に因るゝ事　二〇〇
紹運齋藤鎭實の妹を娶られし事　二〇八
志賀親次山海が嶽に兵を伏る事　二〇八
高畑三河功名の事　二〇九
森道親正討死辭世の事　二一〇
薩摩勢根白の砦を攻る事　二一一
廢石城合戰坂小坂先登の事　二一二
野矢甚右衛門功名の事　二一三
秋月種長降參の事　二一九
新納武藏守豪氣の事　二二〇
二二四

卷之九……二二六……二三九

黑田家岐井谷合戰の事井小川傳右衛門野村太郎兵衛岐井友房を斬る事　二二六
豐臣關白北條征伐出陣の事附本多重次放言の事　二二一
井伊直政關白を討んと言はれし事　二二三
島井源八郎先登士志を論ずる事　二二三
南部越後攻口の事　二二三
上樣日和といふ事　二二三
伊奈熊藏兵糧を司る事　二二三
蒲生氏郷の陣夜討の事井氏郷金の三階菅笠の馬印を免れし事　二二四
武藏國八王寺城落つる事　二二五
大音藤藏雨森彥三郎功名の事　二二五
信雄卿那須に謫せらるゝ事　二二七
坂部岡江雪免るゝ事　二二七
關白鶴ヶ岡參詣の事　二二八
關白宇都宮にて佐野天德寺と物語の事　二二八
蒲生氏郷大志の事　二二八
奥州葛西大崎一揆の事　二二九
蒲生家の士大將軍兵調練の事　二二九
氏郷伊達家の刺客を免されし事　二三〇
氏郷佐々木が鎧を細川忠興に贈らるゝ事附墨塚の歌の事　二三一
本多忠勝萬喜が舊臣を呼出されし事　二三二
東照宮武田北條の跡御制度の事　二三二
東照宮武田の舊臣を召て御物語の事　二三二
東照宮物具の御物語附小野木笠の事　二三二
秤御定の事附一步金辨當挾箱始りの事　二三二
酒井金三郎本を忘さる事　二三四
成瀨正成忠信の事　二三五
東照宮相模堺御打廻りの事　二三五
豐臣關白五腰の刀の主を察せられし事　二三五
竹俣兼光の刀の事　二三六
本庄正宗の刀の事　二三七
胄の名樣々有し事　二三八
伊藤七藏高名の事　二三八
井伊直孝川意の事　二三九

卷之十……二四〇……二六一

馬場重介武功の事　二四〇
利家白雲の琵琶を秦村に與へらるゝ事　二四〇
桑桐若勇威の事　二四四
澤村大學朱柄の槍を持する事　二四四
加藤清正天草の一揆退治の事　二四五
森本義大夫組討功者の事　二四六
朝鮮陣の時東照宮御遠慮の事　二四七
伊達家の士卒異風出陣の事　二四八
朝鮮南大門合戰附後向の備の事　二五〇
國宮源右衛門組討の事　二五一
加藤光泰大盲の事　二五一
吉田又助川巾を積る事　二五一
清正虎を狩られし事　二五二
清正船を取せられし事　二五二
太閤名護屋にて大盲の事　二五二
菅政利後藤基次虎を斬る事附羅山先生南山銘の事　二五三
泗川の城に狹間を切る時の事　二五四
加藤嘉明拔懸高名の事　二五五
淺野長政諫言の事　二五六
井口與市主從功名の事　二五七
清正の武備嚴重なりし事　二五八
朝鮮より虎と象とを渡す事　二五九
清正の士卒土穴に住し事　二五九
森本庄林黑白鳥毛の槍鞘の事　二五九
清正の花押筆跡多かりし事　二五九
後藤基次龜甲の車を造る事　二六〇
和睦館合戰栗山利安武功用意の事　二六〇
栗山利安儉約の事附日根野備中守黑田家に銀を返す事　二六一

卷之十一……二六二……二八四

竹中重治心掛の事　二六二
岩澤某謀信を擊んとせし事　二六四
久世三四郎坂部三十郎物見の事　二六五
野々口彥助物語の事　二六五
石谷定清御供に參る事　二六六
坪內玄蕃心得の事　二六六
道化清十郎平野與兵衛に對面の事　二六七
谷太郎左衛門物前心得の事　二六七
可兒才藏が事　二六八
石田三成が事　二六八
關白秀次公生害の事附吉田修理が事　二六九
木村常陸介最後の事　二七一
秀吉有岡城へ使者に行れし事附河原林越後山脇源大夫が事　二七一
成田助九郎誅せらるゝ事　二七二
秀吉公連歌の事　二七二
三木牛之介鍬形の詩歌の事　二七四
谷大膳武勇討死の事　二七四
戶川肥後守秀吉公を負ふ事　二七五

黒田如水先見の事　二六六
秀康卿伏見にて妓女國が舞を見給ひし事　二六六
直江兼續が事　二七六
石田三成直江兼續密謀の事　二七七

卷之十二……二八五……三〇七

東照宮細川家の難を救ひ給ひし事　二八五
七人の大將石田を討たんとせられし事　二八六
東照宮上杉御征伐の時近江國水口を立たせ給へる事　二八九
東照宮花房助兵衛に起請文を書けと仰せられし事　二九九
下野國小山にて上杉入庵義論の事　二九〇
渡邊惣左衛門野中市左衛門忍びて大坂に使する事　二九二
上杉景勝會津表手配の事　二九六
兼綱怪高先生に逢し事　二九七
石田が黨東照宮を謀奉らんとせし事　二九八
細川忠興忠告の事　二八一
東照宮小山の途中にて竹を伐らせられし事　二八六
伊達政宗膽氣相馬の城下に宿せられし事　二九七
竹村半兵衛田中長胤を押止むる事　二九九
蛟早城攻の事　三〇〇
森寺四郎兵衛假沼小勘平を討つ事　三〇三
南部越後母衣串をぬかざりし事　三〇四
兼松又四郎一柳の陣見切の事附兼松武功言上の事　三〇四
山田多門兵衛幼年功名の事　三〇六

卷之十三……三〇八……三三一

米田助右衛門見積の事　三〇八
後藤又兵衛決斷の事　三一一
合渡川合戰黑田三左衛門毛付の功名の事　三〇九
小栗又市谷々見廻の事　三一二
神谷小介先登の事　三〇九
秀家花討せんといはれし事　三一三
藤堂玄蕃赤阪町を鎭むる事　三〇九
株瀬川合戰の事　三一三
寺澤廣高加藤嘉明度量の事　三一〇
稻次右近功名の事　三一四
春日九兵衛見積の事　三一〇
淺香庄次郎働の事　三一五
村上彦右衛門先見の事　三一一
土方三九郎武功の事　三一一
林半介殿の事　三一六
伊藤金左衛門三宅平大夫後殿の事　三一六
毛屋主水物見の事　三一七
關ヶ原合戰島左近討死の事　三一八
飯尾甚大夫一騎先駈の事附成合平左衛門が事　三二〇
蒲生備中父子戰死の事　三二一
大谷吉隆平塚爲廣最後合戰和歌贈答の事　三二三
瀧川内記功名の事　三二五
本多正重の事　三二五
梶左馬助御書を認むる事　三二七
田邊甚兵衛幼年功名の事　三二七
辻小作中黑道隨が事　三二七
島津義弘關ヶ原退口の事附大坂の商賈義氣の事　三二八
東照宮勝閲の儀を延べ給ひし事　三二一

卷之十四……三三二……三五二

細川忠興の北の方義死の事　三三二
安養寺門齋三成を生捕らんとせし事附姉川合戰の時門齋生捕られし事井遠藤喜右衛門討死の事　三四四
大津城合戰京極家の士戰功の事附赤尾伊豆が事　三三七
十時傳右衛門山田三右衛門死骸返しの事　三四二
高次大津の城を出られし事　三四二
立花家足輕鐵砲の用意附細川家口藥入吉田大藏猛頭の事　三四四
伏見落城の事附鳥居忠政雜賀孫市を發れし事　三四四
村上三右衛門大島瀨二武者振の事　三四七
三刀谷監物田邊城に籠る事　三四八
田邊城勅命に依て和平の事附細川幽齋古今集傳授の事　三四九
古田助左衛門思慮の事　三五一

卷之十五……三五三……三七八

伊勢國阿濃津城軍の事附佐治縫殿が事　三五三
長東大藏大輔降參の事　三五五
渡邊才兵衛武功の事　三五六
石田三成生捕らるゝ事　三五七
小幡助六郎忠死の事　三五〇
河村權七郎が事　三六一
加藤清正の北の方大阪を忍び出られし事　三六三
淺井曦合戰前田丹羽の將士功名の事附松平久兵衛軍學鍛錬の事　三六四
山田勘六郎討死の事　三六七
黑田如水凶相の馬に乘られし事　三六八
黑田大友石垣原合戰の事　三六九
三宅喜藏武勇の事　三七三

肥後國宇土城攻杉本次郎介夜討の事　三七五
福島家の士大將東照宮を拜する事　三七六

卷之十六……三七九～三九八

浮田秀家八丈島へ配流の事　三七九
小早川隆景遺訓の事　三八〇
佐竹義宣國替の事并車野丹波が事　三八一
杉原常陸智勇の事　三八二
前田慶次が事　三八三
加藤清正治亂を論ぜられし事　三八六
黑田如水豪氣の事　三七七

卷之十七……三九九～四一二

眞田昌幸父子三人始末の事　三九九
四村孫之進武功の事　四一六
出羽國長谷堂合戰上泉主水討死の事　三八五
伊達上杉陸奥國松川合戰の事附永井善左衛門岡野左内が事　三八八
石田が子の僧助命の事　三九五
越後國一揆堀直寄武功の事附千利休が事　三九六
世間太兵衛伏兵を知る事　三九八
但次郎兵衛伊豫國松前城を守る事　四一八
大久保忠佐に三枚橋城を賜ひし事　四一二

卷之十八……四一三～四四七

細川幽齋古歌を書きて忠興を諫められし事　四一三
本多忠勝功名を論ぜられし事　四一三
井伊家の附人連署して直政を諫めし事　四一四
堀秀政が名人太郎といひし事　四一五
大久保忠隣忠直の事　四一六
天野康景廉潔高國寺城を去られし事　四一七
井上正就駿府御使の事　四一八
東照宮諫言を容れ給ひし事　四一八
三河國箭矧橋を修造せられし事　四二〇
山名禪高敝衣を著られし事　四二〇
東照宮禮を正し給ひし事　四二〇
駿府城中へ水を引かんとせられし時の事　四二一
東照宮御中指の事　四二一
金の七本骨の扇の御馬印の事　四二一
加藤忠廣物語并飯田覺兵衛が事　四二二
前田利常戰死の士を弔はれし事　四二二
黑田如水遺言の事　四二四
本多正信加藤嘉明を論されし事　四二五
安藤直次先見并本多正信遺言の事　四二六
台德院殿御行狀の事　四二六
林道春格言の事　四二七
藤惺窩秀吉公を論ぜられし事　四二七
紀伊大納言頼宣卿諫言を歎び給ふ事　四二七
由井正雪反逆の時頼宣卿出仕の事　四二八

卷之十九……四四八～四七一

細川忠興旨の立物の說　四四八
忠興飯河豐前同肥後父子を誅せられし事并肥後が要節義に死する事　四四八
黑田滿德丸稚著の時毋里但馬舞をまひし事　四四九
龜田大隅江戸の石壁を築きし事　四五一
吉岡兼法狼藉太田忠兵衛の手柄并太田武技を論ずる事　四五二
柳生宗矩劍術御師範の事并宗矩先見の事　四五三
板倉重昌肥前國島原の賊追討の事并周防守重宗先見の事　四五五
川北九大夫肥後國川尻を守る事　四五六
水野重長諫言の事　四五九
松野惣太郎前田權之介賞せらるゝ事　四六〇
佐々九郎兵衛經濟格論の事　四六一
不破彦三武備の事　四六二
井伊直孝衣服儉約の事附戰國の時質素なりし事　四六三
永井尙政執政の用意を直孝に問はれし事　四六四
中院通茂公幼宮を教訓の事　四六五
松平信綱恭敬の事附信綱幼年率公の事　四六六
天草の一揆夜討の事　四七七
鍋島榊原島原城先登の事　四七八
黑田勢天草丸を攻破る事并黑田唯鷗武略の事　四七九
水野勝重父子有馬永純本丸一番乘を論ぜられし事　四八一
陣佐右衛門一揆の長四郎が首を取る事　四八三
松野龜右衛門鐵砲修練の事附松野才覺の事　四八四
藤堂高虎阿濃津にて勢揃せられし事　四八五
福島正則領國を召放るゝ始末の事　四八六
明の鄭芝龍援兵を乞ふ事并稻葉正勝諫言の事　四七六
大納言頼宣卿援兵の總大將を願ひ給ひし事　四七七
酒井忠勝直言の事　四七八
福島正則信濃國へ赴れし時の事　四七三
正則茶道坊主が義氣に感ぜられし事　四七八
井伊直孝直諫の事　四七五

目次

墨田川に橋を掛けられし事　四八八
板倉重宗京都所司代の事附板倉勝重器量の事　四八九
重宗訴訟を聞かれし心得の事　四九〇
板倉重矩の事　四九一
毛利勝永大阪に入る事　四九二
池田忠継朝臣士を懷けられし事　四九三
芳賀内藏允武者振の事　四九四

巻之二十一……四九五……五一八

大阪にて台德院殿諸將の攻口御巡見の事　四九五
東照宮志貴野御巡見の事　四九五
小田切所左衛門平野彌次右衛門武者振の事　四九六
眞田が丸を攻めたる時の事　四九七
塙團右衛門阿波の陣へ夜討の事　四九八
木村畑田屋牧野四士武功の事　四九九
木村重成感狀を辭せし說　五〇〇
稻田九郎兵衛武功を語らざりし事　五〇一
細川三齋夜討評論の事　五〇一
大阪城中軍評定の事　五〇一
堀直寄見切の事　五〇二
山本權兵衛功名の事　五〇三
毛利孫左衛門野村越中を詰る事　五〇四
井伊木村挑戰重成討死井伊家臣士功名の事井横田甚右衛門藤堂高虎を激ます事　五〇四
脇五右衛門某氏三彌武功の事　五〇八
增田兵大夫討死の事　五〇九
青木長屋生捕らるゝ事井井伊家赤備の來由　五〇九
藤堂家合戰渡邊勘兵衛功名の事井渡邊始末の事　五一〇
横田佐久間井伊家の陣へ使にゆく事　五一七
片桐丹後守一番首を取る事　五一七

巻之二十二……五一九……五三七

松平助十郎先登戰死の事　五一九
安藤彦四郎討死の事　五二〇
本多忠朝討死の事　五二〇
孕石備前廣瀨左馬助討死の事　五二一
佐竹勢今福口を攻る事井杉原常陸武功の事　四八八
上杉景勝志貴野口合戰の事　四八九
上杉家の士大將に御感狀を賜ふ事　四九〇
井伊直孝陣代の事　四九一
本多伊豆守出陣聯句の事　四九二
東照宮御父子御陣營の事　四九三
後藤又兵衛花房助兵衛見切暗合の事　四九三
廣田圖書が事　五二二
毛利勝永軍配相違の事　五二二
伊藤武藏守馬驗を拾ふ事　五二三
郡主馬が事　五二四
野村越中才覺の事　五二四
長曾我部盛親生捕らるゝ事　五二四
大野道軒生捕らるゝ事　五二六
渡邊內藏助が子城を落ちし事　五二七

巻之二十三……五三八……五五八

直江山城守開覺王に書を贈て訴訟人を斬る事　五三八
安藤直治紀州打の刀を成瀨正成に贈られし事　五三九
土屋數直執政の事井土屋忠直成立の事　五四〇
塚原卜傳劍術鍛練の事　五四一
東照宮松倉市橋堀桑山別所五人へ御遺言の事　五四二
鮭延越前組下に慈愛ありし事　五四三
烏丸光廣卿行狀の事　五四三
中院通村公江戸にて和歌を餝給ひし事　五四三
本多忠義書籍評論の事　五四三
義經の鞍の事　五四四
齋藤織部落武者を助くる事　五五二
澤原孫太郎節義赦免を蒙る事　五五二
丹羽左平太才覺城を落る事附左平太初陣義氣の事　五五三
大阪御陣中御支度の事　五五三
本多落合功を論ずる事　五五四
後藤又兵衛が事　五五四
古田重勝滅亡大河內元綱先見の事　五五六
石川重之功名井隆道の事　五五七
根來法師賞功の定井大澤仁右衛門が事　五五八
大音左馬助先登を論ずる事　五五九
永田治兵衛功名の事附樫井合戰の事　五六〇
於萬の方塙團右衛門を扶持せられし事　五六一
奥平家の士の妻髮を切つて節を守る事　五六一
優婆塞の馬の事附信玄馬を擇ばれし事　五六二
森寺藤左衛門池田家興立の事井森寺政右衛門武勇の事　五六二
伴玄札殉死を止まる事　五六三
番大膳二條城へ使に參る事　五六四

巻之二十四……五五九……五七六

熊澤了介の略傳　五五九
小幡與五右衛門會津神公を諷諫せし事　五六一

水戸義公御事業の概略　五六三
渡邊數馬報讐始末の事　五六五
多賀孫左衛門同忠大夫仇擊の事　五七〇
大久保家の婢女主の仇を擊ちし事　五七三
林田左文銀衛妙手の事井馬爪源五右衛門先見の事　五七五

卷之二十五……五七七……五九一

石井兄弟報讐の事　五七七
尼崎幸右衛門が女親の仇を擊ちし事　五八五
伊丹康勝格言の事　五八九
佐藏直方直言の事　五九一

拾遺卷之一……五九五……六一二

長篠合戰に武田勝頼人數を出す事　五九五
家康公甲の心得御示の事　五九五
家康公合戰心掛御示の事　五九六
小幡景憲物語の事　五九六
野間左馬進田螺を以て勝負占物語の事　五九七
老功の士相言葉物語の事　五九七
家康公駿府にて相討御吟味の事　五九七
柴田因幡守退治上杉景勝出馬の事　五九八
紀伊大納言頼宣卿十三歳にて大阪攻御先手を望るゝ事　五九九
高麗攻南大門合戰物語の事　六〇〇
越前黃門秀康卿伏見御屋敷へ於國を召るゝ事　六〇四
津田長門入道道慶物語の事　六〇四
島原落城の砌平塚勘兵衛比類なき働きの事　六〇四
大阪落城の時細川玄番頭鎧合言上の事　六〇五
伊藤伊右衛門武田勝頼を討しを津田幸庵物語の事　六〇六
塙團右衛門持道具の事　六〇七
筑前岩出城攻秀康御年十四歳にて武勇御心入の事　六〇八
越後浪人大井田監物の事　六〇八

拾遺卷之二……六一三……六三五

家康公駿府御花見の事　六一三
朝鮮攻に後藤又兵衛物見の事　六一四
加藤家足輕具足を著ざる事　六一五
加藤家騎馬武者馬上鐵砲の事　六一六
藤堂高虎家中具足の事　六一六
藤堂家士梅原庄右衛門刺物頻當の事　六一六
濃州源英公の家士西尾右兵衛が事　六一七
高麗陣の時完耳太郎兵衛南大門一番のりの事　六一七
高麗陣清正の家來矢木八右衛門矢疵の事　六一八
大獄院樣日光山繪圖御覽の事　六一八
關ヶ原御一戰御勝利稻次右近高名の事　六二三
上杉浪人門田遣酒之丞物語の事　六二五
丹羽五郎左衛門物語の事　六二六
榊原の家人黑田彦左衛門の事　六二七
淺野左衛門家人永田治兵衛働の事　六二七
信玄豆州韮山とりつめ山縣同心辻彌兵衛働の事　六二七
三州吉田城迫合信玄廣瀨幸を得る事　六二八
攝州花隈城攻森寺清右衛門八田八左衛門手柄の事　六二八
輝政公武將の重寶を示さる事　六二八
家康公尾州小牧合戰御勝利の事　六二九
家康公小牧合戰御自讃の事　六二九
福島正則關ヶ原出陣日柄の事　六三〇
關ヶ原役吉村又右衛門高名を失ふ事　六三〇
關ヶ原役岐阜落城の事　六三〇
關ヶ原役田中兵部大輔長胤の中間水練の事　六三一
關ヶ原役石田三成浮田秀家が諫を用ひざる事　六三一
關ヶ原御合戰毛利秀元戰場にて東方へ返る事　六三三
關ヶ原御合戰終り御詮議の事　六三三
福島正則翌十六日江州佐和山へ向はる處大雨によつて御下知の事　六三三
福島正則牧方面に御旗を立てられ首御實檢の事　六三四
備前少將光政の士上泉治部左衛門具足箱評話の事　六三五
泥川左近將監一益極暑に馬上にて川を渉す時水を飼事　六三五
輝政公岐阜攻具吹右衛門が事　六三六
朝鮮陣の時兵器を塗馬糞にて乾かせし事　六三六
松永彈正久秀が馬の事　六三七
輝政公關ヶ原行軍順見の事　六三七
大河を渉る心得の事　六三七
大阪陣の時利隆武者奉行の事　六三八
大阪役池田の諸士頻當なき事　六三八

拾遺卷之三……六三六……六五八

相國の旗といふ事　六三六
武田信玄相國の旗を用ふる事　六三六
保科彈正信州高遠に籠城の事　六三七
上杉景勝最上義元と合戰の事　六三七
美濃大垣にて八月廿四日より九月四日まで鐵砲迫合の事　六三七
甲州山縣同心長坂重左衛門の事　六三八
信玄小田原發向の時根來法師一番槍の事　六三八

曽の頭心得の事　六四二
上杉謙信馬印の事　六四三
大阪夏陣井伊家の士小笠原傳兵衛手柄の事　六四四
信玄嫡子義信と不和の事　六四四
大阪にて石川宗左衛門江坂清次郎組討の事　六四五
藤堂の士田中權右衛門組討の事　六四五
大阪冬陣上泉義郷指物の事　六四六
東照宮と越前少將忠直卿御不和の起原の事　六四六
大阪の役木村長門守を井伊家へ奪取る事　六四七
松平讃岐守殿具足屋岩井孫四郎物語の事　六四八
米倉丹後が子彦十郎鐵砲疵妙藥の事　六四九
佐野修理亮宗綱長尾但馬守顯長合戰の事　六五〇
上杉彌五郎が事　六五〇
佐久間河内守物語井渡邊内藏助が狂歌の事　六五一

拾遺卷之四……六五九……六八〇

岐阜攻の時川々洪水によつて後藤又兵衛尋問の事　六五九
家康公慶長五年七月會津御發向の事　六五九
秀吉尾州進發の事　六六二
朝鮮陣中加藤清正馬の鞦下知の事　六六四
秀忠公參州田原御狩の事　六六五
細川家鐵砲口藥入の事　六六五
秀吉岐阜攻の事　六六五
源君久世三四郎坂部三十郎へ物見仰付らるゝ事　六六五
豐前國紀伊谷紀伊彌三郎籠城の事　六六六
清正の七腰兵糧を持たずして不興の事　六六七
直江山城守伊達政宗に加勢を乞ふ事　六六八
赤井悠右衛門武勇の事　六六八
源君長久手御馬揃の事　六六九
大阪夏御陣眞田左衛門佐幸村勇戰の事　六六九
大阪夏御陣木村長門守敗北の事　六七一
大阪冬御陣越前忠直卿の手仕寄の事　六七三
信玄の士小幡豐後物見の事　六七二
島原一揆の時寺澤兵庫頭知計の事　六七三
源君御屋從中根左源太勘氣御免の事　六七三
島原一揆の時紀伊頼宣卿明知の事　六七四
大阪陣渡邊圖書卽知の事　六七四
島原攻並河九兵衛足輕下知の事　六七四
伴助右衛門水戸家へ召抱へらるゝ事　六七五
島原落城足輕陣佐左衛門手柄の事　六七六
松山新助の勇將中村新兵衛が事　六七七
大阪攻の時平野村失火安藤治右衛門遲參の事　六七八
城和泉守長盛譏旨の事　六七八

附錄雨夜燈……六八一……七〇二

權現樣豐臣太閤に御對面の時の事　六八一
權現樣花女を御使にて台德院樣へ菓子を進ぜられし事　六八一
新太郎樣夏目氏の忠死を御賞歎の事　六八三
本多三彌木下肥後守義經辨慶を批評せられし事　六八四
板倉周防守大猷院樣へ草鞋を獻ぜられし事　六八四
芳賀内藏允忠功の事　六八四
飯田角兵衛其の主肥後守を諫めし事井新太郎樣備後守樣へ御教訓の事　六八六
松前伊豆守用意の事　六八七
古の名將學問和歌を嗜まれし事井酒和田喜六器量の事　六八八
武邊は律義者にありといふ事　六九二
當靈院樣越後家の訴訟御叡斷の事　六九三
土倉市正中村忠左衛門を勸めし事　六九四
毛利元就大内義隆に諫言の事井熊澤助右衛門格言の事　六九五
稻葉一徹文學に依て死を免されし事　六九六
中院内府幼き宮に後見の事井本多佐渡守謀計の事　六九六
名將たち質素にして下情に達せられし事　六九八
威恩を以て國を治められし事　七〇〇
佐藤五郎左衛門咄の事　七〇一

武林名譽錄

卷之一……七〇七……七一〇

志津が獄蟹江兩處の軍の評　七〇七
江村專齋と七本槍の年齡　七〇七
蒲生氏郷會津に主たる説　七〇八
細川忠興西國を庶幾せし事　七〇八
太閤氏郷問答　七〇九
氏郷山崎右京進問答　七〇九
丹羽五郎左衛門尉長重伊達正宗卿問答　七一〇
加藤左馬助嘉明會津に主たる年齡　七一〇
伊達正宗卿片倉小十郎問答　七一二
江口三郎兵衛朝比奈某問答　七一三
直江山城守景繼金錢を扇にて受し話　七一三
金錢の始　信長公金銀錢を持れし事　七一三
島原陣を眞田信幸評されし事　七一四
恩城攻の事　七一四

常山紀談

杉原常陸を寶盛と稱せし事　七三五
鎧の下に直垂を著せし事　七三六
二本松義繼伊達輝宗を撓めし事

卷之二上……七三一……七三六

竹中半兵衛太閤の組書を裂棄し話　七三一
杉原伯耆守十分一の約束の事　七三三
一色滿信後室の事　七三四
細川幽齋息女教訓の事　七三六
寺澤志摩守堀江宗信問答　七三六
日本傳來の軍法　七三六
蛤貝を割符にして便宜なりし話　七三七
太閤夫婦喧嘩の事　七三八

卷之二下……七三七……七五一

太田三樂小田原攻の評　七三七
京都將軍家御内書の式　七三九
佐竹義久小田原攻の評　七四〇
直江山城守小田原攻の評　七四二
直江乘續本屬の事　七四三
淀君小田原陣下向の事　七四五
太閤伏見にて詠歌の事　七四八
謙信信玄の逝去を傷み三日音樂を停めし事　七四四
濱松にて信玄逝去の沙汰　七四七
田中兵部岡崎城普請の事　七四五
宮部善祥坊の事　七四九
高力清長佛像を守護せし事　七五〇
熊谷家系の事　七五二
島原にて岩上角右衛門主人を止めし事　七五八
榊原左衛門佐島原一番乘の事　七五〇
鹿島の神主音信の事　七五〇
島田次兵衛の事

卷之三上……七五一……七六五

王手權現寶藏文書の事
甚目寺の尼の事　七五一
北條左衛門大夫の事　七五二
波岡左衛門佐顯忠甲州へ使する事　七五四
波岡の北畠家の事　七五九
市橋下總守若狹武田の使者を嘲る事　七六〇
甲斐安藝若狹三國の武田家系の事　七六三

卷之三下……七六六……七八〇

山中鹿助幸盛强盜を捕ふる話　七六六
山中鹿助略傳　七六四
品川狼助勝盛と山中鹿助と富田川の戰　七六六
尼子孫四郎勝久の傳　七六八
島津義久居間の繪の事　七六八
龍伯法印同時の繪師　七六八
黑田勘解由孝高武功の話　七七四
如水軒末期の名言　七七六
馬場美濃守信房軍に五の日付を立し話　七七六
木村七郎右衛門武功の話　七七八
荒木攝津守村重の事　七七八
中村新兵衛武功の事　七七八

目次終

常山紀談序

常山紀談者。備前湯君之祥。紀戰國將士の武功也。權謀の形勢備矣。於馳驅周旋。蓋獨詳焉。世の之君子。動謂兵顧將畧何如耳。馳驅周旋。匹夫之勇。非所尚也。此不稽古者也。不通今者也。三代之世。寓兵于農。卿出爲將。善射御。先士卒。勇敢有力。養之禮義。用之戰爭。士卒亦以武自喜。左氏具載焉。春秋之時。師徒撓敗。至泯社稷。而死者不過千百。則先王之遺也。秦漢以來。文武異官。大將不手兵。兵發於卒伍。雖數立軍功。擢至將萬人。而黥面刺臂。目不識字。士大夫視以爲奴隸。人々不自重。惟以賞罰威之耳。時將亦制陣法。明懸令。以一切立功。終不能使士卒自喜焉。後世之戰。僵尸百萬。功唯數大將。而裨將以下。無一傳名者。兵制異也。故謂先王之世。不尚馳驅周旋者。不稽古也。昔者皇朝。軍團取法隋唐。第異邦の俊民。皆從事科舉。椎魯亡識者。乃爲兵。我邦則公卿世官。州

郡之民不舉朝廷豪傑之士不在南畝則爲兵東夷數叛源氏世將恩義下結武人漸貴保平之後皇綱解紐自鎌倉至室町氏日尋干戈時將皆賴士卒之勇以決勝人自爲戰未暇遑講兵法也至甲越二公稍有節制而士愈益自喜以接勝國名垂竹帛者數百人神祖初起尤名得士一統宇內封建諸侯諸侯亦各建將帥爲卿大夫世其祿位寬永以後有兵家者流潤色甲越遺言以致人舉世宗之其人守一家所傳不用心於將士之談話戰國之事往々失實或又謂戰國時多屢軍立功者故諸將不吝爵祿以畜士太平已久世無喋血有如萬一邊圉有警則莫如遵異邦之法明法令嚴賞罰以率之近世將士之談無所用也殊不知異邦之兵皆卒徒故唯可以法使也我邦士大夫皆出自武騎國家待士養其廉恥使人人自喜平生待以君子則臨事不可徒以法令約束之也故謂馳驅周旋非當世所尚者不通今也士大夫不聞將士之談則無以自勵人君不聞將士之談則無以作士氣在今兵法之要莫先於近古將士之談今列國士大夫莫不學兵法習武藝而不用心於將士之談敎者之過也世多野史志戰國之事眞僞雜糅言無統紀獨湯君折衷百家撮其雋永以垂不朽國初以來未之有也其書務崇節義雖小必錄末又概載國朝太平君臣言行之美以翼名敎蓋其善志也君世仕西藩落々寡合弗爲名計世尠知君者爲人博學篤行器識高邁當世未見其倫此書也行人其庶幾窺豹之一斑矣乎常山備之望也君居有常山樓

明和丁亥九月甲子

龜山松崎惟時撰

予嘗慨往事之棼々若滅若亡傳於今者何寥々哉蓋載籍未備世遠磨滅也夫前言往行者得失之林君子可以觀世矣載藉散泆不獨吾邦爲然而已倚相之丘索惠子之五車向歆孟堅之所錄逞々乎零墜而況吾邦乎於乎室町氏以前亡論已及群雄虓闘竝爲戰國網漏呑舟之魚疆埸多壘采山煮海塞井夷竈狺々乎沐猴哉豐王以竊金黔首攘臂乎草野奮其威詐雷震霆擊鞭笞海内三韓草靡安知非炕龍絶氣紫色擁聲聖王之驅除乎宜哉不祀忽緒其間仁人義士齎志呑憤以沒世者卓行懿範湮盡罔聞豈不悲邪迨吾神祖聰明神武革命創制解民倒懸列朝重熈百年謐如或遇大史氏采簡錄謀臣經國之略武夫野戰之功則何以哉湮盡罔聞豈不惜乎予適每有勝國以來遺逸事得諸敝篋斷簡聞長老黄髮所謂記廼創牘識之往事之焚而閲之其所識多國俗猩擴所憙技擊相高賈勇搏人之談犬鷹之事哉其人骨已朽矣庸何足傳乎後世予於是乎重慨之烏乎保平之間源平迭興上義嫌死尚信伏節習以成性孰與元天之際士無常君國亡定臣朝委質而夕倒戈戎首者乎哉風俗之道士爲政前言往行得失之林君子可以觀世矣是爲序

元文四年己未五月九日

湯元禎

凡例

一　凡此書天文永祿の比より泰平に及ぶまでの事實をあつめしるせり。戰國の時勢、國初の風俗、武人の言行、是皆世を觀る人の尤識るべき所にして、是輯錄の本意なり。明君、賢佐、亂臣、奸賊の勸懲に具ふべき、自ら其中に見ゆれば、必しも評論をしるさず。

一　吾國の士風、源平の世と戰國の世と異同なきに非ず。凡古の風信を尙び、義を尊び、節操を重んじける事ども古き物語に見えたり。戰國の士多くは利名を貪るにあり。今川氏眞の沒落、北條氏政の滅亡の時、死に殉たる人尠し。されば節義の士の姓名散逸せん事なげかしく、つとめて殉難忠臣の姓名をしるせるも、又此書の本意なり。

一　戰國の間紀載詳ならず、相傳る所誤れる事少からず。一事にて異說多きあり、同異孰か是をしらざるは、其說々をも悉しるせり。人の姓名及年月の審ならざるも、只記し傳へ、かたり傳ふるまにしるせるは、比校すべき典籍のなければなり。

一　戰國の武者詞一種あり。物わかれ、くひとめられたるといふが如きこれなり。皆其傳へたるまゝにしるせり。又いひ傳ふる世の詞も其傳ふるまゝにしるせり。文字を脩飾せざる事は、其世代によりて記錄の實不實分明なるが故なり。左傳は其世の實錄にて、公穀の二書は後の世にしるせる

といふも、其詞によりて分るゝ處なればなり。然れども大に謬れるに至ては改しるせるもあり。世人甲をかぶと冑をよろひとよむが如きは皆改しるせり。

一　賞譽すべき事にも非るをしるせるあり。是は唯其世の有さまを想ひ見つべきが爲なり。昔賞譽したりと覺しき事にも、心得がたき事あり。天正年中、肥後の有動を秀吉柳川にて殺されし時、立花宗茂有動が臣の供して來れる新田善良が剛の者なりとて、惜みて告しらせられしに、善良其事を有動にかくして告しらせず、運をひらくべき道なきを知りたればとて、わが主君の明日禍にかかるべき事を告ざるをいかにして其時は褒たりしにや、此は非義の義なるべし。さればかゝる類は此書にしるさず。

常山紀談

巻之一

長尾輝虎越後を治められし事

長尾輝虎のをさな名を猿松と申す。

輝虎始は景虎といふ。後京に上られし時、公方より輝の字を賜ひて輝虎と稱す。鎮守府將軍良兼四代の孫、左衛門尉致經二男村岡五郎忠通が末にて、其後長尾と稱す。後管領上杉の讓を得て上杉と稱す。甲陽軍鑑に、梶原景時が末孫といへるは誤なり。

兄を三郎といふ。猿松あら者にて父爲景の心にそむく。是繼母の讒言故とぞ聞えし。かくて出家にせよとて、下越後の椽原淨安寺に追ひやられけり。金津新兵衛供して米山越にかゝる時、猿松八歳なれば、かちの士脊にかき負ひて山を登り、嶺なる堂におり居て、破籠やうのものとり出しまゐらせけり。猿松遙に頸城府内を眺やり、やゝうち涙ぐみて、我かくおちぶるゝ事こそくちをしけれ。やがて軍をおこして志をとぐるならば、此の山によぢ登り、府内を目の下に見おろすべし。しかるべき軍の地な

りといはれしかば、乳母子なる本條美作守も舌をふるひ、其詞なわすれたまひそと悅びけり。

一說に、爲景、猿松を憎みて其傅城越前守にあづけらる、此時十二歲。それより諸國をめぐりて、風俗を見、人情を察し、地の利を窺ふといへり。

かくて猿松、九年の間、寺にあれども、僧になるべき志なし。天文十四年爲景越中にて討死あり。嫡子三郎暗弱にて越後亂れ、所々を敵に掠奪れたりしかば、父の弔軍せんと思ひ立ち、宇佐美駿河守定行をかたらひ、天文十六年正月十八歲にて元服し、平三景虎と名のり、椽尾の城に旗をあげられたり。三郎是を聞き、長尾越前守政景に七千の兵をそへて攻うたしむ。景虎矢倉にありて、敵は今夜引かへすべき物いろありといはれけるを、定行聞きて、はる〳〵と攻來り、空しく退くべきやといふ。景虎敵に小荷駄なし。久しく圍むべき計にあらず。ひき退かん處を擊たば勝つこと疑なしといはれければ、定行も然るべしとて、夜半に打て出る。果して政景の軍みだれたちて敗北しけり。三郎又打向ふ。景虎柿崎の下濱に陣をとり、やがて三郎を打やぶる。三郎府內をさして引退く時、景虎米山の東阪本にて、我ねむり氣ざしたり、休みて後追ひ擊たばやとて小家に入る。定行あるべくもなし、とく追討ならば破竹の勢とは是れなるべしといへども、高いびきかきて眠られしかば、皆かゝる時を失ふことよとなげきあへり。やゝ有て景虎つと起あがり、三郎の軍兵山を三分の一あなたに越たりと覺ゆ、いざ追討てやとて馬にのり、螺の貝吹たてさせ、龜破坂よりおとしかけ、大に打勝たれけり。定行けふ北るを擊べき時、そら眠せられしは、山を追上らんに、敵をかさにうけなば利あるべからず。敵下り坂になりて引立たるをうたんとの事なり。是老臣等が及ぶべきにあらず。ことしはわづか十八歲、弓箭をとる事、誰やの人か肩をならべなんとぞかたりける。景虎越後を治め得て高野山に出奔せんとす。長尾家の長臣相集まり、景虎なくば國を敵に奪るべし。いざとて關の山におひ行きて、さま〳〵にとどめければ、景虎のいはく、我年わかく威重からず。老臣等我を輕ぜば、國の根本立たず。此國人の爲に利を求むるは、我身の害をまねくなり。是より後吾命を背くまじとならば、神文を書て得させよ。さらずはとゞまらじといはれけるに、もとより君と仰ぎ奉るべきなり。いかで命を叛き申すべきと申しければ、さらばとて立歸り、三郎を隱居させ、是より威をふるひ、越中に攻入りて、父の弔軍をとげられけり。長臣の中に二心ある者を、林泉寺といふ處にて腹切せて國を治められけり。晚年謙信と稱しぬ。

輝虎平家を語らせて聞かれし事附佐野天德寺の事

輝虎ある夜、石坂檢校に平家をかたらせて聞かれけるに、鵺の段を聞きて、しきりに落涙せられけり。かたへの者どもあやしみ思ひければ、輝虎のいはく、吾國の武德も衰へたりとおぼゆるなり。昔鳥羽院の御時、禁中に妖怪ありしに、八幡太郎鳴弦して、鎭守府將軍源義家と名のりければ、妖忽きえぬといへり。其後賴政鵺を射たれども、猶死せずして、井野隼人さし殺してとゞめたりと聞ゆ。

義家鳴弦せしは、天仁元年の事なり。鵯の出しは、近衛院仁平三年なれば、僅に四十六年なるに、武德既におとれる事はるかなり。今又頼政におくるゝ事四百五十年、われ又頼政におとる事遠かるべければ、おぼえず涙の流るゝよとぞ語られける。又相似たる物語あり。附記す。相州北條の幕下佐野城主天德寺勇將なりしに、ある時琵琶法師に平家を語らせて聞けるに、いまだ語らぬ先に、われは唯あはれなる事を聞きたくこそあれ、其心得せよといひしに、法師承候とて、佐々木高綱が宇治川の先陣を語り出たりしに、天德寺雨雫と涙をながして泣たりけり。さて又今一曲前のごとくあはれなる事を聞きたしといへば、那須與一が扇の的をかたる。半に及びて、天德寺また落涙數行に及べり。後日に側に仕へし者どもに、過にし日の平家はいかゞ聞きつるといふに、皆面白き事に覺え候。但し一つ心得ぬ事こそ候へ。二曲ともに勇氣功名なる事にて、あはれなるかたすこしも候はぬに、君には御感涙にむせばせられ候。今に不審なる事と申しあひ候といへば、天德寺驚きて、只今迄は各を頼母しく思ひ候ひしが、今の一言にて力を落したるぞとよ、先佐々木が事をよく心にうかべて見られ候へ。右大將舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生嗟を、高綱に給はるにあらずや。其甲斐もなくて此馬にて宇治川の先陣せずして、人に先をこされなば、必ず討死してふたゝび歸るまじき暇乞して出ける、其志あはれならぬ事かはとて、しば〳〵涙をのごひつゝ、しばしありていひけるは、又那須與一も人多き中より撰ばれて、只一騎陣頭に出しより、馬を海中に乘入れて的にむかふに至るまで、源平兩家鳴をしづめて是を見物す。もし射損じなば、味方の名折たるべし、馬上にて腹かき切て海に入らんと思ひ定めたる志を察して見られよ。弓箭とる道ほどあはれなるものはあらじ。われは毎も戰場に臨みては、高綱宗高が心にて槍を取候ゆゑ、右の平家を聞く時も、兩人の心を思ひやり、落涙にたへざりし。然るに各はあはれになかりしとや。思ふに各の武邊は、只一旦の勇氣にまかせて、眞實より出るにてはなきやと思はれ候。夫にては頼母しからずとなげきけるとぞ。

參河國伊田合戰の事

善德公、（御諱清康安祥二郎三郎殿と世に稱し申す）士卒をあはれみ、勇材おはしませしかば、人々その德になびき從ひたてまつれり。尾張國にむかはせ給ひ、森山に陣せさせたまひしに、不慮のこと出で來て、安部彌七郎弑したてまつりける。植村出羽守、いまだ新太郎一説新六郎と申せしが、十六歳にて御側に有り合せ、彌七郎をばたちどころに誅してけり。御家人はせあつまりて、唯あきれ居たり。植村人々に向て、御敵をば既に切て棄てゝ候。思ひおく事もなし、腹切て御供可レ仕といふ。人々主君のかたきたらん者をたちどころにうちし其功いふに及ばず、これに候者ども、御側にだに候はゞ、誰か御身におとるべき。御身一人幸に御側に有し事、これ神明の冥助とやいふべき。されば腹切て冥途の御供申さん事、また誰かは御身におとるべき。されば各其處存のごとくにふるまひて然る可し。我等は必死近きにあり。今日いたづらに腹きらんとも存せずと答ふ。植村聞て、其必死は如何と問ふ。其時抑われら必死はわづか十日を

過すべからず。殿かくならせ給ひぬと、かたきの方に聞えなば、彈正忠信秀軍勢をひきゐて岡崎に攻來らん。われら爰にて腹きらば、誰か若君の御爲に矢の一すぢもはかゞしく射出すべき。されば われ〳〵が討死は此時に有りと覺ゆ。同じく死せん命、遲速は十日を隔つべし。御身が切腹をしひて とゞめんとにも非ずといへば、植村聞て、げに理かな、さらば人々と倶に同じく討死をせんとて岡崎に引返す。案にたがはず、織田信秀八千の兵を引率して三河の國に打入り、大樹寺に陣どりたり。此時内膳正信安も背き參らせ、上野の城に在て兵をも出さず、昨日まで屬せし國人ども多く心變して けり。引返したる御家人等僅に八百人、わが君に御暇乞して、一同にどつとなきさけびてこそ打出けれ。二手にわかちて伊田のあなたに打て出づ。此人々の義心を神明感じ給ひけん、此所に見え給ひし八幡宮の鳥居の、かたきの方に向ひて、六尺餘りみづから動きけるこそ、不思議といふも餘りあれ。人々大に力を得て、よせ來る敵をまつほどに、此所は、上は霜枯の野路はるかに、下は賤が田の面にかよふ道一とすぢあり。織田家の軍も同じく二手に成りて、上道下道こなたに向ひてよせ來たる。八幡の寶殿の方よりして、白羽の矢ふり來り、かたきの上におちかゝると、見物の人の目には見えてけり。上に向ひし味方、野はひろし眞中にとりこめられ、一人ものこらず討死す。植村下道より向ひてまつさきをかく。味方僅に四百人、四千のかたきを打破り、又上道におし向ふ。野路のかたきも散々にみだれ立ち、信秀からきいのち生きて尾張國に引返す。これ伊田の合戰とて、十倍の敵に勝ちしことためしすくなし。まして大將ましまさぬ軍して、いとけなき君をたてしこと、古今に比類有べからずと、義臣の節操を語りつたへて美談とせり。

近江國音羽城軍の事

文龜三年細川武藏守政元の臣澤倉といふ者、武略ありて近江を半切したがへけれども、蒲生下野守貞秀入道知閑音羽の城に據りて、澤倉と軍す。澤倉、音羽は山城なれば、水乏しからんとて、水の手をとり切たり。知閑敵より見ゆる矢倉の前に馬どもあまた牽出させ、白くしらげたる米を桶に入れ、くみかけて、人々裸になりて馬を洗ふ。澤倉遙に見て、思の外に此城水多し。かくて久しく陣せば兵粮盡なんとて、圍を解て引退く處を、知閑案内はよくしりつ、小倉なはての要害に擊て出で、一同に切かゝり、十分の勝利を得たり。知閑は氏郷の祖父なり。

荒木安藝守討死の事

大永年中細川武藏守高國（入道道永と稱す）三好左衞門督と相たゝかふ。三好桂川をわたりて高國の陣へおしよする。波多野備後高國に怨ありて、丹波の兵を引具し高國に叛き、三好に與しければ、高國の軍敗れたり。高國の將荒木安藝守、百ばかりの兵を引わかち、八々此有さまを見よ、月花酒宴の時の詞には似ざりしよ。恥をしる弓とりなき世なりや。われ只今道永の爲に命をすてゝ恩を報ずべし。さらずは道永のがれたまはじ。此戰場を引退きたりとも、人竝なればあながち獨のみ誹らるべきに非ず候へど

も、義を義とせざるは、弓箭とる身に非ず。各又眞の士となりて、われと同じく義をふまんや。いなと思はんには強べからず、いかにといへば、皆こは口惜きことをも承候。日頃の所存をしろしめさずと覺え候。いかでかかゝる時きたなきふるまひをすべきとて、少しも落ちるべき色なし。荒木さぞあらん。寔に主從の契この世のみにはあらざりけりと打笑ひて、京軍の崩るゝをよそに見て、ひしと折りしき待ちかけたり。阿波丹波の兵競ひかゝるを、間近くひきうけ、われを誰とか思ふ、管領の下に荒木安藝守といふ者ぞと呼り、一同に立あがり、先がけたる敵十人ばかりつき伏れば、しさる處を追たつる事五六十間ばかりを限とし、はなれ〳〵になるべからず、遠く追つめて疲れなしそと、又そこにをりしき、かゝる敵を待ちうけてつきしりぞけ、いく度となく戰ひたるに、敵討るゝ者數をしらず。荒木主從一人ものこらず討死しける間に、高國僅に近江にのがれ得たり。荒木平生士卒を愛するに悃情を盡せり。古の食を分ち衣を解き樂を同し苦を共にするの風あり。少しの功ある人をすてず。ある時荒木がしたしきゆかりある人と、荒木が士のかろき者と俱に、疫痢を煩ひけるに、療養力のかぎりに心を付て、ゆかりある人よりもまさりければ、これを恨みけり。荒木、緣者はわれ問ずとも心を附る人あり。わが何がしは賤し。いやしき者は人おろそかにせん。われ心を盡さずば、療養おこたりあらん。緣者をおろそかにするには非れども、先重き處に心を盡せるなり。無事の時は緣者したしといへども、事ある時は、士卒の切なる故なり。したしき一族ゆかり有とても、陣々わかれたれば、互に死生もしられず。士卒は戰場に死生を共にするものなれば、一人とても本意を失はん事、わが大なる患なりと答へけるを、士卒聞いて、人々恩を思ふ事骨髓に徹せりとなん。

甲斐國韮崎合戰の事

武田晴信父を逐ふの後、諏訪頼茂、小笠原長時多兵にて甲斐に攻入り、韮崎にて一日の中に合戰四度に及べり。晴信韮崎に向ふ時、諏訪小笠原のもとにゆかりある者、原加賀守を始として、あまた甲府に殘されければ、原人々に向ひ、けふの合戰に各たち功名をとぐべきに、とゞめおかれしは二心を疑うての事なり。今日敵に向はずば長く弓箭とる躬の恥とならんいかにといふに、皆二心なく疑を蒙らんより、敵にあひて討死せん事、勇士の志に候とて、我先きにと韮崎にはせ行きけり。此時晴信軍する事三度、戰ひ疲れたる所に、頼茂長時一手になりて進み來りければ、既に危く見えしかども、原が來るに力を得ていさみすゝむ。晴信、原をよびて其志を感じ、日向今井等を後にひかへさせ、競ひかゝる敵に當りて打やぶられけり。是晴信士を激勵すの策にて、わざと原等を甲府に殘されしなるべし。

筧平三郎功名の事

織田備後守信秀、松平三左衞門忠倫と密に謀りて岡崎の城を攻取らんとす。岡崎に泄聞えしかば、應政公甚いきどほらせ給ひて、筧平三郎重忠を召し、上和田に往きていつはりて降參し、三左衞門を刺殺し來れ、偏に汝を賴むよと仰せありしかば、筧承り候とて、上和田に至り、降參する由たばかり

ければ、三左衞門岡崎の士心を通ずるものあれども、覓兄弟を味方にせばやといふ折からなれば、大に悅びて、懇にもてなしにけり。かくて夜深て後、案内をよく見とゞけつ、忍びよりて賜りたる脇差を以て、三左衞門が脇腹を二刀刺してのがれ出る。平三郎が弟助大夫正重も、兄があとをしたひて上和田に至り、隍の中にかくれ居たりしが、待ちうけて打ちつれて岡崎に歸る。上和田の者共追ひかくれども及ばず。應政公感狀を賜はり、羽栗にて百貫たまはりぬ。天文十六年十月の事なり。應政公は東照宮の御父なり。

一說、脇差を賜はりける時、此を以て刺殺すべし。つき貫きたる刄をぬかば、必聲を立つべし。然らばおきあはせ、追ひかけて汝のがれ得じ。つき棄てゝ遁歸れと仰せられしか共、賜はりたる脇差をすてんこと本意に非ずと思ひ、ぬいて出でければ、果して三左衞門聲をあげ、人を呼びける故、各起合せて追ひかくれども、とく逃れ得て歸るといへり。又一說に、平三郎は忠倫が平安城長吉の刀をとり得て歸り、忠倫を刺殺せししと申せしかば、卽其刀を平三郎に賜はりけるともいへり。

佐伯惟常高崎城を乘取る事

天文年中大友義鑑の臣朽網下野親滿謀反して、高崎の城の二の丸を乘つとりてたてこもりしに、佐伯惟常は大友家の旗下なるが、かくと聞き、杵築より馳來りぬ。佐伯平生鷹狩を好む。專かりの爲には非ずして軍だちの爲なり。狩に出づる時、或日途中より使を走らせて士をよぶ。士に將たる者は、騎馬の軍兵を引きつれて卽時に來る。步士又は弓の物主たれば、くみの卒をひきつれてかけ集る。これゆゑ不意の時といへどもさわぐ事なし。半時計の間あれば、數日前より下知せしよりも、陣列整ひてしづかなり。使に走らかす者は、壯なる者を三十人選びて馬の前に打ちつれたり。常にかけ走りになれて息永く足健にして、馬にもおとらぬほどなり。此時佐伯が士杉谷次郎太郎、同次郎三郎とて兄弟あり。相共に一番乘を志し、城の堞いづれの方が上るによろしからんと目をくばりけるに、堞の隅あり。爰に目を附け、直槍の柄を四五所繩にて足だまりを結ひ、一同に攻めかゝる時、杉谷兄弟兼て心を付け置きし所に、始より近づき居て、走りつくと槍をたてかけ、終に登りこえて一番に入りたり。

北條早雲智計の事

北條早雲、盲人は無用の物とて、小田原領分のめくら法師をからめて、海にふしづけに沈めんとせられしかば、盲人皆四方に逃げちりける、其中を潛に間に用ひられしとぞ。

毛利元就嚴島合戰　附盲人間者の事

陶尾張守晴賢、大內義隆を弑しければ、毛利元就陶を打滅さんとはかられけり。陶めくら法師一人を間者として元就の謀をしる。元就始はかくともしられざりしが、やゝ心付きぬ。ある時陶が臣永來丹後の守われに志を通ず、晴賢をうち破ん事近きにありと語られけるを、彼の法師やがて陶に告げたりけり。元就又書簡を贈らる。永來は周防の岩國の城にあり。彼の書簡を山口にて奪取べきやうに支

度せられければ、陶大に怒つて、永來を殺しぬ。元就、彌かの法師を近づけ、平家をかたり習ふと稱しかたへをはなされず。陶傳へ聞きて悅ぶ事限なし。元就又ある夜軍評定せられけるが、敵大軍にて宮島におしわたらばいかゝはせん、是ぞ吾亡ぶべき運のきはめと覺ゆるなり。又草津廿日市におしよせなば、岩國の弘中三河守われに心をあはすれば、裏切させて陶をうち破るべしとぞ語られける。是れは陶を防がん地に、櫻尾の城ならでは然るべき要害なし。宮島に渡らば乘來る船を燒きたて、歸路を塞ぎて軍すべしと思ひける故なりけり。めくら法師かくと陶に告げければ、さらば宮島を攻めなんといふ。弘中三河守隆包然るべからずといへども、陶は弘中が二心を疑ひて聞き入れず。弘治元年十月、四萬あまり大船にとり乘りて宮島にうち渡り、四方を取りかこみたり。元就も今度は十死一生の軍と思ひ定め、吉田の城を出でて、わづかに四千計の兵にて後卷せられけり。こゝに地御前の祝日ごとに蛤船に乘り、宮島に渡りけるを近づけ、心をあはせ、士一人祝のまねさせ、宮島にわたらせらる。陶が者ども元就はいかにと問ふ。祝、さん候元就は、草津廿日市へ陶殿おしよせたまはんには勝利なるべきを、宮島を攻めさせ給ふ故、手だて空しくなりぬとて、火立浦に呆れておはし候が、引返されぬ。元就はひそかに軍のしたくをなし、一手は洲屋明神の前より船よりあがり、天本の御前を多寶如來のかたへを通り、宮島の町口へ向ふべし。一手は吉田、郡山の百姓ばら五千餘に嫡子隆元を大將として、彌山島より西の山々の木末にたいまつを結ひつけ、百姓ばらに手々にたい松二つ持たせ、夜半の鐘を相圖に同時に火をつけよ。吉川元春は船にとり乘り、浦口にかけ並べたる陶が船共を、燒沈めよと謀を定めらる。十月晦日けふ草津に引退くべし。風雨やまずば、元就は今夜火立浦にとまるべし。二日の兵粮を物の具の上につけよとて、小荷駄どもを先返して引退く體にもてなし、日もやゝ暮れければ、俄に唯今宮島へわたり、思ふ敵を討取るべし。とく船に乘るべしと下知し、ひた〳〵と打乘り、篝なともしそ。元就が船の火を標にともへの棍を守れとて、酉の刻ばかりに火立浦を出づる折ふし、北風はげしう吹きたりければ、おひ手の風ぞといさみすゝんで、亥の刻ばかりに宮島の西につきて陸にあがり、船をば一艘ものこらず火立浦に返されけり。元就かのめくら法師をひき出し、おのれゆゑにこそ、けふ年頃の志をばとげつれとて、海中にしづめられけるとかや。隆元は彌山島に打上り、元春は洲屋明神の前より押寄する。小早川隆景はからめてより向ひたるが、一度に鬨の聲をあげ、彌山島の木末に結付けたるたい松に火を付けたれば、陶が軍兵驚きさわぎける處を、元就をめいて先をかけたれば、陶が者ども數百人討死しけり。元春隆景も横さまに進みて、三浦越中守と隆景槍を合せ、三浦をつき伏すれば、内藤内藏允おり合ひて首をとる。弘中三河守も討たれ、陶が軍さん〴〵に敗北しけり。陶も旗本をすゝめて隆景と戰ふ。元就の兵栗屋又四郎眞先かけて討死す。元就脇より切つてかゝり、終にうちかたれければ、陶は引退きて道場山にあり。明くれば十一月朔日、元就諸軍をあつめ、卯の刻より午の時まで十二度の戰に、互に討たるゝ

者數をしらず。陶、終にかなはで自害しけるを、首をとり出して梟せられぬ。討ちとる所の首四千七百八十餘、生どり八百五十餘人とかや。是より西國元就になびき從ひけり。

元就伊豫の河野に船を借られし事

宮島合戰の前、陶伊豫の河野に船をかる。同じ時、元就も又船をかりに使をやられけり。陶は何となくかりたり。元就は只一日かしたまはれ、宮島にわたりて卽戻すべしといひおくられければ、久留島通康聞きて、一言なれど思ひ入りたる處あり。毛利必勝つべき事疑ふべからずとて、三百艘をかしたりけるが、果して陶敗れて滅亡しき。

那須の臣大關夕安深慮の事

野州宇都宮の軍、那須によせ來りけるを擊破り、既に大將をも討取るべかりしを、那須の長臣大關夕安、兵をまとめて北ぐるを追はず。人皆今度宇津の宮をも破るべきにといふを、夕安聞きて、

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月をみるかな

といへる古歌あり。今味方にさせる根本の固もなくて、宇津の宮を攻破らば、小田原より那須を敵とせん。然らばいかにして那須を守りかたむべき。宇津宮をのこして小田原をあひしらはせ、其ひまに那須の根を深く蔕を固くして、小田原を敵にもしつべしといふ。皆人これを感じけり。

太田

太田左衞門の大夫持資は上杉宣政の長臣なり。鷹狩に出て雨に遭ひ、ある小屋に入りて蓑をからんといふに、若き女の何とも物をばいはずして、山吹の花一枝折りて出だしければ、花を求むるに非ずとて怒りて歸りしに、是を聞きし人の、それは七重八重花はさけども山吹のみのひとつだになきぞ悲しきといふ古歌のこゝろなるべしといふ。持資おどろきて、それより歌に志をよせけり。宣政下總の廳南に軍を出す時、山涯の海邊を通るに、山の上より弩を射かけられんや、又潮滿ちたらんやはかりがたしとてあやぶみける。折ふし夜半の事なり。持資いざわれ見來らんとて馬を馳出し、やがて歸りて、潮は干たりといふ。いかにしてしりたるやと問ふに、遠くなり近くなるみの濱千鳥鳴音に潮のみちひをぞしるとよめる歌あり。千鳥の聲遠く聞えつといひけり。又何れの時にや、軍をかへす時、是も夜の事なりしに、利根川をわたらんとするに、くらさはくらし淺瀨もしらず。持資又そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀨にこそあだ波はたてといふ歌あり。波音あらき所をわたせといひて、事なく渡しけり。持資後に道灌と稱す。

雪玉實隆の歌に、雨にきるみのなしとてや山吹の露にぬるゝは心づかじを。抄中後拾遺和歌集云、小倉の家に住みはべるころ、雨ふり侍りける日、みのかる人の侍りければ、山吹の枝を折りてとらせて侍りけり。心もえでまかり過ぎて、又の日山吹こゝろえざるよしいひおこせて侍りける、返しにいひつかはしける。兼明親王、七重八重はなはさけども山吹のみのひとつだになきぞあやしき。

（かなしき）イにある歟

持資京に上りし時の事附かゝるときの歌の沙汰

持資京に上りしとき、慈照院殿義政饗應せんとなり。慈照院殿に一つの猿あり。見しらぬ人をば必ずかき傷ふといふ事を持資聞きて、猿つかひに賂して猿をかり、旅亭の庭につなぎ、出仕の裝束して側を過ぐるに、猿飛びかゝるを、鞭を以て思ふさまに叩き伏せたれば、後には猿首をたれて恐れ居たり。持資猿つかひの人に禮謝して、猿をかへしたり。かくて饗應の日、かねて慈照院殿かの猿を通るべき所につなぎおきて、持資が狼狽するを見んと待たれたるに、持資をかの猿見るとひとしく地に平伏す。持資衣紋ひきつくろひ打過ぎたりければ、唯人に非ずと大に驚かれたるとなり。彼の猿を繫ぎたる戸を猿戸といふ。それより猿戸といふ名はおこれるとなり。

道灌は讒言によりて殺されたり。文明十八年七月二十六日なり。辭世の歌とて世に云傳ふる、かゝる時さこそ命のをしからめかねてなき身と思ひしらずば。松田が家の物語にもかくしるしたり。道灌の和歌の集に見えしは、戰士をいたみし詞にて、康正元年の冬藤澤の役に至り、敵も味方も入りまじり、三日をかさねて挑みあらそふ事に成りぬ。されども、やかたの武威つようして、北條憲定のぬし終に自腹して、餘兵おのが志空しうなり、あるはあだにあたりて、かたみに死するも侍りしとき、藤澤のかたへの松原のむれにてたゝかふ男ありしに、味方中村治部少輔藤原重顯とて、京家の人の世にしづみて、やかたに扶持せられて侍りしになん。敵の男はくりげなる駒にのりて、二つびき輪のぼり龍の紋付けたるさし物なりけり。遠目ながらようひいかめしく見えける。しばしたゝかうて槍をあはせしに、目の前に敵の男つきとめられ、やがて中村が手づから首をとりて、我陣に來りてかう〳〵なんとかたりけるに、いまだ壯年にもたらぬ男の色しろくしてたけ高かるべき心持して、鬚のあたりたゝならずたきしめつゝ哀もいやまし、あだながらにくからぬおも影なり。中村重顯此こゝろばへのやさしき歌ひとつ物して、手向にとすゝめければ、其首にむかひて、かゝるとき云々と見えたれば、松田物語幷に世に傳ふる所は誤なり。

木全知矩連歌の事

安藝佐伯郡に木全知矩といふ者あり、後に宗哺といふ。毛利元就に從はざりければ、かこみ攻めらる。兵粮すでに乏しくなりて、降參をすゝめらるゝに、父祖よりうけ傳へたる城をたやすく人に授くべきやとて、彌服從せず。宗哺は連歌に心をよすると、元就聞傳へて、箭ぶみを城中に射入れさせられけり。

秋風にかたき木またの落葉かな（一説秋風にまだき木またの落葉かな）

やがて射かへしけるに、

よせ來てしづむ浦浪の月

元就大に感じて圍を解きて引返し、程經て和を求められければ、宗哺我より降參せばこそ恥辱ならめ、

此上はとて城を出でけるを、元就ねんごろにもてなし、賓客のやうにせられけり。

輝虎私市城を攻られし事

輝虎武藏の私市の城をかこまれし時、此城は後に大なる沼有て堅固の地なり。本丸を外より見ゆるやうに築きたりけるを打巡り見られしに、本丸より二の廓にうつる廊下の橋、すのこにて作りたるに、地白のかたびらきたる人の影、水にうつろひ見えけり。地白のかたびらといふは、地を白ぐもんを黑く染めたる物にて、其比女の多く著たる物とぞ。輝虎是を見る事三度に及べり。かゝれば、本丸には人質の女童をこめおきつると察し、やがて柿崎和泉に下知して大手を攻めさせられけり。城中あはや唯今攻めらるゝといふ程に、われ先にと防ぎける。其ひまに近きあたりの民屋を壞ち、筏にくみて後の沼に打ちいれ、鬨の聲をあげをめきさけぶ。本丸の女童大に驚きさわいで、二の廓をさして逃げ迷ふ。大手に有て防ぎける兵ども、さては內通の者ありて、本丸を打破られたると思ひ、或は自害し或は降人となる。輝虎の謀によりて、力を勞せずして城忽落たりけり。

輝虎太田三樂が子を質に取られし事

輝虎と北條と武藏の忍にて陣を合す。此時太田美濃守資房入道三樂ひそかに謀を北條に通ず。輝虎かくと聞きて馬副の者も具せず、唯一騎三樂が陣に行きて、三樂が三男安房守十二歲なりしをひしととらへて、よくもおひたちつるよ、いざわが子にせんとて、うちつれて歸られけるに、三樂が軍兵ども、其猛威に恐れて、手さすこともなかりけり。是より三樂も誠に心服したりけるとかや。

卷之二

東照宮大高城へ兵粮を入れ給ひし事

今川義元尾張國大高の城に鵜殿三郎長持を置かれけり。織田信長も所々に城をかまへ、丹家には水野帶刀、善照寺には佐久間左京、中島には梶川、鷲津には飯尾近江守宗定、亦丸根には佐久間大學助盛重をおきて、其外寺部、擧母、廣瀨にも砦あり。大高に兵粮を入れなば、鷲津丸根に貝を吹くべし。寺部、擧母、廣瀨の砦より馳集り、丹家中島より後詰せよとぞ定められける。義元東照宮の御許に使をもて、大高に兵粮を運入れさせたまへとなり。東照宮心得候と仰せて、やがて打たち給ふを、酒井石川等信長の手あてゆゝしく候。中々大高に兵粮入ん事思ひもよらずと申せども、聞しめし入れられず。われに謀有りとて、先づ兵をわかち、福釜の松平左馬の助親俊、酒井與四郎忠親、石川與七郎等四千計、永祿二年四月九日の夜半に、大高、鷲津、丸根をわきになし、寺部の砦へおしよせよと下知し給ふ。東照宮は八百計の兵をひきゐ、兵粮米馬にとりつませ、大高の城二十町ばかりわきにひかへ給ひけり。先陣寺部におしよせ、城中さわぐ處を、一の木戸口打破り火をかけて、また梅坪におしよせ、三の丸まで攻入り、火を放ちて燒立つる。其焔天をてらし、鬨の聲ひゞきわたりて聞えければ、丸根鷲津より是を見て、三河の敵はるゝとふみ越えて攻入りたるは、いかさま故有りと覺ゆるぞ。

とく後詰せよとて、寺部梅坪にかけ向ふ。其間に東照宮麾をとらせたまひ、米おほせたる馬千二百匹打つれて、事なく大高に運入れさせ給ひけり。丸根鷲津に殘る者共是を見れども、大方後卷に出でたればせんかたなし。東照宮やがて軍兵をひきまとひ、岡崎にかへらせ給ふ。人々今夜の謀略及ぶべきに非ずと申しければ、聞し召され、此甚しり易き手だてなり。先思ひもよらぬ、寺部梅坪を攻めて火をかけ、丸根鷲津の軍兵を後づめに出でさせ、ひきたがへて兵粮をはこび入れたりしなり。兵法に神速を貴ぶといひ、又其不意に出づるといへることありとのたまひければ、皆此殿臨濟寺の雪齋に兵書をよみ習ひ給ひしかども、かゝる謀はよも出でじ。天性すぐれて、大將の道を得給へるとぞ申しける。此十八の御歳の事なり。

大久保忠俊の事

大久保藤五郎は越前の人なりしが、武者修行して三河に來り、吾姓をゆづるべきは宇津新八郎なりとて、大久保の姓をゆづりしが、其しるしに功名せんとて、安祥の城攻に先がけして、終に討死しけり。新八郎忠俊、後に五郎右衞門といふ。今川義元討たれて東照宮大高をひかせ給ふ時、夜半に大雨にて士卒みだれけるに、忠俊御側に附きそひ奉り、度々乘返し詞をかけ、人衆を纏めて引き退きけるとなり。

桶はざま合戰今川義元討死の事

永祿三年五月、今川義元大軍をひきゐ、織田信長をうつ。東照宮此時陣せさせ給ひ、丸根の砦を攻め

おとし給ふ。今川家の軍兵も鷲津を攻落し、義元桶はざまに著陣せらる。信長は素より鳴海に打て出で防戦せんとの志也。老臣共大敵なれば、清洲を守り給へと諫むれども聞入れず。酒宴して猿樂に羅生門の曲舞をまはせられし時、敵既に攻來ると告來る。信長少も騒がず、人間五十年下天内を競ぶれば夢幻の如しといふ處を、おし返しうたひて、忽螺を吹立てさせ、物の具して主從僅に六騎、歩卒二百人ばかりかけ出でて、熱田の宮に詣で願文を神殿に納めらるゝ中に、軍兵追ひつゞき來りけり。源大夫の祠より東を見れば、鷲津丸根攻めおとされたりと覺えて、黑烟たち上る。濱手は潮滿ちたれば、笠寺の東の道を一文字にすゝんで、砦々の味方に使をはせ、其兵をひき具し、中島の砦に至りて、我謀は今川の大軍悉本道へくり出し、旗本小勢ならん所へ山陰より切つてかゝり、忽勝負を決すべきと、大音聲にて下知せられしかば、士卒皆きそひいさみけり。旗をしばらせ山かげより桶はざまに打向ふ。義元は駿州の先陣打勝ちたりと悅び、酒盛して有りしに、折しも天俄にくもり、夕だちうつすに似て風雷はげしかりければ、信長の兵かゝり來る物音も聞分かず、不意の戰にあわてたるばかりなれば、水野太郎作清久一番に首をとる。義元の網代の輿を信長見て、敵の旗本疑なしとて、追立て〳〵戰はれしかば、義元も返し合せて戰はれしを、服部小平太槍つけ、毛利新助其首をとりたりけり。左文字の太刀、松倉郷の刀を分捕にすといへり。

信長上京の事

信長桶はざまにて義元を討取りて後、潛に士七八人召具し、京に上り帝都の事ども窺ひ見、それより三好が高屋の城に往きて長慶に望まれけるは、信長が尾張にて領し候地を進らせ候べし。其地にあたる程畿内にてたまはりなば、三好家の先陣たるべしといはれしかば、三好聞きうくべきを、松永彈正諫めて其事止みにけり。此時齋藤義龍信長を殺さむ爲に、士十二人堺の津に出したりと、信長聞きて堺に至り、義龍が士の旅宿にゆき、何義龍が討手とや、にくき奴原なり。汝等一々首を刎ぬべしとて刀の柄に手をかけ、はたとにらまれたる勢に恐れ、あわてゝ平伏しければ、信長散々に罵りて歸られけり。

東照宮大高城を引取給ふ事

義元討死の時、東照宮は大高の城におはせしかば、刈屋の水野下野守信元、淺井六之助道忠をもて、桶はざまに義元敗軍命をおとされ候ひぬ。今川家の城々ども皆あけ退き候。とく岡崎へ歸らせられ然るべからんと告げ申されしかば、はや御歸りあれと人々申しけるを聞し召し、下野守はわが母の兄弟なるは誰もしりたるよ。されども今は敵とわかれたる中なれば、もしやわれをたばからんとの謀なるをしらで、此城を明退きなば、逃走りたりといはれん事弓箭とる身の恥辱、後の世までも笑ひ草たるべし。淺井をおしとめ置きて、味方の告をまちて、後こそ三河へは歸らめと仰ありて、それまでは二の丸におはせしが、本丸に入らせ給ひて持口を御くばり有りける處に、夜に入つて岡崎より鳥井伊賀守忠

吉、義元の變を告げ奉り、今川家の人々も駿州へ引きとる旨を聞し召し、此上は兵をかへすべし。されども夜闇くて亂るべしとて、月の出づるを待ちて城を打出でさせ給ひ、淺井を嚮導に用ひられ、池鯉鮒の驛につかせ給へば、苅屋よりも討つて出で、所々一揆起りけるに、淺井馬を乘りよせ、水野下野守使者淺井六之助案内者たるよし大音に呼はりければ、皆道を開きて恙なく夜中に大樹寺まで引取らせたまひぬ。後殿は大久保五郎右衞門忠俊なり。翌日岡崎に歸入らせたまひけり。淺井をば池鯉鮒より返させ給ひ、後の證とて御扇子をさきて賜はりける扇のほね六本なりしゆゑ、永く淺井が家の紋とするとかや。是より東照宮の信義厚き御事に、人々なつき從ひ奉りける。

武田信玄忍びの者を討たれし事

甲斐のしのびの者數十人、信玄に叛く事有て山小屋にたてこもる。信玄謀にてたやすく討取らばやと思ひ、殘り居けるしのびの者に、城中に忍び入るゝに、いかなるが入り難きやと問はるゝに、内の守りきびしく夜廻りの聲しげく、其體あらはなるはおこたりもまた料り易く候といふ。信玄いま山小屋にしのび入らんはいかにと問はるゝに、かの者ども既に能く其理を知り、靜りかへりて音もせず候へば、其便を得ずと答ふ。信玄それより山小屋に向つて陣し、守り甚きびしく、夜廻り透間なく呼はらせたり。日數を經てやゝおこたり出來ぬる時、山小屋より夜討に出でけるを、素より謀りたる事なれば、伏兵をおきて討ちとられけり。

信玄鹿島傳右衞門を呼ばれし事

鹿島傳右衞門といふ者、伊豆の人なり。わかき頃武名有りけるが、後に髮を薙ぎて久閑と稱し、伊東に引きこもりて居たりけるを、信玄聞きて三千貫の地をあたへて招けり。久閑われ年老たり、何の爲に奉公すべきとて出でざりけるを、尋問ふべき事ありとてしひて呼出し、春より秋まで夜々軍物がたりせさせて聞かれ、自筆とりて是を書きしるされけり。信玄四方に大國の敵ありて威名をふるはれしも、かく心を用ひられし故にや。

備前國龍口落城の事　附浮田直家の事　井岡剛助高名

永祿年中備前上道郡龍口山の城に、最所治部元常といふ者あり。此時浮田直家既に浦上を滅し、直家は和泉能家の孫なり。能家はもと浦上掃部助村宗に仕へ、備前邑久郡砥石の城に居れり。浦上の長臣島村豐後守、後入道して貫阿彌といひしは、應取山の城に有りて威勢ありて、能家を殺害せり。これ享祿四年の事なり。浦上細川高國の加勢として攝州にて討死す。其子與次郎といひしは、幼少にて、居城三石は播州の境敵に近き故、和氣郡天神山に移れり。與次郎は浦上遠江守宗景といへり。年長じて備前皆從ひ美作も半屬せり。宇喜多能家の子を與家といふ。父死する時出奔し、甚惣にて備中邊にさまよひ、乞食の體なりしが、備前に歸り、西大寺福岡のかまへに有りけるを、父に懇なりける阿邊定善といふ者養ひ置き、惣なれば、牛飼わらはとせり。年經て、召しつかふ下女

をめあはせて子三人あり。直家、忠家、春家是なり。天文五年興家死す。三子の中直家八歳なるが、定善が方にあり。弟二人六つと四つになりけるを、笠加の尼寺に、直家の母の姉比丘尼となり居たるに頼みおけり。直家物靜なる生得なりしが、十一歳の頃より、俄に恐昧になりて、誠に菽麥をもわきまへず。天文十五年直家十五歳に成りぬ。母の方にゆけば、母涙を流し、三人中にも兄なれば、せめて人なみにもあれかしと思ひしに、すぐれたるおろかさよ。人なみならば殿に申して草履をもとらせなん物を、いかなる因果にて、かくうきことを見るやらんと打しほたれたるを、直家見て側近く居より、實に恐なるには候はずといふ。母聞きて、汝ほど恐ながらも猶かしこしと思ふやと、いよ〳〵なげく體なり。直家こゝに一の大事あり、誰にもかたらせ給ふな。もし洩し給ふほどならば、其の事叶ひ候まじといへば、母それはいかなる事ぞと問ふ。直家、よく聞かせ給へ、祖父泉州をば島村が殺したりき。父仇を得討ち給はで口惜くこそ候へ、いかにもして一度祖父の弔を遂げんと存ずるに、島村を殺すに過ぎたる事や候。我もしかしこきと島村聞きなば、其儘にたすけ置くべきや。只是のみ心を苦め謀をめぐらし、父祖の恥を雪がばやと存ずるなり。はや十五に成り候ひぬ、殿宗景に奉公仕らんやうをはからせ給へ。かりそめにも、此一大事口に出させ給ふなといひたりしかば、母驚き且悦びて、密に宗景に告げて直家初めて仕へけり。直家かゝる智謀有りしゆゑ、宗景寵愛し、乙子の城をあづけたり。此時三郎右衛門とぞいひける。此比中山備中は沼の城にありしが、宗景の心にそむく事あり。宗景直家に密談す。直家菜は中山が女を妻とし、婚姻のよしみ深き者なるに、かゝる仰を承る事不忠を存ずまじきとしろしめされしならん。力の限はかりて見ばや。只一つの願の候、それをゆるし給はらんやと申す。宗景悦びて何事にもあれ望むべき事、其志にまかせん物をといへば、祖父忠功の者にて候ひしに、島村私に殺したりき。君をかろしむる者なれば、願望まずとも必誅せらるべき者なり。祖父の仇に候へば、ゆるされを蒙りて殺し申さんと告ぐれば、宗景聞きて、島村汝が祖父を殺せし時、予幼かりしゆゑに、島村權威を恣にしたりき。今我もにくみ思ふ處なり。謀よくして、島村中山二人を討つべしとゆるしたりしかば、直家沼の城川の東に茶園畑といふ所あり。爰に茶店を設け、鷹がりに出て、日暮れば此所に入りて臥し、又沼の城にゆきて、いと打とけたるしたしみをなせり。或る時、直家中山に、此川隔りて南の方にまはれば道遠し。茶園畑より直に川を渡らん爲に、假橋をかけさせられよ。常はとり置きて往來の時のみかけなん物をといへば、備中易き程の事とてしかしたりき。直家たばかり得たりと悦びて、宗景に告げて、沼より天神山の間に狼烟をあぐべし。しからば備中を討ち得たりとしられよ。のろしあげなば、島村がもとへ使をはせ、中山謀叛したる故、直家に下知してうたせぬ。とく沼にかけ向ひて、直家に力を合はせよと下知あらば、島村年老いたれども遠く慮るにいとまなくて、一騎がけに沼の城に來るべきを討たん事易かるべしと、日を約しぬ。かくて其日に及びて、沼の鷹狩場に直家有りて、日

暮に成りて城に入り、とり得たる鳥を出し酒宴に及べり。夜もいたく深けぬ。備中も醉たりけり。直家われ今夜は爰に臥すべしといへば、備中が士も座を退き出でぬ。直家打ちふす體にもてなし、思ひもかけぬ不意に備中を只一刀に伐殺し、躍出て大音聲をあぐれば、兼て相圖しける者ども、城下に忍びて待ちかけたれば、われ先にと城内に馳入りしかば、城中何事ぞと驚あへり。川向に伏したる兵も鬨を作り、かの設けたる假ばしを渡りて攻入り、うろたへたる中山が士どもを切伏せ〳〵城を攻とりけり。かくて狼烟をあげしかば、宗景卽島村がともに使を馳せて告げやりしかば、島村きゝてつゞけ者共とて馬に鞍置かせ打乘り、從兵七八人計にて沼の城に來る。城はとく乘りとりたれば、直家本丸にありて門を閉ぢたり。島村かゝる謀有りともしらず本丸に入る處を、かねて計り合せたれば、取圍みて討ちとりたり、島村が軍兵一騎がけにまばらに成りて來るを、道に待ちうけて討とり、やがて兵を出して鷹取山へおしよすれば、防ぐ者なくて退き、ちり〳〵に成りぬ。直家の手だてにて二人を殺し、これより勢強く沼の城に居て、砥石には弟の春家を置き、終に浦上をほろぼして備前を悉平均せり。

沼の城に居て元常と姻類なりしに、元常毛利家にかたらはれて直家に背く。直家うち滅さんと思へども、龍口は峯高く大川麓に繞り、要害よかりければ、力攻にして落べきやうもなく、矢津に砦をかまへ、軍兵をこめ置きたり。直家岡郷介といふ謀ある者に密に手だてをいひ合せ、ある時、直家郷介はしか〴〵の罪有り、からめ來れ首を刎ねんといはれしかば、討手の士行向ふに、とく出奔してけり。直家いつはりて怒る事大方ならず。郷介は備中にかくれ居たりけるが、西郡の中にて乞食の老女の道にふし居たるに立ちより、こはそも不思議にも恙なくおはしけるよ。年比志を盡し尋ねまゐらせしに、行あひぬるこそうれしけれ。されど淺ましの有さまや、さぞ見わすれ給ひたらん。幼き時立ちわかれなつかしの母うへよとてつれ歸りぬ。乞食の女は怪しき事に思へども、俄にゆたかなる躬に成りければ、しらぬ體にてぞ有りける。やゝ有て郷介龍口山の川向ひ、金山寺山の谷山船山の城主須々木豐前がもとに仕へ、尋ね出せる乞食の老女を、おのが母と名づけて人質に出しけり。須々木は故有つて元常と不和なり。ある時須々木が東國より求め得たる黑の馬を盜み出し打乘り、山下へ馳下る。城中より何とて馬に乘るやと呼れども、耳にも聞入れず、枚石川原を東へかけ行きければ、須々木も矢倉に上り、これを見て、にくき奴哉、討ちとめよと下知しけれども、とく川を打わたり、龍口の城に乘りあがり、船山の須々木が士にて候。故なきに死罪にあひ申すべき由を、人のしらせ候ゆゑ遁れ參りて候。あれ見給へ。追手の者ども川向にみちて候。城中にかくされ候へといひければ、元常先山下にかくしおきけり。須々木が士ども岡に詛れたるとはしらず。かの乞食の老女を川原に引出し、歸らずは母を殺すべしと聲々に呼はりけり。岡あの老女は母にて候。今歸りたりとも母子一所に死なん事定りたり。とても棄つべきいのちを君に奉り、此憤りを散じなんといひける中に、彼の女をば磔にし

て殺しければ、郷介悲み怒り、母の仇目前にあり、いかにして此恨を報ゆべきと、齒をかみてなげきければ、元常も心ゆるしてけり。岡あくまでさかゝしき者なれば、年月經ざる中に、元常が密謀をも聞くばかりに愛せらる。岡今は時を得たりと、直家に日を定めて矢津の砦の軍兵を龍口の本丸北の川向に出され、小舟をかくし置かれよと告げやりて相圖しけり。本丸の北の方に閑所の有りけるに、元常軍評定する所なり。其夜も元常は此所の欄干により居たるを、岡つとよりて引くみて下にころび落る。かねて思ひ設けたる事なれば、墜ちつく所にて一刀刺し、其身も打損じければ、元常が首をとりかくし置きたる小舟に乘り、遁れ得て直家のもとに歸る。元常死して後龍口の城落ちたりければ、直家軍兵を入れかへて守らせけり。

又一説に、最所元常浮田家に從ざりしかば、直家與太郎基家に長船紀伊守延原土佐守を添へて攻めさせらる。元常城を出で山の麓段の原に陣して、竹田河原にて軍せしに、勇氣あたりがたく、基家も岡山に引歸せり。城は險阻に據りたり、たやすく攻めがたしと、直家家臣どもと相謀るに、長船紀伊守修理は、武略餘りあれど色を好む病あり。あはれ一手だてして城に入り、たばかり討たばや。されども才智かしこきすくやか者ならでは叶ひがたしとて、しきりに岡清三郎を見やりければ、直家とかく物いはでやみけり。さて程經て直家清三郎をとらへておしこめおき、老臣どもに、清三郎は不義のふるまひあり、首を切れと怒られしに、皆彼幼少より奉公し、今年十六歳に及びて一度も過なしと諫むれども聞入れず。奥に入りざまに岡豐前を招き、清三郎をひそかに落せよ、清三郎にはわれよく謀をいひ聞かせたりといひしかば、豐前かくはからひたり。其あけの日おしこめたる牢をあくれば、清三郎は見えざりければ、驚きたる計なり。豐前は清三郎を盗み出し、龍口の向枚石原に、ゆかりの僧の草庵を結びて居たりしに、頼みてかくし置けり。或時修理城下の流に漁獵せしが、尺八の聲聞えたり。人に見せしむるに、清三郎が有さまを告ぐれば、劍術の師加藤十藏、小性の早川左門彼是六七人、川向にわたりて其樣を見るに、容貌すぐれて美しかりけるが、見る人ありと尺八を納めて庵の中に入らんとしけるを、ひき止めて問ひけるに、宇喜多家の十岡清三郎と申す者なるが、無實の罪によりて已に誅せらるべきを、家老あはれみて爰に隱し置きたるにて候。洞簫は直家の猶子基家堪能にて、少し習ひて候なりと申す。其有さま只人ならず覺えければ、元常打具して龍口に歸りけり。人々敵方の者なり、用心あるべしと諫めけれども、直家さへ恐るゝに足らず、たとへ間者たりとも、われ又彼に付て謀をなさんとて、岡山に間者をやりて事のやうを聞くに、清三郎が詞にたがはざりければ、元常疑ふ心もなく清三郎を寵愛し、軍場におこたり、城上の北の樓に醉臥する事度々なり。赤坂郡和田の城主和田伊織これを聞き、龍口に來て諫むれども聞き入れず。かくて炎熱の比北樓の上に酒もりして、日頃好める尺八をかはるゞ吹きて、清三郎が膝を枕にして睡りたり。清三郎よきひまなれば、首とらん事いと易しと思ひけるか、いかさま過ぎつる比より、

淺からず寵愛したる人を、空しく討たんは人情に非ず、如何せんとためらひしが、いや〳〵仰を奉りて、身をすて〻此城中にたばかり入り、かゝる時を得て私のなさけにかへんも、志にあらずと思ひかへし、元常の脇指をとりて引きよせ、首を打ちおとし、袴をぬぎて首を包み、つゞら折なる道を北の麓に落ちゆきしに、早川左門來りて見るに、元常の尸は朱にそまりたり。大に驚きて清三郎こそ殿をきりたれと呼りて、追ひかけて麓に下りけるが、清三郎は小舟の有りけるに乘らんとせしに、左門追つきたり。清三郎ふりかへりて切合ひけるが、早川が眉間を切つてきり伏せたり。城より追々はせ來りけれども、はや舟に棹さして向の岸にあがりぬ。城兵は上の瀨地藏岩の邊につなぎたる小舟に人あまた取乘つて、おせどもさせども動かず。其内に清三郎岡山にやす〳〵とのがれ歸りけり。直家は清三郎が若年にて事よくとげん事叶ひがたかるべし。生きてかへらん事は思ひもよらず。あはれよしなき謀をしつる物哉と悔まれけるに、豐前清三郎を打連れて元常が首を出す。直家大に驚き且悅び且あやしみて、其功を賞せらるゝ事なみ〳〵ならず。これより岡剛介といへり。龍口には人々齒をかみて怒れどもせんかたなし。和田の伊織を大將として、逆よせに岡山に打てや出んといへども、和田も自らの城をすて〻、無謀の軍すべきに非ず、皆あきれたる計なり。直家其勢を料りて、龍口におしよせたれば、城主を失ひたる者共心々になりて、防戰の術なく、多くは落失せければ、元常が賴み切たる山口與市もせんかたなく、士卒と共に落ちんも面目なしとて、三の廓にて腹切つて死ければ、卽城落ちける間直家火をかけて燒きはらひけり。和田にも是に士卒力を失ひ、落ちちりければ、金川の城の松田が一族とひとつにならんとて、和田の城も一時に陷りけり。又上道郡中島落城と龍口落城と一日の事なり。直家龍口より引返す時、中島の城を取りまかれしに、城主中島大炊無勢にて防ぐ事能はず、榎の大木の洞の有りしにかくれたりしを、さがし出して遂に討たれたり。中島が子孫今にあり。又其時の榎今に有りて、めぐり三丈ばかりなり。

遠藤喜三郎三村家親を打つ事 井備前明禪寺合戰の事

浮田直家近國を攻とらんとす。毛利元就備中松山の城主、三村紀伊守家親に下知して、美作の三星の城を攻めさせらる。直家三村と戰ひなば、隣敵其隙によせ來るべし。謀をもて三村を討たばやと思ひ、遠藤喜三郎といふ新參の士を近づけ、

遠藤はもと阿波の人なりとぞ。此時備前國津高郡加茂といふ所に居たりともいへり。

汝は三村成羽に有りける時、汝も成羽に有りて能く見知りたらん。美作に忍び行き、三村が陣に入りて討たん事をたのむ所なりといひければ、遠藤三村はたやすく討たるべき者に非ず。されどもかゝる仰を承る事面目なり。しのび入りてこそ見候はめとて、作州に赴きけり。弟の修理も兄は今度萬死に一生も有べからず、同じ枕に死なんとて是も打ちつれけり。永祿六年三村は穗村の興禪寺といふ山寺に陣して有りけるを、遠藤兄弟夜にまぎれ、後の竹林の中よりしのび入り、緣の下にかくれ、夜ふけ

てひそかに障子の外に立ちより、内をさしのぞくに、家親柱によりかゝり居たり。天のあたゆる所よと、鐵砲をさし當火蓋をきれば、火なはの火消えけり。喜三郎あきれて居しに、修理つと外に出で、夜廻りの人にまぎれ、かゝりのかたへを通りさまに、羽織の裔に火をつけ、高聲に番の者どもをいましめ、もとの所に行きて、兄が火繩に火をうつせば、やがて三村が胸もとをうちつらぬきたり。其鉛子のあと今に柱にありとかや。此時三村がかたへに三村孫兵衛親成といふ老功の兵有りけるが、ちつともさわがす、人々しづまり候へとて、屏風を家親が前にたて、外の體を聞くにしづかなり。扨は夜討にては無かりきとて物見を出すに、三星より打つて出でたるけしきもなし。親成下知して、今夜備中に引返すべしとて、松山に歸りて後、家親が死したる事を人皆聞きたりけり。親成なかりせば、大に騒で敗北すべきにと人皆いひあへり。遠藤はもとの竹林にかくれ居りしが、三村は死したりと覺ゆるにあまりにしづかなるは、心得ぬ事と思ひながら、忍びて出でけるに、鐵砲をわすれたり。後にうろたへたりと識れんも口をしくて又立歸り、しのび行き、鐵砲をとりて兄弟共に備前に歸りけり。後に一萬石あたへて宇垣の城に居らしめ、修理も中村正崎の城をあづかりけり。家親が嫡子は備中猿掛の城に有り、莊野元祐といふ。二男は三村修理亮元親といひて備中松山の城にあり。父の弔軍せんとて、先謀をめぐらし、備前上道郡澤田の西妙禪寺の砦を攻めとるならば、直家沼の城を出て攻むべきなり。其時後づめして軍すべしとて、すぐりたる軍兵四百人、夜にまぎれ三棹山よりおしよせ、妙禪寺の砦を攻めとり、藥師寺彌五郎、根矢與七郎等を入れ置きたり。果して直家妙禪寺の砦を攻めたりければ、間に入たる者松山にはせ歸りてかくと告ければ、三村願ふ所の幸なりとて、一族相集り、其兵二萬あまり、備前辛川の驛にて兵をわかち、一手は元祐大將にて七千餘を率ゐて萬成山の麓をめぐり、春日明神の祠の前より旭川をわたり、旭山の下より艮に向ひて、三棹山へかゝり、妙禪寺の後卷とす。一手は石川左衛門尉五千計にて首村ひやけばなにかゝり、岡山の北を過ぎ原尾島村に出て、直家が旗本へおしよせ、一時に勝負せんとなり。三村元親は一萬人をひきゐて津島村より國府市場を過ぎて、釣のわたりを越え、四御神村の山を超え、沼の城を攻めとるべしと謀を定めておし入りけり。直家はかくともしらず沼の城を出て、古津の西宍甘に陣して居ける處に、萬成山の砦より敵三方にわかれて押しよすると告來る。前には敵死地を守りて城に籠りたり。又大軍攻來ると聞えければ、いろめきさわぎけるに、直家少しもひるまずあざ笑ひ、此城だに攻破らば、敵は幾萬もあれ蹴ちらしてすつべき物をといひもあへず、冑をとつて著、結びたる緒のはしを刀を抽いてきりて棄て、馬に打乘り二十餘町の田の中を眞一文字に妙禪寺の砦にかけ向ひ、先陣の者共おくれて砦を攻めとり得ず、今旗本にて無二無三にのれや者共と下知するに力を得て、先陣の軍兵をめきさけんで攻めければ、思ひきりたる三村が士ども、引きくみ〳〵討死しければ、直家城に火をかけさせ、三棹山に打上り、山上より遙に敵を見おろしてひかへたり。元祐は春日の宮の前をわたり、玉井宮の前を過ぎ、國富村近く進

みける處に、妙禪寺にて討ちもらされたる者ども落ちきたりて、敵はや三棹山にとり上りぬといへば、さわぎ立ちたる所に、戸川肥後守、花房助兵衛、岡越前守、長船紀伊守等鐵砲をうちかけすゝみ來る。備中の兵亂れ立て國富より德興寺の間にて討るゝ者數をしらず。元祐五十騎ばかり左右にたて勝ちほこりたる敵に向ひ、延原土佐守が兵を追立て、浮田左京が朱の四半に兒の字の馬じるしを目がけ、直家の旗本なりとや思ひけん馳入りて討死しける。首をば能勢修理とりたりけり。元親は四御神村矢津の砦近くすゝむ處に、妙禪寺の煙天をこがしてもえのぼるを見て、すはや城は落ちけるよとひしめきあへり。石川も相圖の皆たがひぬる上は、元親とひとつになりて軍せんといふ所に、浮田元家丸に兒の字つけたる旗山風に吹きなびけさせ、一足もひくなと呼はりておし來り、原尾島を北南へ數度追つ返しつ相戰ふ。備中の兵うら崩して、石川も竹田村に引入らんと、川上へ人數をまとむ。直家兵をおしおろし、高屋村まで進まれければ、石川は八幡村にて取て返し、元家を目がけ二三度火をちらして相戰ふ。浮田の兵あまた討たれ雄町村を東へさして敗北す。元親は思ふ仇をうち得ざるのみならず、いひがひなく兩陣の軍やぶれ、兄も討死しける事口をしく、馬の頭を南にひきむけ、血眼になりて眞先かけ、只死ねやと罵りて、面もふらず戰ひければ、明石飛驒守、岡信濃守此鋒に破られてければ、元親軍は勝ちたるぞとて槍を提げ逃ぐる敵を追たつる處に、國富村にて軍せし長船等横あひにかけ來り、中にとりこめければ、元親敵の中にかけ入らんとせしを、士ども轡にとり付き、今日ながらへ再び兵を起し仇を報ゆる時有るべしと、しひて諫めて引返す。猶おひかくれば取つてかへし、相支て釣の渡りを越え引きとりけり。かくて彌直家を討つて仇を報ゆべしと、志深かりし處に、光源院殿義輝を三好弑して、靈陽院殿の義昭沒落し給ひ、織田信長をたのみ給へども、京には信長村井長門を守護とし、靈陽院殿志伸ぶべきに非ず。備後の鞆に落行き、毛利家をたよられしかば、信長元親がもとへ使を以て、此度將軍にくみせず、西國の通路をふさぎ、織田家に忠を致さば、やがて信長師を出し中國を討平げ、備中、備後を元親に與ふべしと、誓紙を添へていひおくられしかば、元親一族をあつめ將軍家に從ひたりとも、さばかりの大功もあるべからす。殊に浮田家將軍に隨ふならば、兼て思ひ設けたる仇を報ゆる事も叶ひがたかるべし。信長の望む所に隨ひ、將軍を討ちまゐらせ、織田家の力をたのみ、浮田を討滅すべしと謀りければ、皆尤と一同す。三村孫兵衛親成、同孫太郎義兼父子は父の仇を報ゆるに、他人の力をかる事や候べき。弓箭とる躬は忠と孝との二つより外なし。君々たらずといへども、臣は臣たらずば有るべからずとこそ承り候へ。信長たばかりてかたらひて候を、眞實なりと欺かれ、虎狼の如く世に稱する信長に從ひて、將軍を討ちまゐらせ、毛利家を敵になさん事、惡逆不義の名、遁るべからず。信長將軍の威をかりて五畿内を討ちしたがへ、後には將軍をあなどり都を追出すに及ぶは惡逆に候はずや。かゝる人をたのみたまはん事有べくもなしと諫めけれども、元親を始め、皆當家武運をひらくべき時なるに、衆議に背く事よと、人々怒りければ　三村父子はせんかたな

く、成羽に歸りぬ。常山備前兒島郡の城主三村上野介高德、元親の從弟にて高德が妻は元親の妹なり親成をすて置きたらんには、必ず將軍へ告げしらせ、逆よせすべしとて、信長の援兵を乞ひて手始に成羽を攻めおとすべしといひければ、此義に同じて信長のもとに使を遣し、成羽にはたらくべき設をなせり。親成は如何すべきと案じ煩ひたる所に、靈陽院殿より偏にたのみ思召す由聞えしかば、さらば兵をたまはり候ひなば、松山を攻め申すべしと申しけり。かくて安藝、備後の兵七千三百餘さしむけられしかば、天正三年五月二十四日松山へ攻めよする。松山には思ひもよらず、城遂に陷り元親も城を落去りて、阿部山にありけるを、同二十九日討とりて、靈陽院殿へ注進す。

一說、元親城を攻落されし時、升彌助といふ士、元親のあとをしたひて安部山にて追ひつき、元親と名乘り、城に歸りて討死せん、其間に爰を落のびて運をひらき給へといへども、元親聞かず。とてものがれぬ所なり。使者を乞ひて來れ自害すべしといはれしに、再三諫め爭ひしかども、是非共にといひしかば泣々今生の暇乞し、かたみをとりて玉村に有りし元親の母に送りとゞけ、さてそれより城に至り、元親が匿れたる所をしりて告來るにやと、門をひらきければ內に入り、此城を枕にせん爲に來れるよし名のりて散々に戰ひ、あまた切伏せて討死しけり。元親は使者を待たれしに音づれもなければ、松運寺の道に出て鄕民をたのみ城中にいひおくり、使者を待ちかけて自殺せられしといへり。

それより兒島の常山を攻めんとて、毛利家の大將小早川伊豆守光重に三村父子相加り、成羽にて勢揃して、六月四日山村兒島郡に陣し、二手にわかれて、先陣浦兵部宗勝用吉より宇藤木にかゝりておしよせ、六日の朝大手の木戸口へ攻めよせたり。高德は後卷をたのむべき味方なく、殊に累年毛利家に弓矢をとりし三村家の謀主なれば、のがれんと思はゞこそとて、嫡子源五郡高秀と共に鐵砲をうち出す。高德の弟小七郎高重は、箭つぎばやに弓を射出す。寄手此三人に防がれて手負ふ者あまたあり。七日の曉に及びて、城中最後の酒宴の聲城外に聞えければ、われおとらじと攻めよせたり。高德の母我先さき立たんとて柱に刀の柄をむすび付け、走りかゝり、つらぬかれて死しぬ。高秀十五歲御あとに殘らんは心がかりならんといひて腹を切りぬ。二男八つに成りしをひきよせて刺殺しぬ。高德の妹なりしが、藝州鼻高山の城主は高德の弟なれば、そこに落ちゆかれよといへども、思ひもよらぬ事よといひ捨てゝ、母の貫かれたる刀にて乳のあたりをさし通し、同じ枕にふしたりけり。高德の妻は卅三歲なるが、弓箭とりの女房と成りて、最期に空しく死する事や有る。三村が一族と今を限に一軍をせんとて、紅のうす衣を甲の上にきて、薙刀おつとりて出でけるを、局の女どもおしとゞむれば、早とく立忍びて命を全うせよ。敵一人をも討ちとらずして空しく死するやうやあるとて、ふり切つて走り出づれば、此上は誰かのこらんとて、立てたる長柄の槍をとり突いて出る。高德の恩顧の士八十三人、今日を限に切つて出て、浦が七百計ひかへたる眞中に、死狂ひに戰ひければ、討たるゝ者多し。され

ども小勢にて戰ひ疲れければ、高德の妻兵部をよびかけ、腰なる刀をぬき出し、是は國平が造れるにて候。わが家重代の物なり。父にそひ申す心にて身をはなさず候が、武名聞えある兵部殿にまゐらするなりといひて、城に歸り自害す。高德も腹を切れば、弟の高重介錯して、其身も腹切りぬ。寄手亂れて首共をとり、鞆の津に送りけり。常山の山上今に其城跡あり。

上杉謙信小田原へ攻入られし事 附上京の事

永祿三年謙信八千の師を相州小田原に出さる。關東の諸將皆々なびき從ひて、十五萬に及べり。旗本は高麗寺山の麓に陣し、先陣太田三樂は小磯に陣す。北條の兵戰はずして城に引入りければ、逗池まで攻入り、それより鎌倉に赴き、鶴岡の八幡宮に詣らる。上杉憲政の長臣等も皆群參す。成田長安警固の者と爭論の事あり、誅罰に及ぶべきといへども、これを宥めらる。成田、謙信の怒を恐れ病して出ず。（これを甲陽軍鑑に謙信成田を打つとしるせしは非なり）同年六月謙信上京せらる。六月二十八日京都に至り、七月七日光源院殿（義輝）に謁し、吉光の太刀黃金三十枚を獻じけり。光源院殿より管領の任、又諱の字を賜り、兄弟の義に準せらるゝの命を承り、越後に後られけり。

謙信相州に攻入る時、京都より近衞關白前久公を進られ、管領の職を承る事此時より始るともいへり。又鶴岡に參詣し、管領の職に任ず。近衞關白前久公下向ありて、光源院殿の公方より、大和兵部少輔使たりともいへり。孰か是なる事をしらず。又謙信上京の事、三千計の人數にて越後を出られしといへり。光源院殿に謁して後、京堺住吉所々遊覽して國に歸るに及びて、光源院殿に、三好松永謀叛の相あらはれ見えて候。御書を賜はり候ふならば、馳上り誅罰すべき由、密に申されしを、三好松永も察しけるにや、深く恐れけり。程なく永祿七年三好長慶河内の若江にて病死しけるを、松永かくして翌年の春に至りて公方も聞し召し、越後へ御書を賜はりける處に、松永此をや泄聞きけん、いそぎ光源院殿を殺しけるといへり。

新發田治長が事

謙信小田原の蓮池まで攻入り、明日は鎌倉に赴くべしとて、軍評定ありし時、新發田因幡守治長其比十五歳なりしがすゝみ出て、かゝる手くばりならば、一定味方敗北すべしと申す。謙信怒りて、舌のやはらかなるまゝに物ないひそといはれしかば、治長居直り謹んで、けふより君臣の義を絶たせたまはり候ひなば、小田原に馳參り、北條家の先陣して君を追討參らすべし。酒匂川のこなたにてはたやすく討取り奉らん物をと申す。謙信其時色をやはらげ、天晴剛の者よ、神妙にも申したる哉。明日の後殿をせよと命ぜられける。治長軍だてしかぐすべきとて、やがて事なく小田原を引きとりたり。治長後景勝の世に及びて、二心ありければ、景勝これを討たるゝに、新發田五十野兩城を守りて、三年を經て城落ちければ、治長染月毛といふ馬に乘り、三尺五寸有りける光重の刀を抽持ちて、大軍の中にかけ入りて討死しけり。此馬はきはめて色白き尾かみなりしに、茜の汁をはけにて染めた

れば、年月を累ねて後眞紅の絲をみだしかけたるに似たりしとかや。井筒女之助此馬を得て乘りしといへり。又景勝治長を攻めらるゝ時、治長が士に波多野忠左衛門といふ强力の者あり。景勝のよせらるゝ道二すぢの中に、近き方を三淵というて一騎打の嶮岨ありけるに待つて、景勝のうち通られん時、むずと組みて刺殺さんと思ひ、三淵の岩穴にかくれ居たりける。景勝既に打向ふ時、皆口々に近き方よりよせ給へと申す。景勝聞かず、兵法に迂を以て直とすといふ事あり、危き道に不意の患ありといひて、三淵にかゝらず、道をまはりてすゝまれしかば、波多野がしたく空しく成りけり。

信濃國川中島合戰の事

永祿四年七月、甲州に謙信より入れおかれし間者ども、越後に歸りて、信州の士二心ある者あまた有りしを、五月上旬信玄川中島に赴きて死罪に行はれ、是によりて疑を生ずる者多し。又和利が嶽の軍に士卒多く手負討死しける由を告げけるを、謙信聞きて三軍の禍は狐疑より生ずといへり是一つ、勞れたるに乘ずべき是二つ、八月に至つて師を川中島に出すべきとて、士大將を盡く呼びあつめ、各謀を問はるゝに、存ずる旨を書きしるして出しけるを擇びわかちて、上中下の三等とし、其下策を用ふべしといはれしかば、此は如何候べきと怪しみければ、謙信のいはく、上策は既に敵の察する處にて、我を待つべき謀おこたらざる由を聞き、待設けたる所へ攻入らんにいかでか勝つべき。中策は數年評議せし所なり。下策を用ひて貝津の城をふみ越え、西條山に陣し姑く敵の後卷を待たん。是兵を死地に陷るゝに非ずや。信玄おしよせなば、其時勝負を一時に決すべし。もし信玄貝津の城に入らば圍み攻めん。又信玄川中島に陣どりて吾歸路を塞ぐならば、吾軍雨の宮の渡りを渉らず、直に貝津の城に向ひて攻破らんに、信玄必救來るべし。其の時又一戰してかなはずば討死すべし。是下策を用ふるいはれなりとて、八月廿四日西條山におし入り陣したりければ、信玄後卷して暫對陣せられしが、廣瀨のわたりを越えて、貝津の城に入りたりけり。かくて九月九日の晚、謙信士大將をあつめ、明日信玄必打出て戰ふべきよ。今夜雨の宮のわたりをさか寄して、其不意を擊つべし。用意せよとて、寅刻に至りて川中島に兵をおし出す。先陣は柿崎和泉、後陣は甘粕備後なり。果して十日の卯の刻ばかりに、信玄一萬餘の兵を率ゐ筑摩川に打て出で、善光寺の要路に待たれし處に、謙信軍をすゝめて一手ぎりの合戰をはじむ。謙信旗本眞くろになりて切掛り、信玄の旗本をおし崩す。甲斐の兵討たる者數をしらず。かゝる所に西條山の甲州の軍兵一騎がけに馳來るを見て、謙信兵をまとめ勝を全くせられたり。甘粕備後後陣の兵をすゝむるを見て、信玄の旗本ふみとゞまりたるが、又亂れたちて廣瀨のわたりに引退く。甘粕是に因りて、西の川邊に陣する事三日にして引きとれり。

是謙信實記に據りてしるす所なり。川中島の戰異說多く分明ならず。一說に、天文二十三年八月十八日、川中島にて戰あり。謙信旗本半町斗敗北する處に、宇佐美駿河守定行横あひにかゝり、信玄の兵大に亂れ、御幣川へ追入れられ討たるゝ者多し。信玄は川の中に馬を立てたる處に、謙信綠の

墨子にて包みたる肩衣にこてをさし、白き手ぬぐひをもて頭を包み、三尺計の刀を抽きもち、虎のあれたる如くなる鹿毛の馬に打ちのり、信玄は何處に在りやと呼はる。原大隅、信玄何事に爰にあるべきや、うろたへ者よと罵り、槍にて突きけれ共つき外す。謙信川へ馬を乗りこみ、信玄にかけよせ、三刀まで斬られしに、信玄持ちたる軍配團扇も切りをられ手負ひて既に危かりしに、原大隅萩原彌右衛門槍をとりのべ、たゝみかけて謙信をたゝきけるに、馬のさんづにあたり、馬、川の深みに飛入りける。其間に信玄の馬副の者ども、信玄の馬を川岸に引きあげて、物わかれしたりとなり。宇佐美駿河守謙信より賜はりたる感狀にも、天文二十三年八月十八日川中島に於て、横槍をもて信玄のはた本を突崩したる由のせられたり。弘治二年三月二十五日にも、川中島にて軍あり。謙信筑摩川を渉りて夜軍にかゝられしかば、板垣駿河、一條六郎、諸角豐後、初鹿源五郎、輪形月織部、山本勘介を始めとして討死する者多し。甲斐の先陣上の山よりかゝり來り、前後に逼りける故、謙信川を渉りて引きとられけり。此の時に宇佐美駿河守先陣して功あり。又永祿四年九月十日川中島の戰に、武田の先陣敗北す。信玄の旗本を以てもり返し、長尾政景等陣をみだしてかゝりける所に、渡邊越中、一陣衆をこえて槍を入れ、遂に甲斐の軍敗北せし事、皆謙信家臣に賜ひし感狀傳はれり。甲陽軍鑑川中島數度の軍を、附會して一度となすなるべし。又一說に、永祿四年九月十日の戰の事は、謙信の家にいひ傳へたる事なしといへり。然れども謙信の感狀を傳へて、謙信實記と符合するに似たれば、九月十日戰有りし事、疑ふべからず。又上杉義春入道入庵京都に閑居して有りしが、徒然の餘り、甲陽軍鑑をよませて聞かれしに、事實謬れる事のみなり。高坂が死後の事を多く書戰せ、川越の軍も年月大にたがひ、人の姓名も以ての外謬れる事多く、又なき人の名を造りこしらへたるもあり。謙信の世の事は、予よくしりたるに、如此あやまれるなれば、此書更に信ずるに足らずとて、復よますする事なかりしといへり。今を以て是を視るに、甲陽軍鑑過半は贋物なり。又按るに、今の世に專行はるゝ書に、川中島五戰記といへるあり。此書は川中島の戰五度なりと記せり。然ども、其中に疑ふべき事なきに非ず。これも又正しき書とも信ぜられず。謙信鶴岡に詣でて忍の成田を打ちたりしかば、關東の諸將心々に離散し、小荷駄を敵に奪はれ、僅に謙信のがれ得て越後に歸りしと、甲陽軍鑑に記したるも心得られず。關東の諸將なびき從はずば、いかで其年京に上る事の有るべき。是事情時勢の顯然たる事にして、甲陽軍鑑の虛妄論をまたず。

謙信軍中に靑竹を持たれし事

謙信は長さのみ高からず。左の脚に氣腫有りて、あゆむ時足をひく如く見えしとなり。物の具する事は尠く、黑き木綿の胴服を着、鐵にて造りたる小き車笠をかぶり、麾とる事も尠く、靑竹を三尺計にして、杖の如く提げもちて、士卒を下知せられけり。梁の韋叡が竹如意の遺風なりとぞ。北魏の兵、鐘離城を攻めし時、梁より韋叡を以て後援させられけり。北魏の將楊大眼勇將にて、數

萬騎を率ゐて戰ひしに、叡は素木にて造りし輿に乘り、白角の如意を執りて、軍兵を下知し、切りかちたる事、史に見えたり。

謙信松山城後卷の事

永祿五年三月、北條氏康父子、武田信玄父子、數萬の兵を以て武州松山の城をかこまるゝと聞き、謙信八千の兵をもて後卷せられしが、十五日厩橋に著陣あれば、城落ちけると聞えければ、されば是より山の根の城へおしよせ打破るべし。敵後づめするならば、北條武田父子四將の大軍にうち合せて軍せん事、尤望む所なれと、いふより早く利根川を打ちわたりかけたる船橋を切流させ、山の根の城におしよせ、忽攻めおとし、小田助三郎を始めとして皆なで切りにしてけり。かくて使を四將の陣にやりて、松山の城に向はれ候由を承り、出向ひ候に、城早く攻めとられ、軍つかまつる事なくて、弓箭の禮義に背きて候。唯今山の根の城を攻め候程に、後卷や候はんといひ送られしかば、氏康かゝりて軍せんとす。信玄のいはく、今勝ちたりとも謙信には四人してかちたりし人に誹られん事口をしきとて、しひてとゞめて、さて止みけり。信玄實はしからず、日頃謙信の勇氣倍々にても戰ひがたきに、松山の城落ちて怒をふくみたれば、其鋒にむかひがたく、虎を恐るゝが如くなりし故とぞ。

又一說に、此時信玄兵をすゝめ、太鼓を鳴し、軍威嚴然たり。越後の軍兵も物の具し、はや打向はんとせしを、謙信いや〳〵信玄かゝり來るに非ず、引とらん爲なり。馬の鞍をおろし、甲冑をぬいで、休息すべしといはれしが、果して信玄引返されたりといへり。

東照宮一向宗の黨と厚木坂にて御軍ありし事附蜂谷半之丞が事

永祿六年十一月十五日、一向宗の黨と厚木坂にて軍ありし時、一揆より蜂谷半之丞、渡邊源藏眞先にすゝみ、味方には上村庄右衞門、黑田半平槍を合はせ、渡邊黑田を突倒したるに、味方きそひかゝりて追つたつれば、蜂谷も渡邊も引退きて細なはてにかゝるを、水野藤十郎、蜂谷いかにのがすまじと詞をかくれば、蜂谷ふみ止まりにつこと笑ひて、藤十郎いかでかわれらに敵すべきいざ參らんとて、槍を地につきたてゝ、手につばきをはきかけ、さらばといふ水野もふみとめて近づき得ず。蜂谷されば こそとて又しづかに引退く。蜂谷が槍は三間柄の中を少しふとくして、長吉が鍛ひたる刀なるが、勝れて物を貫きけるといへり。東照宮御馬を乘出され、蜂谷め返せと御詞をかけらるれば、跡をも見ずして逃ぐる。松平金助あますまじと追詰むれば、蜂谷ふみとまり、殿なればこそ逃げたれ、御身にはひくまじいというて取つてかへし、金助を五六度もつきしりぞけたりしが、蜂谷槍をなげづきにして金助を突倒す。東照宮蜂谷めとて又御馬に乘りつけさせ給へば、蜂谷引返し逃退きけるとぞ。

蜂谷其後は先だちて一向宗の黨をはなれて降參し、それより人々願ひ申して終に一向宗の黨の者ども罪を御赦有りてけり。其後二連木の合戰に、本多平八郎、牧宗次郎槍を合せけるに、蜂谷少し後れたりしが、蜂谷早とく槍は合せたるに、いかにといふ者有りしを、半之丞聞きて、他人槍をしたら

んに、我は切合ふまでよといひすてゝ、刀を提げて敵の中へ飛込んで、二人なぎ伏せたるに、河井正徳といふ者鐵砲をかまへたる所に走りかゝる。正徳かくれなき手だれにてうちたるに、痛手なりしに起きあがりてそこをば引きとりたれども、蜂谷つひに死しけるとぞ。又此正徳ある時せはしき場にて後殿しける時、後より其手おひ討取れと呼はる。これは正徳生れつき跛なりし故、手負ひたると思ひてかくいひたるなり。其時ふみとまりて、弓箭神に誓ひて手負にてはなし、生得のちんばぞといひけるより、今川家にほめて正徳といひけるとなり。又蜂谷が痛手おひたるを、其老母の聞きて、いかに首尾の有つるぞと問ふ。其さまこれ〳〵なりと答ふれば、うれしや士の戰場に出て、矢にあたるは常の事なり。もし手負ざまのあしかりせば、死したりとも、冥途に面目なかるべしといひけるとぞ。戰國の時婦人の身も弓箭とる家に生れたるは、志す所、大にことなるもの想ひみつべき事なり。

東照宮針崎合戰の事

永祿七年正月十六日、三河一向宗の黨と針崎にて終日のせり合あり。中根喜藏と名のりて一番槍を合す。一揆の相手は渡邊半之丞なりしが、槍をすて刀をぬいて飛込だり。中根も刀を拔き互に手負ひ相引にしける處に、鵜殿十郎三郎渡邊を目がけ追ひかけたるを、渡邊が父源五左衞門たすけ來て、鵜殿を突伏せたるを、東照宮御覽じて御手づから槍を提げ給ひ、槍ぐみたまひて突伏せ給ふ。うす手なりしかば引退くを見て、石川十郎左衞門、渡邊源五左衞門競ひかゝりて、東照宮に向ひ奉る。內藤甚市弓とり直し、源五左衞門が股を射貫きければ、半之丞父をかき負うて引退き、それより物わかれせり。內藤は渡邊が甥なりけれども、御急難の時にあたりける故、射倒したるとなり。

向井與左衞門かへり感狀の事

謙信信玄と和平を結ばんとせられし時、長遠寺の僧を使にせらる。此僧は遊說の人なり。謙信彼僧に、甲斐の士に向井與左衞門といふ者やあると問はるゝに、これ有りと申す。又創の痕やあると問はるゝに、面に刀の瘢有りと申す。謙信のいはく、川中島の戰に名乘りかけて、われを後よりつき通す處を、ふり顧りて一刀斬りたりしぞかし。よもたすからじと思ひつるに、ながらへたるよなとて、萌黃の胴肩衣に槍のあと有るをとり出し、書簡を添へて向井におくられけり。此を世にかへり感狀といふ。其背中に川中島の事をのせられたりといへり。

卷之三

中島元行が母備中經山城を守る事

尼子伊豫守晴久、尼子刑部大賀駿河に兵一萬をそへて備中經山の城を攻めさせらる。此城は中島加賀の守が子大炊助元行が守る處なり。元行僅に二百計の兵なれども、ちつとも恐れず、頓宮次郎左衛門、鷲見九郎二郎に、百姓ばら二百人そへて、寺屋敷といふ地に伏せおき、阿部左衛門二郎、鷲見五兵衛は鬼ケ城といふ處に隱し置きけり。敵侮りて押寄る時、門を開きて討つて出で、相圖の貝をふけば、鬼ケ城の伏兵後よりまはり、又頓宮等百姓に帋旗を立てさせ、竹槍をもたせ鬨の聲をあぐる。尼子が軍兵共前後に敵有りとて、助け合はんとすれ共、道細く谷深く、なだれ落てみだれけり。されども攻具を設けとりかこみしに、元行が母、物の具の上に羽織を著刀を横たへ、女房二十人計相具し、元行本丸にある時は、母出丸を巡り、元行出丸を巡れば、母本丸を守りて、士卒の怠を戒む。或夜風雨甚しかりければ、元行百人計にて夜討に出で、牢を道に伏置きたり。かくて亂れ入り鬨の聲をあげ火をかけて靜に引いて返る處に、敵追來れば、思ひもよらぬ徑のかたへより、伏兵どつと起りて、敵三百餘うち取りたり。元行に防がれて、尼子の軍、引返して復攻むる事なかりけり。

石川數正淺岡某に鞦の緒の結び樣を習ふ事

東照宮今川氏眞と御不快の事起りし時、兼て駿河に岡崎三郎君とゞめおかせ給ひしを、生害すべきよし聞ゆ。石川伯耆守數正、此由聞きて、いとけなき御身の失はれさせ給はんに、御介錯に侍ふ人なからん事こそ口惜しけれ。よし〳〵數正罷向ひて、冥途の御供にこそ參らめとて、唯一人駿府に赴く。かゝる處に、今川家の侍大將鵜殿が子二人生どられ、氏眞なげき給ふと聞き、わか君の御外祖關口刑部大輔と相はかり、若君返させたまはんには、鵜殿が子返しまゐらせんと望む。氏眞悅びて、やがて若君を返し參らす。數正肩にのせ申し岡崎に歸りければ、御家人はいふにや及ぶ、國中の貴賤御むかひに參りつどうて、感せぬものこそなかりけれ。箕形原合戰の時、數正は信長の加勢として、遠州に向ひけるが、武田おしよすると聞きとつて返す。美濃の守護土岐家に有りといふ淺岡の某、弓箭をとりてさるふる兵と聞えしかば、彼が許に行き、此度本國に歸りなば、必うち死仕るべし。數正弓箭をとり、打物とりてかたの如く軍にあふ事度々なり。然れども軍に臨むの日鞦の緒むすばん樣、故實ある事と承りて、いまだ學び候はず。されば死後に鞦の緒とむる骨法しらざりしと、敵に笑はれ候はん事、骸の上の恥辱にて候へば敎を承り度くこそとて習ひ傳へ、夜を日につぎて馳下り、箕形原の軍にも殊にすぐれて武勇をふるひたりけり。其後太閤に狀かれ、岡崎の城を出て上方に登り、豐臣家に奉公す。太閤和泉をあたへ、武者奉行を命ぜられぬ。數正德川家累代の君恩に叛き、一生の忠節武功を空しくす。血氣既に衰ふる時は、是を戒むる事得にありといへる、聖人の言しらざりけるこそうたてけれ。

東照宮三河國一宮城御後卷の事

東照宮三河の一の宮の城に、本多百助信俊を守りにおかせ給ふ。永祿七年五月今川氏眞二萬餘の兵を以て圍まれけり。其中八千を引きわかちて、武田信虎を大將として、後卷の防にせられぬ。東照宮かくと聞こし召し、早うち立ちて一騎がけに馳せむかひ給はんと見えしかば、敵は味方に比ぶれば、十倍もあらん。殊に信虎は聞ゆる勇將に候と、老臣ども諫めけれども、其理は然るべからん。されども人は貴賤にもよらじ、信義の二つによりてこそ、身をたつるならひなれ。敵の城攻めおとし、其まゝ壞ちすてなばさもあらんを、既に味方を入れおきて、今さら敵大軍なればとて驚くべきや。主の大事は從者が救け、從者の危難は主のたすくるは弓箭とる道なり。今は後詰に打まけ、屍を戰場に曝すとも運の盡きぬる所なりと仰せければ、是を聞く人々あはれ賴母しき大將かな。此殿の御爲にはいのちをすてん事、露ちり計も惜しからじと勇みすゝむ。其勢に乘りて二千計の兵にて後づめに打向はせ給ひ、信虎の八千にてひかへたるをよそに見て、眞直に城ぎはにおしつけ給ふ。城中きそひ悅ぶ事限なし。氏眞さらば四方を取圍んで、一人もあまさず討取らんと評定する。其の間に東照宮は百助を召具し給ひ、城を出でて引返したまふ。百助今日の戰は身にかけてはげむべく候とて、手の者四百餘をもて信虎の軍にかけ合せ、打破りて利を得たり。酒井左衞門尉忠次、石川伯耆守數正、牧野右馬允康成は後殿となる。追ひかくる程ならば、忽ち切崩すべき色あらはれて見えければ、氏眞も進み得ず。東照宮事なく歸陣せさせたまへり。此二十二歳の御時なり。

三好松永光源院義輝朝臣を弑する事

永祿八年三好義繼松永久秀、大和河內より京に打入り、五月十九日辰の刻、光源院殿の館をかこみ亂れ入りければ、防ぐ者共、或は討たれ或は自害す。沼田上野介と福阿彌といふ者、敵の相じるし竹の葉を腰に挿して、外よりまぎれいり、光源院殿の御前にまゐり、われ等二人を始として防ぎ箭仕り思ふほど戰ひ候はん。其間に日比愛せさせ給ふ早足の御馬に召され、東川原にかけ出でさせたまはゞ、御運をひらかせ給ふべきと涙を流し申しければ、尤忠義の志神妙にも申つるよ、されども汝等討死したる跡に殘りとゞまるべきやとて、散々に防戰ひて、終に自害ありける、其きはに、

五月雨は露か涙かほとゝぎすわが名をあげよ雲の上まで

自ら筆を把りて書殘し給ひけるとぞ。光源院殿の弟に鹿苑寺の周嵩といふ者有りしが、平田和泉の守といふ者迎に遣し、北山より出たる道にて討取りしに、供せし十三四の童忽にかの平田を討取りければ、世の人ほめあへり。

是釋の義俊光源院殿追善和歌の序に見えて、扶桑拾葉に見えたり。されども童の名見えず。後に信長記を見しに、此人の姓名をしるせり。小川の住人美濃屋小四郎とて、容貌世に勝れしが供したりしに、此變にあひて三條吉則の刀を抽きて、和泉が首を打落し、手もとにすゝむ者五六人切りふせ

て、腹切つて死せしよし見ゆ。

三好實休戰死の事 附光忠の刀の事

三好修理大夫長慶は、細川讃岐守持隆の臣なり。三好は其先甲斐の源氏小笠原の族にて、信州に住せしが、三好長房の阿波の守護として世々阿波に有り。京都に攻上り、細川晴元に代りて五畿内の事を執る。第二の弟を豐後守之長（後實休と稱す）其弟を安宅攝津守冬康、其弟を十河一存といふ。天文二十一年實休持隆を弑し、其後室を己が妾とし、惡逆を恣にす。永祿五年佐々木義弼京に攻上りしかば、萬松院殿は八幡に在りて防ぎ給ふ。畠山尾張守高政佐々木に與し、紀州より泉州にうち出るにより、實休阿波より渡海し、岸和田の東久米田に陣す。久米田寺に橘諸兄公の墓あり。實休墓を掘り石の槨をとり出す。聞く人眉をひそめずといふ事なし。三月五日高政兵をわかち、先陣を額が原におし出す。實休山上より見下し、自眞先に進んで高政が先陣を打破る。槍木山に伏おきたる高政の兵に、根來法師相加り、不意に切つてかゝり。三木内匠一番槍を合せ、實休が先陣敗北しけり。實休は將机に腰かけて引くな者共と下知し、散々に戰ひ殘少く討たれしかば、實休をば根來左京打とりたり。高政大に利を得、河内におしいり、此時長慶が籠りし飯盛の城を圍み攻むる。冬康兄の弔軍を志し、且長慶を救はん爲に、岸の和田を打出で高政と藤井寺の南薬引野にて軍あり。冬康勝利を得たり。實休討死の刀は光忠が作なり。信長光忠が刀を好み、二十五腰まで集められしが、堺にて第一の好事木津屋といへる商家に、かの光忠の刀を殘らず見せて、此中に實休光忠や有ると問はるゝに、一腰取出して是ならんといふ。信長何とて見しりたるやと問はるゝに、切先の少缺けて候は實休討死の時、根來左京を刎られしに臑あてに當りてかけたると承り候と申しければ、信長よくしりたりといはれしとぞ。

實休討死の時、長慶は飯盛にて連歌せしに、告來る。○すゝきにまじる芦の一むらといふ句、人々附わづらひたりしに、其書を披きてとかくをいはずさしおき、○古沼のあさきかたより野となりて附終りて、さて實休討死なりと告來れり。今日の連歌是にて止むべしとて、さて兵を出されしとなり。

信長都に攻上るに及びて、松永は降參し、三好長慶が養嗣義繼は河内にて自害し、三好の家滅亡せり。

一說、實休は泉州岸和田に安宅攝津守冬康に守らしめたり。畠山高政は紀伊國廣浦といへる所に流落の體なりしが、熊野根來寺の法師をかり催し、岸和田へおしよする。實休後卷せんとて渡海し、堺の津にて勢揃せり。高政岸和田を攻めんとする兵を、城の上なる山に引取、城を見おろしたり。四國の兵は篠原右京進長房、一の宮長門守成助等岸和田の大手に陣し、實休旗本は久米田に有りしに、高政が陣を見て、高政は東をさして引退くと覺ゆ。遙々爰に來て、討漏らさん事口惜き事なり。山上へおしかけて、一騎もあますまじと下知するを、攝州高槻の城主入江左近大夫鹽田采女正二人、京よりの使として來り居しが、敵を小勢なりと見て、左のたまひ候へど、今巳の時なり。高政軍配

よし、味方の爲には大凶なり。唯今かゝらば十に十敗北すべし。暫時を移し東の谷より二手にてあひしらひ、午の時に及びて軍を進むるか、又敵を南山へそびき出すか、此二の間に過ぎじといへば、實休心安かれ時を過さば、敵に利有るべし。切つてかゝりなば、あれなる山を尾傳に東北へ下るべし。左なくば南へ下り、右の尾先へ引取るべし。入江鹽田二手に兵少ければ、篠原をさしそへなん。打つれて伏兵になられよ。高政夢にも知らずして、東北の道に出でなんを待ちかけて討たば安かりなん。高政もし物見を出して見付くるほどならば、南の山に登り、横合に突きかゝられよ。高政は籠中の鳥なりとて、二人の詞を用ひず。入江等東北の山際に進んで待居たり。實休は篠原が兵をもて高政を誘かせけるに、長房勇みかゝりて進みゆく。山の上より根來法師成田玄齋雜賀孫市に、實休旗本僅に見ゆ。左へまはりて切つて掛り、勝敗を一時に決すべし。阿讃淡の三國の兵を引請けて一手立なくはあらじ。もし實休をうちもらさば、ともに戰死すべしといへば、孫市仔細にや及ぶとて、山を下り立ち、眞一文字に實休旗本におしかゝり、忽實休を槍だまにあげて討取りたり。鹽田等は敵をまてども見えざれば、いかにと思ひ物見を出す所に、實休討死を告來る、さらば高政が陣に切つて入り、討死せよとてかけ向ひけるに、勝にのりたる敵をかさに受け、鹽田も討死しければ、殘る兵ども堺をさして敗北しけり。これ永祿五年壬戌三月五日、久米田合戰にて、實休三十六歳なりといへり。

浦兵部功名の事

毛利元就豐前門司の城のかこみを解て引返されし時、大友宗麟の士大將瀧田民部只一騎波うち際に馳來る。小早川隆景の士浦兵部宗勝船をさしもどし、陸にあがり瀧田を討とりて歸る。遠く是を見る人誰ならんといふに、元就只一人陸にあがりたらば、必兵部なるべしといはれしに、果してたがはざりけり。井上伯耆と浦と二人勇名世に高し。二人ともちぎれたる物の具をきたり。又定りたる得道具もなく、瀧田を討し時も人の槍をとりて返せしとぞ。

中村新兵衛永原安藝守一騎打の事

佐々木と三好と軍す。佐々木は糺に陣し三好は赤山に有り。三好使を以て、中村新兵衛といふ剛の者あり。われと思はん人あらば出されよ。人まぜもせで戰はせんといひしかば、佐々木が内にて江州にかくれなき永原安藝守といふ者をすぐり出す。修覺寺村石地藏の前に出あひて、永原は直槍中村は十文字の槍にて散々に戰ひけるが、永原を突伏首をとる。中村は近江國の人なり。一日に槍を合する事十七度、首四十二級を得たる事有りければ、世に槍中村と稱しけり。

永原を討とりし時、室町將軍靈陽院殿義昭江州矢島にて是を聞し召し、感狀に朱塗の物の具朱柄の槍をそへて賜りけるといへり。一說に攝州を半分領しける松山新介が士にて、唐冠金纓の冑をきたりといふ。

北條綱成地黄八幡の旗を捨る事

相模の深澤の軍に、北條家の先陣の大將北條左衛門の大夫綱成敗北してすてたる旗を、ひろひ取て譏りけるを、信玄聞て、逃走てきたなく棄てたるに非じ。必地利をはかりて戰を心がけたるならん。旗を棄しは旗さしの罪なり。いかでか嘲りわらふべきとて、眞田一德齋が末子の源次郎に、左衛門の大夫が武勇にあやかれとて、かの旗をあたへられけり。練絹三幅くち葉地黄にて八幡といふ二字を染めたる物にて、世に地黄八幡ととなへしなり。左衛門の大夫かくと傳へ聞きて、信玄の詞にて恥辱を雪ぎたりと悅びけり。是信玄遠き慮ありてかくはいはれしなり。左衛門の大夫は其比すぐれたる勇將なれば、嘲りわらはるゝと聞きて、必死の軍するならば、其鋒支がたしと察せられて、其憤を散せん爲とぞ。

柴田勝家水缸を破りて城を守りし事

永祿十二年佐々木承禎、柴田勝家が守る所の長光寺の城をかこみて攻る。遂に惣がまへを打破る。勝家本丸に有りて、爰を專途と防戰ふ。鄕民佐々木が陣にゆきて、此城は水の手遠く遙なる所より水をとり候。それをとり切る程ならば、城は保つべからずと告げしらせければ、承禎悅びて水の手をとり切りたり。城中是に困めども、よわれる色をあらはさず。承禎これを見んために、和平せんとて、平井甚介を使にして城中に入れたり。平井勝家に對面し手水を請ふ。缸に水みちたるを小姓兩人してかき出たるに、平井手を洗ひければ、小姓殘れる水を庭にすてたり。平井歸りてかくと云へば、事のたがひたる故にあやしみあへり。かくて城中既に水竭きければ、勝家明日は討て出で、切死にせんとて諸士をあつめ最期の酒宴す。殘れる水を問へば、二斛計入るべき缸をかき出す。さらば此間の渴をやめよとて、人々汲のみてければ、勝家眉尖刀の石づきにて缸を碎たり。夜明方に門を開き打て出る。佐佐木思ひもよらざれば、大に敗北しければ、勝家首八百餘級を得て岐阜に獻ず。勝家は猶長光寺にあり。信長感狀をあたへ賞せらるゝ事大方ならず。是より勝家を缸わり柴田と世に稱しける。

勝家先陣の將となる事

信長勝家をもて先陣の大將とす。勝家かたく辭すれども、再三しひて後仰を承りぬとて退出する時、安土の城下にて信長の旗本の士に遭たりしに行きあたれり。勝家無禮をせめて遂に切てすてたりければ信長怒られけり。其時勝家謹で申けるは、さればこそ先陣をば是非とも辭し申したるなれ。仔細なくて辭し申べきや。先陣の大將たる者威權なき時は下知行はれざる物なり、いかにといへば、信長詞なかりけり。

坪内某料理の事

三好家滅し時、料理庖丁の上手と聞えし坪内某といへる者生どりとなりしが、放し囚にして有りしに、年經て後菅谷九右衛門に賄申ける市原五右衛門、坪内は鶴鯉の庖丁は云ふにも及ばず、七五三の饗膳の儀式よくしれる者なり。其上子ども兩人は既に奉公申候へば、ゆるされ候て、厨の事を司らせ申

さんといひけるを、信長聞きて明朝の料理させよ、其鹽梅によらんとなりしかば、則坪内をして膳を出させけるを、信長食して、水くさくてくはれざるよ、それ誅せよと怒られしかば、坪内畏り、承り候。今一度仕らん。それにても御心に應せずば腹切んといへば、信長許容せられけり。さてその翌日膳を出しけるに、味のうまき事殊の外によかりければ、信長悦びて祿あたへられけり。坪内辱き由申して、さて昨日の鹽梅は三好家の風なり。けさの鹽梅は第三番の鹽梅なり。三好家は長輝より五代公方家の事をとり、日本國の政をとりはからひぬれば、何事もいやしからず。其好む所第一等の鹽梅を昨日奉りければ、いやしみ給ふ事ことわりなり。けさの風味は野鄙なるゐなか風にて候へば、御こゝろに入たるなりといひければ、聞く人、信長に恥辱をあたへたる坪内が詞なりといひあへり。

大澤左衛門が手の者ども東照宮を窺ひ奉りし事

永祿十二年四月、東照宮濱松に歸らせ給ふ時、

これは今川氏眞を武田信玄攻落し、氏眞ときの山家に引きこもりけるを、東照宮父義元のよしみゆゑに、遠江をば德川家よりをさむべし。信玄にとられたるよりはまさるべきなり。さらば小田原と相はかりて、兩旗にて信玄と軍すべきと、氏眞に仰せられしかば、忝由申して掛川の城を德川家にわたし、氏政信玄薩埵山にて對陣足輕せり合有り。東照宮の先陣駿河へ攻入り、山縣三郎兵衛を追おとしければ、信玄前後にとりはさまれて勝利有るまじきを計りて、甲州へ兵を返されけるゆゑ、東照宮も御歸陣なり。

堀川の城を打過させ給ふ時、大澤左衛門尉

これより前永祿十一年、東照宮遠江を過半治め給ひし時、降參しけるものなり。

が手の者ども、去年よりおちぶれたる面々相計り、尾藤主膳村山修理南人を大將にして、堀川にひそかに一揆をかまへ、通らせ給ふを待ちかけて、討ち奉らんとしたくしけるに、それをしろしめさずして、七騎にて打過させ給ひぬ。一揆どもあまりに騎馬の少かりければ、かくともしらず其あとより石川伯耆守數正通りけるを見て、さては先に通らせられしにや、たやすく討べき物をと悔みけるとぞ。創業の人君天の佑おはしけると覺えたり。其後堀川の一揆を攻らるゝに、此城潮のさしたる時は、船の出入自由なるに、折しも引潮にて唯一方口の城なりしかば、落べきかたなくて皆討とられけり。

清洲にて東照宮信長公御對面の事

永祿十二年尾張の清洲にて、東照宮信長に始て御對面の時、他の刀持たる士式臺にとめたるに、植村庄左衛門家政御刀を持て通らんとす。これをもおしとゞむれば、德川家の士に誰が下知にて止るやといひすてゝおしとほり、御前の白洲に參りたるを、信長見て何者ぞと問はるゝに、東照宮わが士にて候と答給ふ。信長植村は聞ゆる勇士なり。今日の會は大事に非ず、心安かるべし。あつばれよき士あまたと感ぜられける。庄左衛門後出羽守といふ。

信長公伊勢の國司を亡し給ひし事

永祿十二年信長伊勢の國司北畠中納言具敎を大河内の城に攻る。數月經て城強くしてちつともひるまず。信長織田掃部介を使にして、信雄を以て具敎の子具房の養子として和平すべしといはせられしかば、人質をとるに同じとて和平事なりぬ。信長岐阜に歸り、二男茶筅丸十二歳なりしが、士あまたつけて伊勢に行く。大河内に至て國司に對面し船江にあり。具敎は世を具房に讓りて三瀨といふ所に閑居せられしが、尙信長に背く志ありければ、信長國司の家の者共をかたらひ、天正四年十一月廿五日三瀨にて弑しけり。具房は信雄の養父なれば、河内におしこめて置きけるが、天正十六年に死去、その元祖親房卿より具房に至て十世に及ぶとなん。具敎の弟南都東門院の住僧なりけるが、具敎弑せられけるを聞き、南都を出て伊賀に赴き、還俗して北畠具親と稱し、三瀨河股多藝小梨の諸士をかたらひ、仇を報ぜんとすれども、利なくして中國に流落し、毛利家をたのみ備後の鞆に居たりけり。具親兵を起す時、天正六年信雄の兵波瀨峯の城を攻おとす。六呂木山副波多瀨三郎此三人を生どりたりければ、死罪にすべきと議せられしに、三郎が容貌世にすぐれしかば、信雄たすくべしといはれしを、三郎聞て三人同じく生どられ、罪又相同じ。二人死して一人たすかる事面目なし。共に誅せられ候へといふ。二人は年老ぬ、惜むべき身に非ず。三郎は仰に從ひ候へとすゝむれども聞入れず。遂に三人共に磔にかけらるゝ時に、三人君の御爲に命をすつる事士の思ひ出、面目是に過る事無しとて謠をうたひ物語して誅せられけり。三郎此時十五歳、をしまぬ人なかりしといへり。玉井新次郎といふ者、具親に心を合せ信雄に背しが、父兵部少輔と母ともに神戸にかくれ居たりしを、搜出して柳田河原にて磔にせらる。兵部少輔子の新次郎を呼びて、汝今度君の御仇を報ひ、北畠の家を興んと志しける事、士の本意、吾生前の悅びなりとて、水を乞ひて父子三人盃をくみかはして、其後殺されしとぞ。織田家の刑罰仁者の道にあらず、其暴逆終を全せざる事尤ことわりなり。

大久保忠隣功名の事

永祿十二年今川氏眞、遠州掛川の城沒落の時、天王山にて合戰に、大久保治右衞門忠佐敵をつき伏せ、甥の新十郎忠隣に、其首とりて汝が功名にせよと呼はりければ、忠隣十七歳なるが人のぐれたる首何にかすべきとて、敵の中にかけいりて首をとる。箕形原にて諸軍散亂して東照宮につき奉る人少かりしに、御側をはなれず。後は步立にて御供しけるを、小栗忠藏敵の馬をとり來て、それに乘れと仰有て、其馬に乘りて御供申けり。後に相模守と申せしは此人なり。

高木主水村越與三左衞門後殿の事

遠州にての事なりしが、何れの時の軍にや、東照宮の御內に高木主水清秀村越與三左衞門とて、聞ゆる兵二人、味方にはなれ細なはてをしづ〳〵と引退く處に、敵十騎計追ひ來る。高木槍おつとり直し、一足も引まじきぞと呼る。村越弓に箭をつがひ槍わきを射ん。心づよく槍をせよといひければ、敵し

らむ故、兩人又退く。かくする事數度に及べり。かくて左右沼にて一騎うちの地になりて、こゝぞよき所といふほどこそあれ、高木ふみ留り、先がけたる敵をつき伏すれば、村越大音あげ、其首とれといふまゝに、敵一人射倒す。敵ひるむ所を高木いさみ進んで、又一人つき伏せければ、村越も又一人射倒して、それより追はざれば、心しづかに引きとりけり。

清秀は水野下野守信元に屬せし時、三州苅屋の戰に度々功名あり、後德川家に仕ふ。水野に屬せし時、石が瀬といふ所にて、三河の兵と槍を合する事一日に七度、石川伯耆守十七歳にて內記といひしが、互に名のりて槍を合せ、相引にしたりけり。長久手の軍には、清秀內藤四郎左衞門武者奉行たりき。清秀老年の後、關が原の時隱居せしが、野州小山へ參りければ、度々の功名を仰せられ、台德院殿錦の御羽織を賜はりけるとぞ。戰國の時も一日に數度の槍は罕なる事なり。高天神小笠原與八郎が士林平六郎遠州豆大寺にて六度槍を合せ、信玄伊豆韮山を放火し、山縣をおさへに置かれしに、城兵打て出で、引とり口に三河の浪人河村傳兵衞、白四方に船の字のさし物にて敵を追ちらし、槍を合はする事一日に六度といへり。

太田下野識鑒の事

太田三樂が內に太田下野といふ士よく人を識る。その詞たがはざりしかば、三樂いかなる故ぞと問ふ。下野別の仔細も候はず、たとへば連歌する者の古歌を覺え候は、わが連歌の益にせんとなり。士の功名を志す者も又しかなり。其人々の嗜好所によりて察候へば、十に八九はたがひ候はぬものなりとぞ答へける。

北條丹後指物の事

北條丹後一尺四方の白練に、黑き蟻を繪に書きて指物にしけるを、謙信見て、汝がさし物あまりに小きはいかなる仔細ぞと問るゝに、丹後誠に味方よりは見えがたく候べし。さはあれども進むに先がけし、退くにいつも後殿せんに、他人の大なる指物も、此小四半と敵の見る所は同じからんと存ずるなりと申せば、謙信ことわりなりといはれしとぞ。

淺井長政齋藤龍興と軍の事

淺井備前守長政、玉淵川をかぎりて齋藤龍興と軍す。ある時長政五百計の兵をすぐり、關原野上の宿に火をかけ、樽井の前なる小川に柵の木ゆひて待ちかけたり。龍興一萬計にて出づると、長政聞きて百人計を菩提の徑より敵の後へまはらせ、自四百計を以て敵のおこたるを夜討にしたりけり。徑よりの兵もはせ來り、思ひもよらぬ所より鬨の聲をあげしかば、龍興內通の者あるよと思ひ、あわてゝ岐阜にひき返す。長政大垣の邊所々に火をかけさせければ、龍興敵勝に乘て大垣を攻るならん。いざたすけよとて岐阜を出でしかば、長政やがて引返す時、足輕の物になれたるを三十人樽井の土民の家にかくしたり。龍興樽井に入りて士卒も疲れしかば、兵粮つかうておこたりける時、かくしたる足輕ど

も、所々に火をかけて燒たつる。長政思ひもよらぬ所へおしよせて、散々にうち破り、やがて南宮山に登りて敵をまつ。龍興二度まで敗北し、口をしく思ひて、四面をとり卷きて、あまさずうたんとおし寄せたり。長政見て敵は大軍なり、十死一生の戰とは是なるべし。わが下知なき內は、箭の一筋も射べからずといひて、攻めかるゝを待ちて、山の上より一文字に切つてかゝれば、龍興大に敗軍し、是より長政を恐れて復軍する事無りけり。

丸毛兵庫助軍配の事

丸毛兵庫助長住、其子三郎兵衛長隆龍興に奉公して、美濃の多藝郡大塚の城に有り。安藤伊賀守氏家常陸介龍興に叛て大塚におし寄る。兵庫父子三百計大塚より一里あまり出て陣し、城近き百姓老若男女をいはずかり催し、手々に竹竿をもたせ大軍の體にもてなし、つひに氏家を擊破りしかば、安藤等も又龍興に降參し、丸毛父子に祿を增し感狀をあたへられけり。

馬場美濃守今川の館を燒く事

信玄駿河に攻入る時、朝比奈兵衛を始として軍する者なく、今川氏眞落ちられしかば、信玄とく今川の館に馳行きて、名物の寶ものども奪とり來れと下知せらる。馬場美濃守氏房聞もあへず唯一騎鞭に鎧を合せて館にかけ入り、火をかけて燒きはらひけり。是寶物ども奪ひとりて、貪慾の師なりと嘲れん事を慮りたるなるべし。

大友義鎭肥前國退口の事

元龜元年の春大友左衛門督義鎭、肥前の龍造寺山城守隆信をうつ。隆信和を乞しかば、大友兵を加へず。肥前と筑後の堺に千栗といへる大川あり。吉岡下總入道宗觀といふ者、龍造寺は大敵なり。勝負もわかれず故なく和を乞ひしは、謀あるべし。千栗をわたらん事たやすからじといへば、義鎭も尤なりとて、豐後の留守に置きたる佐伯紀伊守惟敎、其子彈正少弼惟眞、田原近江入道紹恩を呼寄せ、六千の兵を二陣として、千栗の渡に備へて川をわたる。隆信はたばかりて敵の引き退かん所を不意に擊んと謀りしに、大友の設有る事を聞きて追はざりしとなり。

信長公東照宮に爲朝の鏃を進らせられし事

元龜元年六月信長朝倉をうつて龍が鼻に陣す。東照宮援兵の爲、二十四日江北に御著陣、評定の時、信長槍を持ち出でて此槍は鎭西八郎の鏃なり。德川殿は源氏なればまゐらせ候。明日の軍に勝利候へといはれけり。今の虎の皮なげざやの御槍是なり。

姉川合戰の事

姉川の軍に、信長は龍が鼻山を左にして淺井長政に向はる。東照宮は龍が鼻を右にして、朝倉が二萬あまりに向せ給ふ時、小笠原與八郎氏助二千計先陣に進で川を涉る。氏助が兵、伏木久內、中山是非之助、吉原又兵衛、林平六、伊達與兵衛、門奈左近右衛門、渡邊金大夫照七人槍を合する中にも、渡

遐は朱の傘に金の短冊十八つけたるさし物をさし堤の上を進む。信長見て、其夜召し出して天下の槍なりといふ。感狀に貞宗の刀を添へてあたへらる。殘る六人の者共憤りて、各猶すゝんで槍を合せしかども、畠の中なりし故、見とめられず候と申しければ、六人共信長感狀をあたへらる。

姉川合戰榊原二の手功名の事

姉川にて酒井左衞門尉忠次先陣たり。二陣は榊原康政なり。酒井を始め小笠原與八郎、菅沼新八郎、奥平等川を渉りてかゝりけるに、岸高く上りかねたる處に、榊原眞一文字にすゝんで、上りがたき岸を無二無三におしあげよと、えいとう〳〵といひておしあがり、酒井が先にすゝまんとするを見て、酒井が兵おくれては無念なりと、競かゝりて利を得たり。東照宮榊原が二の手のしかた以來の手本なり。二の手はかくのごとくしたくこそと仰ありけり。

三井角右衞門生瀨平右衞門功名穿鑿の事

姉川の戰に、坂井右近が子久藏十六歳にて討死す。久藏は十二の時、信長始て京に入し比近江北郡にて槍を合せたる剛の者なり。三井角右衞門、生瀨平右衞門二人とも久藏が首を得たりといふ。二人後關白秀次に仕へければ、此事沙汰ありて、三井がいつはりなりとて、應部屋におしこめおきて罪に行はれんとす。三井いのちを惜むに非ず、人の功名を盜みたる惡名の子孫の恥とならん事口をしければ、今一度詮議してたまはり候へ。證據は淺見藤右衞門に問れなば、實否正しかるべしと訟へたり。淺見を安土より呼れけり。淺見は生瀨とは久しき友なり。三井とは日比中よからず不通なれば、疑もなく三井がいつはりに定るべし。三井惑亂して淺見を證人にしたりと誹笑ふ人多し。さて聚樂の廣間に奉行列坐して、雀部淡路守をもて尋問はる。淺見承り、生瀨は年ごろの知音なり。三井とは不通にて候。是非世の人の評せん事も迷惑なり。他人に仰せ付られよと懇に辭し申す。中よからぬ三井が虛妄をいふに心よからぬは理なれども、證人にひきたる上はとく申せと勸めらるれども、猶辭し申す。秀次聞きて、重て辭すべからずとなりければ、其時淺見今は已事を得ず候、武義の論少も詐僞候まじ。坂井が首は三井がとりたるにまぎれなく、又其はたらきも比類少く候。生瀨は何と存じ過ちたるにやといひければ、一坐駭きて、とかくいふ人なく、これによりて三井を赦して賞せらる。生瀨は秀次に寵せらるゝの故に罪に及ばず。右近は信長の大將なり。三井生瀨は朝倉淺井兩家の士なり。淺見は後京極高次に仕へて、大津の城にて武名をあらはしけり。

金松彌五左衞門物見の事

信長淺井長政をうつ時、長政が木造の陣俄にさわぐ體の見えしかば、猪子兵助を物見にやられけるが、又金松彌五左衞門をも出されけり。猪子馬に白あゝわかませて馳歸り、敵は引退候といひもはてぬに、金松乘歸り、敵おしよせ候といひすてゝ、又先陣にゆいて槍を合せたり。信長後に二人を呼びて、汝等見し所はいかにと問はるゝに、猪子敵は荷つけたる馬を遙に遠く引のけ候ほどに、引退くと見て

候と申す。金松承り、見る處は猪子に同じく候。されども軍を志し候長政、ゆゑなくして空しく退くべきや、おしよせて戰はん爲と存じ候ひきと申せしかば、信長大にほめられけり。

信長公朝倉を蹙給ひし事

信長越前に攻入る時、朝倉義景二萬計の兵にて、刀根山といふ大山に陣どり、麓に信長の先陣ひかへ居たり。ある日信長井樓に上り敵を見わたし、敵は今夜必引退くべし。先陣の者共なおこたりそと、使を度々やりて下知せらる。是を聞きて殿はいかでかくは仰せ候やらん、敵大軍にて山に據り地の利を得て且主戰なれば、何條引退べきとあやしみけり。夜に入りても信長は猶井樓に在りて、敵陣を睨んで目もはなさずして有りしが、丑の刻ばかりに、すはや敵はひくぞといふほどこそあれ、螺ふきたてさせ馬に乘り、先陣の大ぬる山のやつばらがゆだんしたるに、旗本の者ども功名せよとて、眞一文字にすゝまれしが、果して先陣はおくれて、信長の旗本にて勝利を得られけり。信長常におこたる者を、大ぬる山とてわらはれしとぞ。

長野信濃守上野國箕輪城を守る事

上杉の臣上野の長野信濃守業正は、在五中將業平の後胤なりといへり。世々上野箕輪に在り。此城は大名明神の山の尾崎をとりて城の廓とす。廓の形箕の手に似たりとて箕輪といふ。上杉家衰へけれども獨立して武威をふるひ、信玄に屬せず。信玄これを攻むること五年、終に一度もおくれをとらず、病の後二年を經て落城すといへり。

箕形原合戰の事

元龜三年信玄三河、遠江に軍を出し、二股の城をとり卷き、水の手をとり切りければ、中根平左衞門力の限り支へけれども、竟にかなはで城落たりけり。信玄それより箕形原に軍をすゝむ。濱松には織田家の加勢も有りと、信玄聞いてはる〳〵來て客戰はすまじきとて、おさへをおくべきやといふ處に、三河武者城を押出すと聞えければ、さらば一戰に及ぶべしと備配り有り。濱松の軍兵日既に暮なんとすれども、いさみかゝりて一軍すべしと口々に申す。鳥井四郎右衞門物見して乘歸り、人々はいかに申し候とも今日の御合戰は然るべからず。敵は大軍なり先陣に使をやり兵をあげさせ給へ。もし是非御一戰とならば、敵ほつたの郷へおしゆかん處をしたひてかゝらせ給へと申す。東照宮聞し召し、汝は用にもたつべき者と思うてけふの物見にやりたるに、何とておくれたるや。目前に敵をおめ〳〵と通しては生きがひもなしと怒らせ給ふ。四郎左衞門承り目のあきたる故にこそ、勝敗の利害をば見きはめて申候へ。御敗軍をしろし召し御かゝりあらんは、殿の御心のまゝなるべきなり。勝敗の道を知ぬ人こそおくれ者よと以ての外に罵り、そこをつと乘出し、成瀨藤藏を尋ねけるに、功名したりと聞き、即はれなる討死したりけり。

箕形原の前夜手わけを定らるゝ時、成瀨と鳥井と先後を爭ふ事有りて、既に刺しちがへて死すべき

色あらはれしを、かたへの人々おしとゞめたるに、鳥井成瀬に向ひて、明日信玄と一戰あるべきなり。織田家の援兵も來りぬ。士は一人も大切の時なるに、私の爭論して死なんは不忠ならずや。二人共犬死して殿に損かけ奉らんより、明日の軍に功名比べして討死せんはいかに。成瀬につことわらひ、いしくも申されたる哉、われも左こそ思へ、明日討死せん。いざとて酒くみかはし深更に及べり。東照宮これをしらせ給はで、成瀬は信長の加勢の目付としてあら井本坂に向ふべし。鳥井は濱松先陣の目付せよとぞ仰られける。二人は必死を期したれば、鳥井も一處に有り。二騎先がけて二萬餘の敵に馳向ふ。鳥井冑首三つとりて、成瀬も首三つとりて行あひ、共に打わらひて首をば抛げすて、又かけ向ふ。鳥井又首をとりて成瀬をとへば、只今山縣が陣にかけ入て討死し、敵其首をとりたりといふを聞きて、成瀬に先だたれしよ、汝はとく歸りて朋輩にかたり候へと從者にいひすて、信玄の旗本をさしてかけ入らんとせしを、土屋右衞門が手の者どもとりかこみけり。鳥井はすぐれてたくましき剛の者にて、三尺餘りの野太刀を打ふり、死狂に切つて廻る。土屋が冑を破よくだけよと斬たりけるに、目眩て馬より落る。多兵四方より槍すくめにして、鳥井をうちとりたり。敵も味方もおしなべて、惜みあへり。

渡邊半藏守綱も物見して馳歸り、是も味方中々危く候。先陣をよび返させ給へと申す。されども壯士等いさみかゝりて、柴田七九郎大久保治右衞門すゝみゆくを、半藏ひらに止れといへども聞入ず。甲斐の先陣小山田に向て足輕をかくる。軍始りて先陣亂れ足になりければ、石川伯耆守數正馬より下りたち、鎗を提げ一足も引くまじと呼はり、一陣の士卒各折りしきて槍ぶすまを作り待ちかけたり。甲斐の兵競かゝるを、近々と引受け一同に立上り、えい〳〵と聲をあげて追ひかへす。外山小作一番槍を合せたり。日暮ければ、甲斐の大軍進みかゝる。東照宮御旗本をひきゐて切てかゝらせ給へば、遠江の山家三方小山田追立てられ敗れけり。申刻より軍始りて、夜ふくるまでの軍に、衆寡支へ難くて崩れたちしに、榊原は東の方西島に向ひて引退く。信長の侍大將平手汎秀は、いなといふ所にて返合せ討死す。鳥井四郎左衞門を始めとして、河澄源五郎、長谷川紀伊守、加藤二郎九郎等選兵三百餘人討たれ、敵しきりに追來る。本多肥後守忠直後殿して、敵近付けばとつて返し遂に討死す。甲斐の士大將秋山伯耆守晴近、透間なく追ひかけ奉り、御馬まはり殘り尠くなりしかば、東照宮御馬をひきかへさせられし時、夏目次郎左衞門吉信こゝは御討死の時にては候はずと申して、御馬の口を濱松の方へひき向け、槍をとり直し、御馬のさんづをたゝみかけてたゝきければ、御馬かけ出しぬ。夏目ふみ止り、多勢にとりまかれ、槍の柄の折るゝ計に戰つて討死す。

夏目は濱松の御留守なりしが、矢倉より軍の樣を見ていそぎ馳參り、とく御城に歸らせ給へと申せども、吾城下に於て打まけなば、いのち生きて何にかせんとて、御馬副の者に口を放せと仰せられしを、吉信御馬の口なはなしそとかたく下知し、馬より飛下り、御諱を給り候へ。討死仕るべしとて、

御馬に付たる畔柳助九郎に下知して、御馬を御城の方にひきむけさせ、槍の柄にて御馬のさんづをたゝき取て返し、十文字の槍にて追ひくる敵を支へて討死しけるともいへり。是より前三河一向宗一揆の時、彼宗門を信ずる人々ひし〳〵と相あつまり、櫻井の松平監物、上野の酒井將監、大草の松平七郎もくみしけり。中にも夏目次郎左衛門は一族も多かりけるが、彼宗門に徒黨して、己が知行所に要害をかまへたてこもりしを、松平主殿助伊忠不意におしよせ、木戸を打破り攻入りしかば、夏目防ぎかねて奢藏の中にかくれ入りたるを殺すは、籠の中の鳥を殺すに似たり、たすけてこそと仰有り。主殿うち殺して後申すべき物をといひながら、人數を引取りぬ。夏目岡崎の方をふし拜み、かかる仁愛ふかき殿に楯つきし事の悔しさよとて、其日より宗門の本尊の前に參りて、殿の御爲にいのちをすてさせ給はれといのりけるが、果して義死をとげにけり。又一說に、夏目大津半右衛門、同伊織、乙部八兵衛等六千餘、額田郡野田のふる城にたて籠りけるに、深溝の城より松平主殿助伊忠是を攻むる。乙部はもとより一向宗に非れども、夏目と無二の知音たる故同じくこもりしが、遂にゆるすべからざる事を察し、夏目をたすけん爲に、久留善四郎と相はかり、伊忠に内通し、寄手を引入れしかば、半右衛門は針崎へおち行き、夏目は藏の中にかくれしを、乙部夏目を助け候へと伊忠に乞ふ。乙部が朋友をすてざる事を伊忠感じ、夏目も亦武功有りし者ゆゑ、藏をとりまきて此旨をなげき申しければ、御赦ありけり。夏目恐にして一揆にくみせし事を後悔し、藏より出でて伊忠に降參しけるともいへり。

水野左近大夫もひきさがり支へけれども、敵猶きそひかゝれば、又御馬をひき返させ給ふ。成瀨吉右衛門、日下部兵右衛門、小栗忠藏、島田治兵衛歩だちにて御供す。敵六七騎すゝみ來るを、成瀨一騎切つて落し、御馬をかへさせ給へば、六騎は追ひとゞまりぬ。大久保新十郎忠隣御馬のかたへをはなれ奉らず。大久保七郎右衛門忠世、さいがかけの邊に御旗を押立て敗軍の味方をあつむる其ひまに、濱松に引取らせ給ひけり。敵城近くおし寄すれば、鳥居彦右衛門元忠、玄默口より討つて出で相戰ふ。渡邊半藏兄弟、勝屋甚五兵衛、櫻井庄之介名のりかけて槍を入れ、敵五人討とりおしかゝる敵を追ひ拂ふ。石川伯耆守と大久保七郎右衛門と相はかり、鐵砲をつるべばなしにうちたてさすれば、つめ寄せたる敵も皆引返す。味方疲れはてけるに、天野三郎兵衛大久保七郎衛門と心を合せ、敗軍の中を求めて鐵砲只十六挺ありしを引具し、信玄の陣さいがかけに向ひて打かけしかば、甲斐の軍夜合戰にかかるかとあわてゝ、くらさはくらし案内はしらず、さいがかけへ落つる者其數をしらず。

又一說、其夜酒井左衛門尉忠次今夜武田の軍兵疲れたらんは必定なり。夜討せんとして忍を出し、信玄の陣屋の樣を見せけるに、爰には何色の旗の紋あり、かしこには、此色の旗を立てたりといひけるを、忠次聞きて、疲れたる兵を後陣に引退け、後陣を先にくりかへたるなり。信玄の慮淺からずとて、夜討はせざりけり。後に聞くに、其夜信玄の士卒一人もねむれる者なかりしともいへり。

夜あけて、信玄兵を返しておさかべに越年あり。是元龜元年十二月二十二日、遠州箕形原の合戰なり。

箕形原合戰信玄遠謀の事

箕形原の軍終りて、皆濱松の城を攻めんといひけるに、信玄勝つて兜の緒をしむるといふ事有りとて軍を返されけり。此時信長は白須賀に毛利河内守、山中に瀧川伊豫守、吉田に稻葉伊豫守其兵三萬あまりにておかれたり。もし信玄勝に乘りて引取らずば、信長二萬五千をひきゐておしよせ、毛利瀧川等も思ひもよらぬ所に討つてかゝる程ならば、必濱松よりも切て出で、中にとりこめて軍せんと、吉田より岐阜まで一里に一人のしのびの者をおいて待たれけるに、信玄ひき返されしによりて、信長の謀空しくなりぬ。

箕形原合戰東照宮御退口の事

箕形原の軍に甲斐の兵はげしく追ひかけたりしかば、東照宮幾度となく御馬を返し給ふ。大久保五郎右衞門忠次手負て歩立になりしが、菅沼藤藏定吉に詞をかくれば、忠次を馬の前輪にのらせて退たりけり。後に菅沼に長光の刀を賜はりて賞せさせ給ふ。菅沼又引返して追くる敵を防ぎけり。天野康景長坂源次郎坂部又十郎等もふみとゞまりて防戰ふ。大久保相模守忠隣、此時新十郎馬を射られ、歩だちに成りて危かりしを御覽じて、小栗忠藏久次後に忠左衞門と稱す に新十郎わか武者なり、あれ助けよと仰せられしかば、久次己が馬に忠隣を抱きのせて引退く。敵遠間なく追つめ奉りける武者ありけるを、野中三五郎重次返し合せて討取りければ、後に信國の刀を賜りぬ。畔柳助九郎御馬のかたへをはなれず、後に金の扇を賜りて賞せさせけり。猶敵手しげく追つめ奉りけるに、水野太郎作ふみとまりて防戰ふを御覽じて、又御馬を引返さる。成瀨吉右衞門正一は、兄が最後に汝は此あたりの案内よくしれり。御供して恙なく引取らせ奉るべき由云ひたりしかば、御側につき奉りしが引返して敵を追ひ退け、終に濱松の城に入らせ給ふ。鳥居彦右衞門元忠に御下知ありて、玄默口の御門をひらきて引取る兵を入らせらる。たとへ敵したひ來るとも、わがこもる城にたやすく討入るべきや。門を閉ぢずしてかゞり火を所々にたくべしと仰せらる。此日は天曇り雪ちりて寒氣殊に甚し。御供して馬より下立ち、城中に入る人々は、松平八郎三郎康定、松平彌九郎景忠、平岩七之助親吉、大久保忠隣、菅沼定吉、都築惣左衞門秀綱等なり。都築が妻粥を持たせ來りて御供の人々に配りあたふ。後に衣服を賜りて賞美あり。今日敵の跡をふんで戰はゞ勝つべきに、味方速り過ぎて、心ならず敗軍しぬ。口惜き事なりと仰せあり。湯づけ飯を侍女久野奉りければ、三度かへたまひ、われつかれたりとて御枕をかたぶけられ、いびきかきて御睡あり。山縣城近く攻めよせ、門の扉をたつるに暇なしと覺えたり。いかに攻入らばやといふを、馬場美濃守聞きて、打まけて引取りたれば、門をとぢ橋をも引くべきに、左はなくてかゞり火白日の如し、もし謀あるべきか、かろ〴〵しく攻むべからず。德川殿は海道一の弓とりなり。よく見屆けてこそとて猶豫しける處に、城中より鳥居彦右衞門、渡邊半藏、同半十郎、櫻井莊之助、勝

屋甚五兵衛を始として、くつきやうの剛の者ども百餘人突いて出でしかば、甲斐の兵虎口を引退きて攻めざりけり。

卷之四

山崎長門守詫美越前守討死の事

天正元年江北の軍に朝倉敗れしかば信長の兵追ふ事急なり。朝倉が士大將山崎長門守詫美越前守、柳瀬にてふみ止り支へけるにはげまされて、返し合せて討死する者多し。山崎も大軍の中にかけ入て討たれけり。詫美矢立の硯とり出し、詩一首書きて落ちゆく者にたのみて故郷にかへしけり。

萬恨千悲有二蒼然一。誰識今夜入二黄泉一、故園更莫レ灑二愁涙一。屍暴二戰場一唯是天。

かくて散々に戰ひて討死しける。其間に義景のがれ得て越府にひきとれり。

中川重秀和田惟政を擊つ事

天正元年將軍義昭、織田信長と不和の事出來て、和田伊賀守惟政將軍の味方して攝津の國に陣す。信長和田を始として誰某が首とりたらん者には、しかく可レ賞と書記して札を立てられたり。中川瀬兵衛重秀此時は荒木村重に屬したりけるが、此札を打見筆とりて、和田が名に點をかけ自姓名をしるし、家に歸り妻に向ひ、事の由を語りて、萬一生きて歸りなば又こそ見參すべけれといひしに、妻聊忠ふる色なく、さらば軍の門出祝ひたまへとて、羮すゝめ酒とり出したり。其夜子の刻ばかりに伊賀守が首とつて來りけり。村重大におどろき、いかでかくたやすう和田をば討得たるぞといふ。重秀さん候、

明日必戰を決すべし。されば討たるゝ者少なかるべからず。同じく死なん命を此夜の中にすてなんには、和田が首とり得つべし。敵も明日の合戰を大事に思ひ、淀河の淺深をふみ見んに、惟政さる大將なり、物見をたのむべからず、自ら來らんは必定なり。あつぱれ討取らんず物を、もし又討死せば、多くの敵の中に入りて、大將の首とらんとて討死したりと人いはんは、武名は朽ちじと思ひ定め、水をわたりあなたの岸の柳かげにふしかくれてまつ。案の如く和田二陣にひかへて出來るをまぎれ入り、終にうちとりて水中に飛入り、のがれ得て歸りぬと申しければ、人々感じあへる事大方ならず。

梶川彌三郎槇島先陣の事

天正元年信長靈陽院殿を宇治の槇島の城に攻むる時、折しも雨ふりて川水岸をひたせり。信長馬を水涯に駐めて、昔の梶原佐々木も鬼神にてはよもあらじといはるゝ處に、武者一騎川へうち入りたるを見て、梶川彌三郎高盛なるべし。梶川討たすな渉せと下知して、それよりわれ先にとうち入りてわたしけり。此戰の前に、信長黑の馬を梶川にあたへらる。其時信長梶川が志重ねての軍に眞先かけんする者なりとあざ笑ひていはれしが、果して其詞にたがはざりけり。

山内一豐馬を買はれし事

山内土佐守一豐、其はじめ織田家に仕へたりけり。東國第一の駿馬なりとて、安土に牽き來てあきなふ者あり。織田家の士是を見るに、誠に無雙の駿足なれど、價あまりに貴しとて、求むべき人なく、いたづらに牽きて歸らんとす。一豐其比は猪右衛門といひしが、此馬望に堪兼ねたれども、いかにも叶ふべからざれば、家に歸り、身貧きほど口惜き事はなし。一豐奉公の初にあつぱれかゝる馬に乘りて、家形の前に打出づべき物をと、ひとり言しければ、妻つく〴〵と聞きて、其價はいかばかりにてか候と問ふ。黃金十兩とこそいひつれと答ふ。妻聞きて、さほどに思ひ給はんには、其馬求め給へ。其料をばまゐらすべしとて、鏡の奩の底よりとり出して、一豐が前にさし置きたり。一豐大におどろき、此年ごろ身貧しくて苦しき事のみ多かりしに、此金ありともしらせたまはず、心強くも包み給ひけん。今此馬得べしとは思ひもよらざりきと、且は悅び且は恨む。妻仰の旨ことわりにてこそ候へ。さりながら、これはわらは此御家に參りし時、父此かゞみの下に入給ひて、あなかしこ、よの常の事にゆめゆめ用ふべからず。汝が夫の一大事とあらん時に、まゐらせよと戒めたまひ候き。されば家の貧しきも、世の常なれば堪忍びても過ぎぬべし。誠に今度京にて馬揃あるべしと承れば、此事天下の見物なり、君も又仕への始なり、よい馬召して見參せさせまうさんと存じ候てこそ奉れといふ。一豐悅ぶ事限なく頓て其馬求めてけり。程なく京にて馬揃へありし時、打乘りて出でしかば、信長大に驚き、あつぱれ馬やとて、事の由聞き給ひ、東國第一の馬遙にわが方にひきて來りしを、空しく歸さんは口をしき事ぞとよ。それに年比山内は久しく浪人して有りしと聞く。家も貧しからんに、求め得たるは信長が家の恥をすゝぎたるうへ、弓箭とる身のたしなみ、是に過ぎたる事やあると感じて、是より次第に用ひ

られしとぞ。

奥平貞能父子歸降の事

天正元年三河作手筑手の城主奥平監物貞勝入道道文、其子美作守貞能、孫九八郎信昌皆勇氣たくましき人にて有りしに、近ごろ道文は武田家に心をよせ、勝頼の士大將甘利を作手の本丸におき、奥平父子は外廓にあり。信昌信玄の死したる事をかくせるを悟り居し處に、東照宮より本多豊後の守廣孝を以て歸降の事をすゝめ給ふ。信昌父と大父とにすゝめて密約をなす。武田家奥平に人質を出せよと下知せらる。貞能いかにもすべき謀なくて、庶子千丸十三歳になりけるを、黒屋甚九郎をそへて出しけり。東照宮を不意に襲討つべき謀を家臣を以て告げ奉る。武田にも是をあやしみ、土屋右衛門直村黒瀬に在りけるが、使を以て貞能を呼びよせ、勝頼の檢使城所道壽も出向ひ、二心ある由聞ゆる處に、とくも來られけるよ、神妙にこそと詞をかくる。貞能かゝる時には父子の間も疑ひ思ふ事世のならひなり。然れども、愛子にて候千丸を人じちに出し候へば、何の仔細の有るべきやと駭くいろなければ、いざ碁をうたんといふ。貞能心しづかに碁をうち終り、暇乞して門外に出づるを、道壽又よびもどし湯漬飯を出す。貞能これを食するひまに、道壽士を門外に出し待居たる貞能が士に向ひて、主人叛逆あらはれ、唯今討たれし由をいはせけれども、奥平六兵衛うちわらひて更に驚くいろなし。これは貞能素より武田方にていかなる事をいふとも、吾首を見ざる中は驚く事なかれと、固くいひふくめし故なりけり。かくたばかりすまして貞能馳歸り、其夜一族打具して退散し、岩崎に赴きければ、松平主殿助伊忠、本多豊後守廣孝等、東照宮の仰せを奉り、出迎ひて瀧山に引きとりけり。

東照宮大井城御退口大久保忠世高名の事

天正二年四月、東照宮天野宮内左衛門景貫が大井の城を攻めさせ給ふ時、霖雨にて兵粮運送の便よからず。三倉の砦にひきとらせ給ふ處を、天野討つて出でつけしたふ。高山光明の城々よりも出あひ、田野大窪の郷民も相加はり、こゝかしこより鐵砲をうちかけ聲をあげて攻めかゝる。後殿の人々あまた討たれしをしろしめさず、東照宮三倉にて聞し召し、引返させたまへば、はや敵引取りたり。玉井善太郎後殿しけるが、股を鐵砲にてうたせ、御あとをしたひて三倉にまゐりければ、手負ひたるか、あとに鐵砲の音せしを怪しく思ひしに、軍有りけるよ。此馬にのれと仰せられ、御馬よりおりさせ給ひけり。人人君の士をいたはらせ給ふに感せざる者なし。大久保七郎右衛門忠世が同心杉浦久藏（一説惣左衛門　深手久勝に作る）おひたりしに、七郎右衛門馬より飛びおり、是に乘りて引きしりぞけといふ。久藏うつけたる馬の下り所かな。わが如き者はいか計討たれたり共何事かあらん。大將たる人の馬ばなれする物かは。八幡も照覽あれ乘るまじいといへば、七郎右衛門禮儀も所によるぞ、とく〳〵といへば、久藏われ此馬に乘りて生き、大將をすて殺してはいかゞせんとて乘らざれば、七郎右衛門いなゝらば馬をすつるよといひすてゝひかんとする處に、小玉甚内（一説石上兎角）馳來り、七郎右衛門は早のきたるぞといひて、久藏をひ

きたて馬に打ちのせ、やがて七郎右衛門に走りつきたり。七郎右衛門には兵藤彌惣と犬わかといふ小者と三人打ちつれて細道の崖を引退きし處に、跡より退き來る者七郎右衛門をつきおとす。二人もつづいて飛びける所に、犬わかあげ羽の蝶のさし物を持ちたるを投げすてたるを、敵見てこれをとらんとする所を、彌惣走りかゝりかなぐりとらんとすれば、敵彌惣を一刀切つたりけるに、七郎右衛門とつて返して、敵三人討取つたり。東照宮剛將の下に弱兵なしと、忠世を御賞美ありけり。

渡邊守綱を槍半藏といふ事

東照宮と武田の兵と、大天龍にての戰に、近藤傳次郎手おひて渡邊半藏守綱を見かけ、手おひたるぞつれて退けよといふ。心得たりとて手に提げたる首を投げすてゝ傳次郎を肩にかけ、三里あまり引退きてたすけければ、東照宮聞召し、味方一騎討たるれば敵千騎の強みといふ事あり。味方をたすけたるは七度の槍を合せたるよりもまされり。今より後槍半藏といふべしと仰せあり。後に半藏人に語りていはく、傳次郎をわれなればこそたすけたれ。何としてのけおほすべき。かゝる時は大かたたすくる體にもてなし、刺殺して棄てらるべし。味方なればとて賴みにはならぬものよといひしなり。

又一說、永祿五年九月參河の八幡にて、今川氏眞と參河の軍戰ありて利むらず。二手に別れて引退く。敵急に追かくる。半藏守綱石川新九郎返し合せ三度槍を合す。後には半藏一人十度に及びて小返しして又三度槍を合す。矢田作十郎足をいたみ引きかねたるを、半藏肩にひきかけて退きけり。これより槍半藏と人にいはれしといへり。半藏弟を半十郎政綱といふ。後新五左衛門といふ。味方原の軍に草鞋の緒のとけたるを下に居て結びけるを、半藏いそげども心しづかにむすびて引きとれり。兄の半藏聞ゆる剛の者なるが、半十郎がごときしぶとき者はつひに見ずと、常に語りけるとぞ。

謙信單騎佐野城に入られし事

天正二年北條氏政三萬の兵をもて佐野政綱をかこまるゝと聞きて、謙信八千計の兵をひきゐ後詰せられけり。城危しと聞えければ、謙信後卷はわれにおとらぬ士大將あまたあれば心やすし。佐野の城こそおぼつかなけれ。先われは城にかけ入りて力をそへなんとて、物の具も著ず、黑き木綿の胴服をうちかぶり、十文字の槍を横だへ、僅に十三騎ひき具し、氏政の陣の前を馬を靜にあゆませ、佐野の城にいりたるを、氏政の軍兵見て、夜叉羅刹とは是なるべしとて恐れて近づく者もなし。氏政圍をといて引退くを、謙信やがて門をひらかせたまへども、氏政一軍もせで引きしりぞきけり。

大河內政房節義の事

天正二年勝賴高天神の城を圍まんと師を出す。小笠原與八郎長忠軍の目付大河內源三郎政房と相議して防ぎけり。東照宮後詰を信長にこはせ給ふ。勝賴城の巽の嶺に陣し、大文字の旗を中村の內公文といふ所に立つる。後迄其地を大旗と稱す。兵粮竭き士卒疲るれば後卷を待ちかね、姉川の戰功を捨てさせ給ふと怒りて、七月二日城を出て降參す。軍の目付大河內政房は、應政公の妾華陽院の甥なり。勝賴

に降らざりしかば、小笠原生どりて石の牢に入置きたり。勝頼降らば本領に倍して宛行ふべしと說せけれども、志を變せず。勝頼怒て牢の口を鎖す。政房ことしより高天神落城に及ぶまで八年の間牢中にあり。甲斐の士横田甚五郎高天神に來て在番せしが、大河内が節義を深く感じ、殊にねんごろに勞りたり。かくて東照宮高天神を攻めさせ給ひて、天正九年三月廿二日の夜、城の守將岡部丹後眞幸、横田甚五郎尹松、相木市兵衞昌朝已下切て出で、岡部は討死し横田相木は切りぬけて甲府に落行きけり。城落ちければ、石川伯耆守數正城に入りて政房を搜し出す。牢中に年久しく有りて足痿えければ、むしろにのせて東照宮の御前に出す。多年石の牢に有りし艱厄いふべからずとて、御涙を流され、御手づから刀脇差黃金を與へらるゝに、政房生どられし事を口惜く思へる色あらはれしかば、人々敵のとりことなる事は、小笠原が不義にして、武田に降參せし故なれば、何方にのがれ出べきや。志は比類有るまじき事なれば、生けどりと成りぬる事、なか〳〵ほまれとなりたりと口々にいひけるが、猶も其心に憤りけん、剃髮して肖空と稱せしが、仰せによりて尾張の津島の湯に浴し、足の痿も癒えければ、遠州稗原の地を賜りしが、長久手の戰に討死しけるとぞ。

鳥居强右衞門忠節の事

天正三年勝頼、奥平九八郎信昌が三州長篠の城を圍み攻むる。東照宮援兵を織田家にこはせ給ひ、後卷の謀をめぐらし玉ふ處に、城中粮米既に盡きんとせしかば、此旨を告げ奉らん爲鳥居强右衞門勝商に命じて密に城を出す。鳥居のがれ出づる事を得ば、向のかんほうが嶺に烟をあぐべし。三日過ぎて又かの山に烟を兩度あげば、後卷なしとしり給ふべし。三度あげなば後卷あることをしり給へと約しければ、信昌鈴木金七郎を鳥居にそへて、五月十四日の夜城の西なる山の岩根を傳ひ川に入る。寄手は素より大野川瀧川の水底に繩を張りてなる子をかけたれば、通るべきやうもなし。二人水練の達者にて、川の淺瀨はよくしりつ、小脇差を抽きて川底を潛り繩を切りて通りしかば、から〳〵となりけるを、番の兵どもあやしみけるに、其中に一人五月雨にはかゝる川をば鯔の通るならんといひければ、さてやみぬ。二人は早瀧の下廣瀨といふ處に上り、かんほうが嶺にて烟をあげ、十五日に岡崎に參りて、しか〳〵の由を申す處に信長其日岡崎に著陣せらる。鳥居は信昌尙心もとなくや候らん。しのび得て城に入る事を得ば、早後卷候ふべき事審に申さんとて引返す。鈴木は信昌が父美作守貞能に告ぐべしと鳥居に別れけり。鳥居かんほうが嶺に上り相圖の煙三度あげて後、篠原といふ所にゆき忍入らばやとするに、柵重々にふりて砂をまき、出入の人の足あとを改めしかば、中々入るべき樣なくてためらひけるを、穴山の手の者見付てあやしみて遂にからめられけり。勝頼遙遙軒信綱を以て仔細を問はるゝに、鳥居事の由を有りのまゝに答へしかば、勝頼鳥居を呼びて、汝がいのちを助くべし。汝城際に往きて、信長は上方の軍にて此城の後卷思ひもよらずといはゞ城兵降參すべし。さらば汝に厚く賞せんといはれしかば、鳥居則心得候とて、城門近く至り、後卷とて信長父子岡崎まできのふ旗を

出され、先陣は一の宮に陣せり。徳川殿御父子野田まで御馬を出されたり。此城運を開かん事掌の内に有りといひければ、甲州の者ども大に驚き、鳥居をひき連れて勝頼にかくと申せば、大に怒りて城に向つて磔にしてころされけり。長篠にて勝頼敗北して後、信長を始め鳥居が無雙の忠なる事を感じ、作手の甘泉寺に懇に葬られけり。

酒井忠次鴟巣城を乗取られし事

勝頼長篠の城を圍攻むる事甚だはげしかりしに、信長東照宮と共に後卷あり。軍評定の時酒井忠次すみ出で、今夜わき道より長篠の附城鴟巣へおしよせ攻破らば、勝頼必敗北すべしと申しもあへぬに信長あざ笑ひ、汝は三河遠江の小せり合には慣れつれど、大軍の計策はしらざりけりと嘲られしかば、忠次いふべき詞なくて出でける處に、信長東照宮にさゝやき申されけるは、左衛門尉が申す處尤然るべし、又呼出されよとて、酒井が側近く居より、誠にゆゝしくも計りたる哉。されども外に泄聞えんかと思ひてわざといつはりて誹りたりき、とく馳向つて鴟巣を攻破り候へといはれしかば、忠次承りて出でんとする時、又ひきとゞめ、同じくは信長が向ひ度所なり、あたら武功を汝に讓りきと申されける。忠次大にいさみて、夜半計に思ひもよらぬ所におしよせて、武田兵庫頭信實、三枝勘解由、和田兵部を始としてあまた討ちとり、火をかけたる煙を、武田の軍兵顧みて大に勇氣抽けて、終に敗北のもとゝなりけるとなり。此夜討に天野惣次郎は指物をさゝず、戸田半平は道遠し夜あくる事もあらんとて、指物を持たせけるが、城を燒きたる火のひかり白日の如く、天野戸田先を爭ひけるに、戸田が銀の髑髏のさし物かゞやきわたりて、人の目を驚しけり。信長後に酒井が功を賞して、汝は前に眼有るのみにも非ず、後にも眼ありといはれしかば、忠次忝由申して、さて終に後を見たる事はなく候と申しければ、信長笑つて、前後の計たがはざる事を賞せんとて、いひ過ざりといはれければ、忠次其時、仰の旨面目有りとて退出したりけり。

長篠合戰の事

長篠にて信長の先陣と旗本との間にほり切をかまへ、柵の木ゆひて欺きて敗北すれば、武田の猛兵敵はにぐるというて追來り、柵の木に行きなづみたる處を、數千の鐵砲雨のふるがごとくうちかくれば、空矢なく中りて、討たるゝ者數をしらず。引退かんとすれば柵より出て付けしたふ。戰をいどめば柵の中に入りてうちしらます。勝頼の士大將勇氣餘り有りといへども、打破るべき樣なく、皆的になりて討死しけり。

内藤四郎左衛門返答の事

同じ時徳川家の先陣を下知せよとて、信長の使來る。内藤四郎左衛門、われ等が主君は先陣の下知を他人にうくる者には候はず。内藤承りて返答仕りたりと申されよと、あらゝにいひて追かへす。信長聞いて、徳川家よき士數をしらずといはれけり。

内藤を鳥井に作れるあり。然れども鳥井は箕形が原にて討死したれば、内藤の事なるべし。

多田久藏が事

同じ軍に甲斐の士一人生どりて、信長の前にひき來る。裸に緋緞子のした帶をしたり。信長名を問はるゝに美濃の者多田久藏と名乘る。信長手を拍ちて、汝は伯父の葬禮の時火車を斬りたりと聞けり。美濃、尾張はわれにしたしみ有る國なり。我に奉公せうとや思ふ。縛りたる繩をゆるせ、惡源太もからめられたり。弓箭とる躬の恥ならずといはれしかば、長谷川藤五郎かたへにひきのけ繩をとけば、多田わきなる槍を奪ひとり、四五人つき伏する。長谷川そこにて首を切りて信長に出し、しかゞなりといへば、信長深く惜まれけり。

一說、赤地の唐おりの錦の下帶したる士を生どり來る。唯者に非じ名のれといへども名のらず。さらば雜人の手にかけて殺さん。士ならば腹切らせんといひしかば、多田淡路が子なりといふ。信長聞て、淡路に久藏新藏とて二人の子ありと聞く。いづれぞと問はるゝに、新藏なりと申す。勇士なりたすけてこそと有りければ、生どりと成りたる恥辱、とく首を刎ねらるべしと乞ひたり。信長の前にて繩をときしに、門外に立てかけたる槍をとり、あたりの者をつき殺すによりて、遂に新藏を切りころしけり。

佐久間信盛僞て勝頼に降る事

長篠合戰の前信長謀をめぐらし、佐久間信盛より潛に長坂釣閑がもとに使を遣し、日比信長に恨る仔細あり。願はくは勝頼軍をすゝめ戰あらんには、其時信盛裏切して信長の旗本へ俄に切かゝるべき旨をいひ送りしかば、釣閑悅んでこれをたばかるとはしらず、勝頼に一戰をすゝめける故、馬場美濃守信勝を始として、侍大將の軍評定していひける事共を、勝頼悉く用ひずして、楯なしを誓つて進んで軍すべきと決斷せられしかば、其後は諸大將諫る事を得ざりけるとなり。

二股城攻內藤櫻井功名の事

天正三年六月東照宮二股の城を攻め給ふ。城主は依田下野守幸成なり。其子右衞門大夫幸致城を出て、鳥羽山の下なる小川を隔て防戰ふ。內藏彌次右衞門家長强弓の手きゝにて散々に射しらます。松平彌右衞門忠長が子彦九郎、敵に朱のてうちんのさし物あるを見て、味方にも此さし物有りければ、あやまりて敵の中へまぎれ入りしを、朝比奈彌兵衞一箭にて射伏せたり。內藤は彦九郎と緣者のしたしみ有れば、引返して彌兵衞を射る。其箭彌兵衞が乘たる馬の鞍の前輪よりあと輪をかけて射貫く。彌兵衞が弟彌藏馳來りて、兄が屍をひき退けんとするを、二の矢にて是も射倒したり。城兵二人の屍をひきのけんとするを、本多忠勝等進みかゝりて追つたてたり。城兵引退く中に、一人手負ひてひきかねたる者有りけるを、一人とつて返し、是をたすけ城內に引入れけるを、櫻井莊之介勝次、敵の首を一つ取りたりしが、又すゝんで追かけ行く。東照宮御覽せられ、茜の四半のさし物は櫻井なるべし、

深入するよと仰せられけり。其時敵の手負を助くる者やう〳〵一の木戸揚錠門の中に入り、手負たる者はいまだ半見ゆる處に、勝次走りつき、手負たる者の足をとりて三間計ひき出し、遂に其首をとる。其時門内より勝次がさし物を打折りけるが、屍にかゝりとまりしをしらずして、五六間計引とる時、從者かくといへば、又取て返し、さし物をとり得て鳥羽山に歸り首を奉る。東照宮唯今の勇氣のいかめしさ、誠に無雙と覺ゆるなり。然れども是より後はゆめ〳〵今日のごとく深はたらきすべからずとて、遠州にて祿を增したまはりけり。彼從者も度々はたらき有て後、士となし、内田彦右衛門といひけり。

芦田信蕃二股城を退く事

勝頼長篠敗北の後、芦田常陸介信蕃二股の城を守る。三河の軍五月下旬より此を攻る。南方山に東照宮御陣をすゑられ、巽の方鳥羽山東は安倉口の山、北は三十原口の山、西は和田島に向城をかまへらる。信蕃固く守りて十一月に至りて城をわたし甲州に引入るべしと、勝頼再三下知せらるれども聞入れず。勝頼自筆の書をもて下知せられしかば、十二月下旬に人質を出し、二十三日に城を渡さんと約せしが、雨ふりければ、簑笠にて見苦しく候とて、翌二十六日天晴れて後城をわたし、二股の川の邊にて人質をとりかへ引きとれり。信蕃小勢にて久しく守り、且城をわたす作法正しかりけるを御感ありて、後終に德川家に仕へけり。

信長公秋山伯耆を刑し給ふ

天正三年信長美濃岩村の城を攻めて、秋山伯耆晴近を生どり、生ながら逆ばり付けといふ物にせられけり。此は信長の姑遠山内藏助が妻にて、遠山は其前岩村にありけるを、秋山遠山の七家と稱せし人人と和平してたばかり、元龜二年信長の加勢の士三十五騎を殺害し、城を奪ひとりて内藏助が後室を己が妻としけり。遠山は是より前に病死し、其嗣信長の男御坊丸を甲州へ送りやり、岩村を居城とせしかば、信長怒にくまるゝ事深くてかくはせられしなり。秋山口をしくもはかられけるかな。われは信長と緣類のしたしみあり。かくせらるゝ事無念なりとて齒をかみ、信長の末を見よと罵りて、七八日ばかり有りて死しけり。信長信州法華寺にて兵糧つかはれける時、いろ〳〵の小袖を著たる女房一人來たり、懷より錦の袋に入れたる茶入をとり出し、是を信長に見せたまはり候へ、見しりておはしまさんといふ。信長走り出て、茶入をば石に當てゝうち碎き、刀を抽いてかの女房を切りころされけり。此秋山が妻にて信長のをばなり。

松平忠次諏訪原城を守らるゝ事

天正三年八月東照宮諏訪原の城を攻めさせ給ふ。此城は甲州馬場美濃守氏勝が城制の法にてきづきたりし名高き城なりといへども、城兵力弱りて二十四日の夜城を棄てゝ小山の城に逃落ちけり。東照宮此地は高天神に往來の要路、駿州田中持船の敵と大井川一筋を隔てたり。勝頼必隙を伺ふべし。誰か此

に在りて城を守り敵を防ぐべきと仰有りけるに、松平左近忠次すゝみ出で、身不肖に候へども、此城を守り申すべしと申しける。御感有りて、松平の姓を賜はり、御諱の字を下され、松平周防守康親と申せしは、此時よりの事なり。勝頼が暴惡殷の紂王に似たり。これより攻入りて打ほろぼすべきとて、諏訪の原の城を牧野の城と改められしとなり。

山内治大夫進士清三郎功を讓る事

諏訪の原の城を甲州より攻め來りて合戰あり。松平康重康親の子の士、山内治大夫、進士清三郎、山崎惣左衛門三人殿しけるに、山内は精兵の手きゝにて、射拂ひて引退く時矢だね盡きたり。山縣源四郎猶追かくる時、進士清三郎矢一筋を山内になげやりしかば、山内ふみ止りて射けるに、志村金右衛門が胸板を射通し、後の松の木に射つけたり。それより物わかれす。山縣此矢を康重に送り返して、強弓精兵無雙なりとぞほめたりける。康重其矢に進士が姓名の彫付けたりしを見て賞する處に、是は山内が射申したるにて候と申す。復山内を呼出してしかゞ〳〵なりやと聞かるゝに、清三郎が射たるにて候とゆづりけり。康重兩人に感狀をあたへたり。世の人兩人を今の孟子反といひあへり。

長九郎左衛門能登國發向の事

天正五年畠山修理大夫義隆毒殺せられ、家臣七尾の城に據りて信長に屬し、能登大に亂れければ、義隆の伯父上杉彌五郎義春越後に在りて是を聞き、謙信にかくと告ぐ。謙信卽師を出して義春先陣して七尾の城を攻おとす。此時長九郎左衛門重連七尾にて畠山が長臣温井三宅に殺さる。重連が弟恩光寺使僧となりて信長に此由を申せば、柴田勝家、丹羽長秀、長谷川、前田利家、羽柴秀吉、滝川一益、氏家卜全等四萬計にて打立ち、八月五日加州手とり川を渉り永嶋に陣取りたり。謙信は能登一州悉く旗下につけ、八月朔日兵を返して、加州にて長が一族の首七つ、倉部柏野の間なる濱に竿ゆひ渡しかけ並べ、札を書きて立てられたり。松任の城主蕪木右衛門大夫と和平し、信長著陣を聞き松任にて軍評定し、一戰すべしと手くばりあり。七尾既に落ちて謙信これまで打向はれたり。爰にて合戰無益なり、とく引退くべしと、信長の陣々いろめき立つ。恩光寺人に首を見するに、名のみにて面貌異なり。上方の軍のおし來るを聞き、謀を以て長一族の首をいつはり設けたるならん。能州をすて松任に在るは、後詰を防がん爲なるべしといふを聞きて、さわぎもしづまりけり。卽夜戌の刻に及で恩光寺柴田木下が陣に行き、先には味方一同に敗北すべきいろ有るを見てたばかりて申せしなり。七つの首は吾父兄弟にて候と告げしらせしかば、爰にて合戰すべからずとて、信長引かへさる。恩光寺是非一軍と乞へども聞入れず。恩光寺は後信長の命にて還俗し、長九郎左衛門連龍といひしは此人なり。連龍父兄の弔合戰を志し、信長の下知を請け、越前に至りて柴田にたのみけり。勝家越前の大橋に札を立て、長九郎左衛門能州に發向す。立身を志す輩は、わが被官たりとも參るべしと書きたりければ、相あつまる士八十餘人、天正七年三月二日能州穴水の城に入る。舊好の者共馳せあつまり百人に

及べり。上杉より有坂備中を七尾におきけるが、長曾檢見與十郎を大將としておしよせ戰ふに、長敗北して危かりしを、谷大學討死し、長やうやく引きとりたり。紀州士鈴木因幡初長にしたしみ有り。北越に居て今能州に來り、長有坂を和平し、從者は陸長は船にて有坂が方に來るべしとの使に、鈴木來りしに、長を殺害すべき色あり。長に從へる石黑大膳、井久留丁意、合田民部、木島小介如何すべきといふ。石黑今七尾にゆかば必害にあはん。船中にて鈴木を殺して退くべしとすゝむ。長聞きて汝が志悅ぶべし。然ども陸より回る家人皆殺されなん。吾獨生くべき義なしとて、七尾にゆき、法道寺に入りて遂に有坂に對面す。殺害にきはめたれども、有坂事故なく長を歸しけり。松川兵部今日長を討ちもらし殘多く候。おしよせて討たんといへども、有坂聞入れず。長は石動山にかゝり越中に赴く。石黑敵よせ來らんに、殘る者なくば口惜きなり。姓名をたまはり候へ、敵を支へて討死せんといへども、長汝をすて殺し、吾獨生きて何の面目あらんといふ。石黑いひがひなき事を承るものかな。本意を遂げられなば、吾子孫をとりたてたまはれといふ處に、七尾の商來りて、敵おしよするといふ。長は石動山にかゝり、石黑は物の具して待てども敵來らざれば、あとより乘付けて共に越中に赴き、神保安藝守氏春のもとに居たり。後長は前田の家に仕へて、淺井なはてに武功ありしは此人なり。長後又恕庵と稱しけり。

越中にて謙信月を賞せられし事

謙信越中にて、秋夜諸將をあつめ月を賞して詩あり。

霜滿二軍營一秋氣清。數行過雁月三更。越山并得能州景。任他家鄉念二遠征一。

信長公松永彈正を恥しめ給ひし事

東照宮信長に御對面の時、松永彈正久秀かたへにあり。信長、此老翁は世人のなしがたき事三つなしたる者なり。將軍を弑し奉り、又己が主君の三好を殺し、南都の大佛殿を焚きたる松永と申者なりと申されしに、松永汗をながして赤面せり。

東照宮後長臣等を召して御物語有りける時此事を仰出され、先年信長金崎を引退きし時、所々に一揆起り危かりしに、朽木が淺井と一味を疑ひ進退きはまりしに、松永信長に告げて朽木が方へ參りて味方に引付候べし。朽木同心せば、人じちをとりて打具し、御迎に參るべし。若又歸りまゐらずば、事ならずして朽木と刺しちがへて死したりとしろしめされよといひて、朽木が館に赴き、事なく人じちを出させ、それより信長朽木谷にかゝりて、引きかへされしなりと仰せられしとぞ。

山口六郎四郎奥田三河守高屋城を落る事

松永が士大將山口六郎四郎、奥田三河守高屋の城を守りけるを、信長攻めらるゝに、城中力盡きて一方をかけ破り落ちんとせしに、山口風雨の夜鐵砲をあつめ、東の門の寄手へ向けて散々に打たせければ、すはや打つて出づるとさわぎける。其ひまに西の門を開き、一同にかけ出で聚破りて落ちゆきたり。

長坂釣閑跡部大炊邪佞の事

謙信卒して（天正六年三月九日）養子上杉三郎景虎、（改政虎實は北條氏康の子也）猶子喜平治景勝遺跡を爭ふ。景虎緣ある故、武田勝頼に援兵を頼む。勝頼兵を出す。此時景勝謀りて勝頼の寵臣長坂釣閑、跡部大炊助に使者を送り、勝頼に黄金一萬兩寵臣に二千兩宛を與へて加勢を乞ふ。兩寵臣勝頼を勸めて、政虎を放されたり。是より諸士勝頼をうらみけるが、終に勝頼の妹聟木曾左馬頭儀昌信長に從ひて勝頼に叛く。勝頼これを討たんとて、軍を信州諏訪原に陣す。小山田左兵衛信茂もこれに從ひて、御宿監物友綱に送る。

汗馬忽々兵革辰。東西戰鼓藏レ邊恨。世上亂逆依レ何起。只是黄金五百釣。
砂金を一朱もとらぬわれらさへ薄恥をかく數に入るかな

友綱和韻

甲越和親堅約辰。黄金媒妁訟レ神恨。陪臣屠盡平安國。可レ惜家名換二万釣一。

薄恥をかくはものかはなべて世の寂滅するも金の諸行よ

兩寵臣彌邪義を行ひて武田家滅亡せり。

東照宮勝頼と大井川にて御對陣の事

天正七年九月東照宮、勝頼と大井川のいろうにて川を隔てゝ對陣しおはします。時に大木川上にて川にまろび落ちける。其音波にひゞきてことゞしく聞えしかば、すはや勝頼夜討に寄するとさわざたちてとまらず。牧野半右衞門に先陣をしづめよと仰せられしかば、牧野馳行きて何ごとにさわぎ候や、御旗本もさわぎ候ぞ、とくしづまり候へと呼りければ、愈みだれたちけり。かゝる處に、大久保七郎右衞門忠世馳來り、勝頼おし寄すべしとて、御旗本は物の具かため敵を待ちかけたるに、何とて先陣の人々かくまで驚きうろたへ候哉、後日に嘲りわらはるべし、とくしづまり候へと罵りければ、是に恥ちしめられて、程なくさわぎもしづまりけり。

一說持船の城を攻めおとさせ給ひ、保ちがたしとて焚きすてらる。此時勝頼沼津の城普請ついちの上にて、此烟を見られしが、北條家の軍を後にして、九月二十日東照宮の御陣に打向ひ、富士川を打わたす。東照宮客戰は危しとや御思慮ありけん、兵をかへして大井川の伊呂をわたらせたまふべきに定めさせ給ひしに、俄に總軍さわぎたちてしづまらず。牧野半右衞門制し止むれども、彌さわぎしに、七郎右衞門忠世、御旗本に大提燈を高くさしあげさせ、士をつけおきて、わが歸るまで動くべからずといひふくめ、先陣に行きて、御旗本は二の身を討たんとてしづまりたり。其證はあの火の動かぬを見よといひければ、是によりてしづまりければ、やがてのり歸り、先陣はよくしまづりて敵を待體なり。以後先陣の人々にわらはるべしといひければ、これもまたしづまりけるといへり。

栗田刑部幸若が舞所望の事附時田が首實檢の事

東照宮高天神の城をかこませたまひ、柵を付て固く守らせらる。城中後詰を乞へども勝頼出でず。粮盡きけり。栗田刑部使をもて幸若が舞を一曲所望し、是を今生の思ひ出にせんと申しけるを、東照宮聞し召し、やさしくもいひけるよとて、幸若に高館を舞せらる。栗田が最愛の小姓時田鶴千世といひし者に、絹紙やうの物をもたせ出して、幸若に贈りあたふ。其後落城の時、時田討死しけるを首をとりたれども、女の首なるべしと人々疑へり。東照宮聞し召れ、眼をひらき見よ、女ならば白眼なるべしと仰有りければ、ひらいて見るに黑眼あり。又幸若忠四郎も高館を舞ひける時、見しりたりければ、時田が首に定りけり。

岡田竹右衞門見切の事

天正八年七月東照宮田中の城を攻めさせ給ひ、八幡山に御陣有りて、苅田はたらきあり。勝頼後卷せんとて甲州を打出づる。松平康親が士岡田竹右衞門元次、此ごろ夕立洪水有るべき時なり。大井川は一夜に水出て渉りがたし。勝頼血氣の勇將にて候へば、もし俄に押しよせ候事あらん。苅田終らば、とく川を渉りて兵をかへされて然るべしと申す。東照宮尤なりとて、川を渉り兵ををさめ給ふ。果して其夜大雨はげしく大井川水出たり。

朝日千介西郷伊豫を討つ事

田中の城を攻めらるゝ時、西郷伊豫といふ剛の者足輕を引具し、度々打て出で、寄手を破りければ、東照宮誰かある、西郷をうつべき者はと、仰有りけれども、答へ奉る人なし。其夜菅沼大膳が陣に人人あつまりて此事をいひ出したるに、菅沼が小姓朝日千介（後には丹後と申す）十八歳なりしが、すゝみ出で討ちとるべしといふ。菅沼聞いて、汝寢言をいふやといひしに、必定討取り申さんといへば、さばかりの古兵も軍しかねつる西郷也。容易く討たん事思もよらず、そこ立去れと罵りければ、かたへより、いやとよ千助がつらだましひなみ〳〵ならず、末頼母しきわか者なりといひなだめけり。千介あすを待たれよ、西郷が首提げて參らん物をと獨言して退きけり。かくて夜深けて菅沼が愛せし鐵砲をとり出し、曉陣屋をひそかに出で、岡部と藤枝の間なる竹林にかくれて居たり。夜あけて西郷馬に乘り、足輕引具して來る。東照宮は岡部のかたへの小山に陣しておはせしが、敵又出でたると仰有りける處に、千介鐵砲をためする、西郷を馬より打落し走り出で首をとり、かけ歸りてかくと申す。東照宮あはれ剛の者よとほめさせ給へば、是より千介が名高く聞えけり。

菅沼定盈膽氣 附山口五郎作後藤金助討死の事

天正二年勝頼兵を出して菅沼新八郎定盈が、新に構へたる城を攻めんとす。定盈が一族を嚮導として不意におしよする。謀をしりたる者有りて告げしらせけり。口月二十九日の暁に、定盈が士共大敵和田嶺本宮坂二筋にわかれて攻來り候間、とく退かれよといふを聞きて、一軍もせず逃落ちん事弓箭と る身の恥なりといふ。人々永祿年中今川家より攻めし時は、西郷孫九郎元正加勢たりき。今多からぬ

士卒打ちちりたれば、早く城を出で運をひらくの道こそ然るべからんといへども、定盈兵を出して敵の樣を見せしむ。山縣が軍競來る由告げけるに、定盈則にゆきてうたひをうたひて出でず。足輕の頭山口五郎作しひて諫めければ、則より出で手を洗ひけるが、又湯をもて口すゝぎたる體常のごとし。しひて諫むれば、南の廓より退きけるが、途中にてわれ等が伏所に火をかけざる事、後に敵に嘲らるべし。誰かは歸りて城に火をかけ、又日比愛したる厩を携へ來るべきといひもあへぬに、中山與六、十八歳なるが引返し城にもどり、火をかけ厩を脣にして出でたりけり。定盈は宇利を經て西郷へ赴きける。あとをしたひて與六海倉淵まで退きけるに、與六が一族後藤金助追つかけ來て、きたなくも敵に後を見するよと詞をかけたりしかば、與六馬ひき返しむずと組みて、既に金助か首をとらんとせしに、多嶺の士あまたおちかさなりて終に討たれけり。山口は定盈が後殿して主從三騎素絹の瀬を渉る處に敵追來る。山口引返して敵あまた射伏せたれども、馬疲れければ敵は近づく。鍬田村にかゝり吉祥山に赴く。敵猶追かけ來れば、散々に射しらましけるが、馬動かざりける故、乘りはなちて歩だちになり山にかるゝ。箭二筋のみ殘れり。菅沼刑部鹽津傳助追つめければ、射たれども中らず。指添を抽いて手裏劍にうつ。刑部が頭上をうちかすりたり。山口も終にそこにて討死し、其墓今にありといへり。

岡崎三郎君の御事

岡崎三郎君天正七年二股の城にて自殺おはしましける事は、信長より叛逆の志有りて勝頼に内通し、二股の城へ甲斐の兵を引入るべきとの三郎謀あり。此事は酒井左衞門尉よく存知たりと告げ申されしより事起りて、つひに死を賜りぬ。

忠次を信長召寄せて、三郎君の北の方より告げ申されし十二條の惡事をあげて、忠次に問はれしに、忠次是より前、三郎君の侍女おふうといひし美人をひそかに己が妾とせし事によりて、三郎君憤深かりければ、陳謝の事に及ばずといへり。

又一說に、佐久間右衞門尉信盛三河に參りけるに、東照宮御馳走ありけるが、三郎君をめされ御對面有りしに、佐久間黃なる綿ばうしをかぶり居たるを、三郎君ひき奪ひてなげ棄て無禮なりと怒らせ給ふ。東照宮驚き思召しけるに、三郎君われは信長の婿にてこそあれと仰せられしかば、佐久間無禮を謝し申せしが、是も信長に讒言せし故ともいへり。三郎君は勇氣たくましくきはめて物あらくおはしまして、軍に臨みて氣色かはり、髮毛も逆にたつべく見えしを、東照宮御覽じて、摩利志天の像に似たりと仰有りしとぞ。

平岩七之助親吉は三郎君の傅なりしかば、臣が諫め申さゞる罪を以て死刑に行はれ、首を信長におくり、三郎君をば獄におしこめおいて、時を御待ちあれと申しけるを、東照宮汝が忠心は誠にいふべき詞も非ざれども、よく察せよ、武勇われにまされりと思ふ子を殺すは、忍びざるの至なり。汝が首を信長におくるとも、既に吾家の長臣酒井が信長にあくまであしくいひつると覺えたれば、なか〳〵聞入

れられじ。汝を殺さば恥の上の恥、損の上の損とは是なるべしと仰せられけるとぞ。其後年經て忠次目を煩ひて久しく引きこもりたりしが、御前に出て年老い候ひぬ。子を不便にせさせ給へと申しけるを聞召し、信康生きて有るならば、かばかり心を勞すまじきよ、汝も子の不便なる事をしりたるが怪しきと仰せられしかば、言なくて退出したるとなり。又ある時幸若大夫が滿仲を舞ひたりしを御聞き有りて、滿仲の舞は、大久保は得見まじいと仰せられしかば、忠世も引きこもりけり。これは三郎君を忠世に御あづけ有りしに、定めて引具し參らせて、片かげの山林に身をひそめなんと思召しけるに、さはなかりける故、三郎君の御事を悔ませ給ふをり〳〵、御詞には出ざれども、事にふれ數年の後も愁傷の色あらはれさせたまひけるとぞ。

攝津國花隈城落る事

攝州花隈の城は、荒木攝津守村重が一族荒木志摩守元清こもれり。天正八年信長の命にて付城をかまへ、花隈の北諏訪が嶺には、護國公、西の方金剛寺山には士大將伊木清兵衛忠次、森寺清右衛門忠勝、南の方生田の森には護國公の嫡子勝九郎之助守り給ひぬ。いづれも花隈より六七町計を隔たり。三月二日城より兵を出す。勝九郎二十二歳にて組討の功名あり。國清公（此時古新と申す後に三左衛門尉輝政公）十六歳にておはせしが、是も組討にて首をとり給ふ。護國公敵五六人自ら討ちとり、伊木清兵衛、秋田嘉兵衛、堀興左衛門、芳賀五郎右衛門、石黒武左衛門、佐橋武右衛門、後藤市兵衛、波多野彌藏等はげしく戰ひて追崩す。或夜護國公森寺政右衛門を呼んで城中へ忍入り、能見來れと命せらる。森寺行く時梶浦勘兵衛も打連れんとす。森寺今夜の物見は大事なり、相俱はん事叶ふべからずといふ。梶浦聞きて思ひ立つたる事空しく歸るべきや、自害するより外なしと、中々歸るべき體にあらざれば、うちつれたり。陣と城との間に小き坂あり。城中より武者二人槍を提げ來るに出あひ、二人とも討ちとり首をば草の中に匿し、搦手の水道より忍び入り、又水道より出て、匿し置きたる首を持歸り實檢に入れ、城中の有さまを申せば、護國公はや城は攻めとりたるこゝちするよ、いかにしてかは此功を賞すべき。但梶浦は何とて行きたるやと問はるゝに、梶浦承りて、政右衛門に仰せられしを物かげにて聞き候と申す。護國公近習の人をのけていひつる事を立聞きし、且軍法を破りたると怒りたまふ。其時森寺只今忝き仰を承り候ひき。さして賞美の望み候はず。勘兵衛が咎をゆるさせ給ひ候へかしと申せば、護國公さてやみなんとぞ仰せける。かくて七月二日に及んで、生田の森の南へ馬の草苅に雜人出でけるを、城中より兵を伏置きて追散しけるを、生田の森の付城より、是を見て藤九郎馬上に槍を横たへ、續け者共とて馳向ふ。梶浦兵七、河崎忠三郎、大陽寺左平次、臼田喜平次、日置清十郎など追ひつゞき聲をあげて切りかゝる。竹村喜左衛門、乾平右衛門、長谷川新次郎槍わきを射る。淵本彌兵衛は四寸角の柱の一丈餘りなるを打振りて、敵をたゝき伏せ相戰ふ。金剛寺山の伊木森寺も大手の軍烈しきを見て、搦手より乘りとらんとおしよする。城より野口與一兵衛といへる者半町ばかり打て出で防ぎ

けるが、野口も討死すれば城ぎはへおしつむる。大手の戰に寄手多く討たれ危かりければ、引返さんと護國公梶浦に詞をかけらるれば、勘兵衛唯今あげんとせば、彌〳〵みだれあしに成るべし。先ほどは鐵砲の數少く覺えつるに、俄にましたるは搦手より大手へ救來りぬらん。政右衛門早からめ手へおしつめ乘りこみ申すべし。然るに只今大手の味方を引取らば、敵搦手へまはりて政右衛門討死すべしと申す。護國公尤なりとくゆきて見來れと仰せられしかば、勘兵衛馳せつけてしか〳〵の事なりといふ。政右衛門よくこそいひたれ早乘入るべし、大手を攻められ候へといへといふ。勘兵衛此場を見すて、歸らんは、口をしけれども、使の仰重ければとて、かけ歸りかくと申せば、護國公無二無三に乘破れと下知せらる。勘兵衛は城兵の必突いて出づべき門脇につめよせたり。搦手よりも伊木森寺先をあらそひ門を破りて攻入りたり。森寺はことしの春案内はよく見たりし故、門を破る透間にかたへの屏を踰ゆ。敵槍にて突きけれども、飛びこみて其まゝ討ちとりたり。梶浦が察せし如くからめてに防ぐ兵少かりければ、攻入りて火をかけたり。城兵も大手の門をおしひらき切つて出る。勘兵衛待請けて槍を合す。城兵爰を切りぬけんと死狂に成りて戰ひけるに、寄手からめてより攻入りたるが、敵の後へ切つてかゝりしかば、城兵濱邊をさして敗北せり。兵庫の築島に雜賀孫一郎花隈の加勢として有りけるを、伊木森寺先陣にておしよせ攻落す。此時湊川にて勝九郎五輪作右衛門といふ剛の者と槍を合す。森寺政右衛門も馳付きたれば、作右衛門引返して退きけるが、五輪の指物を是はかくれなきさし物なり。兩人へまゐらするよといひて、川へ飛びこみて逃れ得たり。黑き四半に白き五輪の形を染めたるなりしとなり。信長より勝九郎國清公に馬をまゐらせらる。護國公今度の軍わが目前にて各々功名したるなれば、明に見屆けぬ。中に就きて梶浦が決斷、槍を合せたるよりも忙しき場に、よくこそ察したれとて、かへすゞ〳〵賞美有りけるとぞ。

高天神落城仁科信盛戰死の事

天正十年勝頼の弟仁科五郎信盛高遠の城を守る。織田信忠僧を使として勝頼の滅びん事近きにあり、とく城を出でらるべしといひ送りたりければ、信盛怒つて返答もせで僧の耳鼻をそいで追出す。信忠さらば攻めよとておしよせてきびしう攻むるに、城兵殘りすくなく討たれ、信盛、小山田備中、渡邊金太夫照、春日河内守、原隼人、今福安左衛門、諏訪莊右衛門已下十八人、十二間に七間の廣間にこもり、火をちらして戰ふ。信忠淺黃金襴のほろかけて屏にあがり、梧桐の枝にとりつき下知せらるゝを目にかけ、七八度打てかゝる。此時三十五六歳計の女房の緋をどしの物の具著、眉尖刀を提げ、諏訪莊右衛門が妻なりと名のり、七八人なぎ伏せて自害しけり。信盛を始として死狂に切てまはれば、攻めあぐみたる時、森武藏守長可屋根の板引破らせ、鐵砲を打ちこみたりければ、信盛床の上に上り、腹切つて腸をつかんでから紙に擲ち倒れ死す。其血痕後まで有りといへり。小山田已下も自害したり。信盛此時十九歳なり。信忠のとりつかれし梧桐に槍刀のあとひしと付きて、大廣間の天井も柱も槍太

刀のあとありて、血にそまらぬ所なし。庭に殘れる雪に、血かゝりて紫となれりとぞ。

卷之五

勝頼の首鑿穿の事

勝頼天目山に落行く時、滝川一益攻入りて落人ども討ちとり、勝頼の首をとりたれども、誰といふ事をしらず。小溝の中に棄てけるに、百姓ばら溝の前にて必平伏し禮をして打通る。いかなる故ぞと問へば、あの溝の中に屋形の御首のおはしまし候といふ。さらばとて首どもとり出す。信忠勝頼の首をわかち置き、先滝川義大夫を呼びて、汝がとりたる首はいづれぞと問はるゝに、是なりとて出す。此は土屋總藏昌恒が首なり。伊東伊右衛門といふ者すゝみ出て、勝頼の首を見て、此こそ伊右衛門が取りたると申す。證はいかにと問はるゝに、斬口に乘つたる馬の栗毛かす毛の血にまじりてつきて候。天目山の麓田野より鞍の四方出に付けし故なりと申す。果して詞に違はず。よりて伊東がとりたるに定りぬ。信長勝頼の首を見て、いかに汝が父非義不道なりし故、天の譴のがれがたく今かくなりぬ。信玄一度京に赴んと志しけると聞く。汝が首を京におくり、女童に見しられよと罵り、首を東照宮の御もとにおくられけり。東照宮御將机におはしませしが、勝頼の首と聞し召し、將机をおりさせ給ひ、偏にわかきゆゑ思慮なくかくならせ候と禮義正しく仰せあり。是を傳へ聞く甲斐信濃の士ども、徳川家に心をよせ奉るもとゝなれり。

又一説に、勝頼の首を瀧川が士瀧川莊左衛門といふ使番に持たせて、信長に見せ申せば、さま〴〵に罵りて、杖にて二つつきて後足にて蹴られけり。莊左衛門是を見て、かゝる事こそなけれ。織田家の運命はや盡きはてなんといひけるを、蜂須賀阿波の守至鎮の長臣稻田修理が弟丹波瀧川が方に信長より置かれたるが聞きけるが、果して程なく信長弑せられしかば、莊左衛門心ある者よとて、蜂須賀の家より搜求めけるに、瀧川の家滅びて後、かくれ居たるを召出して仕へけるとなり。

秀吉勝頼の滅亡を惜れし事

信長甲州に攻入られし比、秀吉は筑前の守とて西國毛利家に向ひて甲州の軍に從はず。勝頼死して甲州平均なりといふを聞き、秀吉大息ついて、あたら人を殺したる事の殘り多さよ、我軍中に有るならばしひて諫め申して、勝頼に甲信二州をあたへて關東の先陣としたらんに、東國は平おしにすべきにとくりかへし悔まれけり。

信玄の館の跡を信長公見給ひし事

勝頼亡びて後、信長信玄の館を見んとて、馬を乘入れんとせられしに、馬進まざりしかば引返されけり。東照宮は程經て甲州を治めさせ給ふ時、信玄の館の跡御覽の時、館の門外にて御馬より下りさせたまひしとぞ。

勝頼天目山にて最後の事

勝頼滅亡天目山にての事共、甲陽軍鑑には切死に歿せられしよしのせたり。甲州の士民のいひ傳ふるとは異なり。鶴瀨も勝頼に背きしかば、天目山をさして落ちゆかれしに、一揆所々より起りてければ、百姓の家に從ひし婦人どもをいれ、傍の人家に茅の有りけるをはこばせて、出入る口をふさがせ火をかけられけり。小高き所に上りて、武田の家代々持傳へられし栢無といへる物の具を、信勝に著せしめらる。土屋總藏肩入の役をしけり。さて勝頼薙刀を横たへ、寄せくる一揆に向はれしを、總藏屋形は新羅三郎より二十八代、弓箭の家をつがせたまひ、今はのきはに及ばせ給ふとも、一揆ばらに御首をわたし申さん事口惜しく候と諫めければ、尤なりとて物具ぬぎ、總藏に介錯せさせて終られしとぞ。相從へる人々、皆互に刺しちがへて勝頼の供しけり。總藏と僧の麟岳と殘りとゞまれるが、皆事よく終りしを見とゞけて後、總藏自害しければ、麟岳刀を口に喰へ、貫かれて死しけるとなり。されば後甲陽軍鑑天目山の事はもとより、彈正の筆記に非ず。後の人誤り傳へて、書きたるなるべし。

禪僧廣嚴院勝頼の屍を葬る事

勝頼父子の屍田野にあれども、信長を恐れて慈林寺の僧を始として歛むる人なし。田野の西北四里計に中山といふ所の洞家の禪僧廣嚴院來りて、勝頼夫婦信勝已下の屍ををさめ葬る。其後、東照宮甲州を御をさめ一寺を建立有りて景德院と號し、田地を寄附あり。小宮山内膳友信が弟の僧なりしを、住持の僧となしたまへり。

信忠慧林寺を燒かるゝ事

勝頼亡びて後、武田家尊崇しける慧林寺に、前將軍義昭公の使大和淡路の守、三井寺の上福院、佐々木承禎三人かくし置きたる聞えありければ、早く出すべきと信忠下知せらるゝ事三度に及べども出さず。信忠怒つて累世の旦越勝頼をば少の間も境内にとゞめず。其遺骨をだにとり歛めずして詮なき者をかくしたるとて、津田次郎信治、長谷川與次郎等をして寺をとりまいてさがさるゝに、三人はとく逃げさりぬ。僧徒皆山門の樓に上りてこもりたるを、其下に燒草を積みて火をかけたれば、快川を始として、座して合掌して焚死す。其餘をめきさけんで燒死にける者、寶泉寺の雪峯、東光寺の藍田、長禪寺の高山等、兒童に至りて八十四人なり。

又禪僧の語り傳へしには、快川濃州に在し時、信長招待すれども肯はず。今川の家に行きて甚今川家を輔佐したりければ、信長にくまれしに、甲州に往きて慧林寺の住持たり。信玄の死を深くかくしければ、信長愈〻怒りてさま〴〵にさぐり聞かせられしに、快川の方より泄さざれば、信長怒にたへかねられしが、武田の亡びし故、遂に焚殺されしとなり。又其時樓下に槍先をそろへてあまさじとしたりしに、快川弟子の南華に法の絶えなん事、くちをしとても逃るべきにあらねども、樓より飛びて死に候へと云ひしかば、南華飛びたりしに、群りたる士卒の槍ぶすまを作りたる者ども、槍をふせたりしかば、南華たすかる事を得て、後豐後月溪寺にありといへり。又つゞいて飛びたる者十六人有りといへども、其名傳はらずとかや。

東照宮依田信蕃を助け給ふ事

天正十年三月東照宮江尻に御軍を出され、成瀨吉右衞門正一を以て田中城を守りける。依田右衞門の佐信蕃に降參をすゝめられ、武田の舊臣悉背きて滅亡近きにあり。とく城を出候へと仰せおくられけるに、依田從ひ奉らず。武田の長臣共の書簡を得て虛實を定むべき旨を申す。其後先年遠州二股の城にてゆかりも候へば、大久保忠世に城を渡すべしと申せしかば、東照宮尤なりとて、穴山梅雪が書簡を送らせらる。信蕃こゝに於て城を忠世に渡しければ、降參せば、信州の本領をあて行るべき山仰出されしに、依田承り、勝頼の存亡を審に承らざる間は、仰を承りがたしと申して、信州佐久郡芦田に赴きけり。勝頼既に亡びて、信長今度勝頼に二心なき輩といふとも、武名ある者は諸將召しかゝゆべからずと下知し、猶かくれ居る者を搜し出して死罪に行はんとなり。東照宮此事をいたませたまひ、信蕃を市川の御陣に召され、密旨を蒙り、主從六人遠州飼東郡二股の奥小川といふ所にかくさせたまひけり。其餘仁德によりて、人あまたたすけさせ給ひけゝ。

武田信綱誅戮の事

天正十年三月武田遺遙軒信綱降參しけるを、信忠森武藏守長可に下知してころされたり。長可各務兵庫元正を使とし、武前采女を添へたり。信綱刀を膝下に置きてはなたず。各務武前行き向ひて武藏守

が愛する馬の候。なぐさみに見たまはんやといへば、庭に出る處を、元正二尺六寸有りける雲次の刀にて一太刀斬りたりしに、信綱小脇指を抽く處を、采女つゞいて切伏せたり。小性河野といふ者、信綱の刀を持居たりしが、即抽いて采女を切る。兩士遂に河野をも討ちとめたり。元正槍を合せ首をとる事廿一、ことし高遠の城攻めにも、さまより覗ひ見群たる眞中へ飛入倒れたるが、起きあがりて散々に切あひ首をとりけるが、鶏尾の棒のさし物さして、あたりをはらふ有さまを信忠見て、誰と問ふ。長可わが家の士各務兵庫と申ものなりといへば、誠に今日の見物なりといはれしとぞ。

戸田半右衞門山口小辨佐々清藏功名の事

高遠の城にて、戸田半右衞門重政一番にかけ入る時、赤ほろに金の戻竹の出し戸張隱のす戸衝木に當て通り得ず。尻居に倒るゝ其間に、信忠の小性山口小辨佐々清藏ふみ越えてかけ入りたり。戸田後に人に語りて、われらが如き武功にては、ほろ指物の門木戸につかゆべきと心づく事はなき物なり。敵を見てかゝる時、外の志はなきものなり。もし勝れたる武勇の人は別の事よといひけり。半右衞門後武藏守と稱し、關原にて討死なり。信長後に感狀をあたへらるゝ時、先小辨に手づから國久の刀をあたへ、次に佐々に長光の脇指をあたへ、汝が武功は誠に大功の内藏助が從子なればと詞をかけらる。二條にて明智信忠を攻むる時、清藏小辨に向ひ、すはだにて死んは屍の上の恥なるべしとて打つて出で、一人づつ敵を斬伏せ、其屍を引入れ物の具とりて打著、又切て出で討死せしとなり。共に十六歳容貌世に超えて美しかりけるが、面に血を濺ぎ、髪の亂れしを見る人殊に惜みあへり。小辨は伏見の賤しき者の子なれども、美少年にて呼出されけり。

小山田信茂誅戮の事

小山田兵衞尉信茂は、武田累世の長臣なりしに、勝頼に叛き降參して、善光寺に有りしを、信忠堀尾茂助に下知してころせとなり。則武三大夫を討手とす。士一人そへて甲冑を送り一禮せん時刺殺せとの事なり。三大夫善光寺に赴き、甲冑を贈りまゐらする由いひければ、小山田出て一禮すれども、則武討つべきけしきなし。やゝ有りて、則武しづかに武田の家士大將として數世重恩の身、今度主君に叛き不義の至りに候故、討手に參候、たち向はれよといふ。小山田聞きて、口をしくも計られけるよ、とく首を刎ねられよといへども、則武猶動かず。小山田刀に手をかけ、是までに候といへば、其時則武立あがりて首を斬りたりけり。

馬場美濃が女召出さるゝ事

勝頼亡びて後、馬場美濃氏房が女召出さるべしとて、甲州の郡代烏井彦右衞門元忠に仰出されしに、尋ねさがし候へど行方しれざる由を申けり。程經て其あり所しれたる由を申す人の有りければ、東照宮何かたにかくれゐたるぞと御尋あり。即烏井がもとに潛に隱し置きたると申ければ、すべて彦右衞門はぬからぬもの哉と、仰せ有りけるとぞ。

辻彌兵衛が事

辻彌兵衛盛昌は天正三年の勘氣にて、七月甲州を出て信州小諸の與良遠江がもとにしのび居たりしが、勝頼亡びて後、德川家に仕へ奉る。甲陽軍鑑に勝頼天目山に落行く時、辻一揆の長となりて攻めたる由を、しるせるは非なり。

明智光秀信長を弑する事

明智日向守光秀信長を弑せばやと思ふ事久し。天正十年六月朔日の夜、明智左馬助秀俊を寢所によび入れ、かたへの人をしりぞけ、一大事の有るなり、蚊屋の中に入れといふ。秀俊頭を蚊屋の中にさし入れて何事にてか候といふ。光秀汝が首を得させよといへば、秀俊聞て、一人のみにて候かと問ふ。光秀三人の命をもらひ猶足らざる故なりといふ。秀俊いと易き事にて候。大事ことよく成るべしといへば、光秀いかにしりたるやと問ふに、事新しき仰と日比の恨思ひ合せて候といへば、光秀いま信長を討たんと思ふなり。汝を偏に頼み思ふぞよ。先汝に語らんと思ひしに、中々諫め爭ふべし。汝力を合せずば、志遂げがたからん。從はずば汝を斬らんと思ひしとて、盃を出す。秀俊先臣一人に語りたまふならば諫め申すべし。はや外にも語りたまはんには、駟も不及と申事の候。泄聞えて臍をかむとも益なし。とく打立給へとて、夜半計に俄に軍兵をおし出し、明れば二日の曙に信長の宿せられし本能寺をとりかこむ。森蘭丸長定何事ぞ物さわがしきとて、白きかたびらの上に淺黄かの子の小袖をはをり立出て見るに、壁の外に水色の旗見ゆる。信長敵は誰と問はるゝに、蘭丸明智にて候と申しもはてぬに、箕浦大藏、古川九兵衛、天野源右衛門等大庭にみだれ入り、信長白きひとへ物を著、弓持ちて射られしに弦きれたり。地臙脂のかたびら著たる二十七八歳計の女房、十文字の槍を持來りけるを、信長おつとり、しばし防がれしが、内につと入りて、障子をひき立てたれども、燭臺のいまだ殘りし火に、信長のかげうつりたるを見て、天野槍をとりのべ刺通す。蘭丸弟の坊丸十七歳力丸十六歳なりしが、切つて出で討死しける隙に、内より火をかけ灰燼となりたりけり。

秀吉備中にて光秀が書を取られし事

明智信長を弑する時、秀吉は備中にて毛利家に向て陣せしが、秀吉所々にしのびの者を置かれしに、備中庭瀬にて怪しげなる飛脚の者を生どりたり。秀吉其書を披き見るに、信長を討ちとらば秀吉必敗北すべし。秀吉を追擊たれよと毛利家へいひ送る書なり。もし此書毛利家に至らば、いかなる謀あるべきもしるべからず。秀吉の慮淺からずと人いへり。又高松の城はたやすく攻落すべきに、水攻にして日を經たるは、信長常に大功の速に成を忌みねたむの心あるを察しての故なりといへり。

秀吉西國の米を買れし事

秀吉備中に陣して毛利と和平せん事を計り、密に手だてを連し、西國の米を價を貴く買はれしかば、城米を出して賣る者多し。小早川隆景一人固く制してうらせず。信長弑せられて、秀吉と毛利家手ぎ

れなるべかりしに、兵粮のゆたかならざる故、終に和平に及べり。

光秀居城を築く事 附辛崎の松の事

明智江州坂本に城を築く時、三市といふ者、

波間よりかさねあげきや雲の峯
光秀わきに、

磯山つたへしげる松村

又光秀丹波龜山より愛宕につゞける山に廓をかまへ、此山を周山と名く。自ら武王に比し、信長を殷の紂王にたとふる心後にあらはれたりと人いひけり。又志賀唐崎の松、いつの頃にか枯れたりしを、光秀植るつぎて、今の松なり。光秀よめる歌、

われならで誰かはうゑむひとつ松こゝろしてふけ志賀の浦かぜ

一説、青蓮院宮尊朝法親王の辛崎の松の記にて見れば、大津の城主新庄駿河守直頼、舍弟松庵、東玉雜齋直壽此雜齋天正十九年卯の秋植られし由、其時のうたに、

おのづから千代も經ぬべし辛崎のまつにひかるゝみぞぎなりせば

されば今の松は此新莊の植られしか。

森蘭丸才敏の事

森蘭丸は三左衞門可成が子にて、信長寵愛厚し。十六歳にて五萬石の地をあたへらる。ある時刀をもたせ置かれしに、刻鞘の數をかぞへ居たり。後に信長かたへの人をあつめ、刻ざやの數いひあてなん者に此刀をあたふべき由いはれければ、皆おし料りていひけるに、森はさきに數へて覺えたりとていはず。信長其刀を森にあたへられけり。信長森が明敏を試らるゝ事多かりけれども、一度もあやまちなく、其才老年の人も及ぶべきに非ず。明智が恨ある事を察し、潛に信長の前に出て、光秀飯をくひながら深く思慮する體にて箸をとり落し、やゝ有りて驚きたり。是ほど思ひ入たる事別の仔細はよも候はじ。恨奉る事しかゞなれば、大事をたくむならん、刺殺すべしといひけるを、信長いやとよ、佐和山をば終に汝にあたふべしといはれけり。此は森これより先に父が討死の跡にて候へば、坂本を賜はれと申しけるを、明智に與へられしかば、讒言すると思ひ信せられず、果して弑せられき。

光秀反狀の事

光秀天正七年六月修驗者を遣して、丹波の守護波多野右衞門大夫秀治がもとに、光秀が母を質に出したばかりければ、秀治其弟遠江守秀尙共に本目の城に來りけるを、酒もりしてもてなし、兵を伏せおきて、兄弟を始從者十一人を生どり、安土につかはしけり。秀治は伏兵と散々に戰ひし時、傷を蒙り途中にて死す。信長秀尙以下を安土にて磔にせられたり。丹波に殘り居たる者ども明智が母を磔にしたり。明智遂に赤井等を攻したがへ、丹波を信長より賜はりけり。又信長ある時酒宴して七盃入のさか

つきをもて、光秀にしひらるゝ。光秀思ひもよらずと辭し申せば、信長脇指を抽き此白刄をのむべきか、酒をのむべきかと怒られしかば、酒のみてけり。其後稻葉伊豫守家人を明智多くの祿をあたへよび出せしを、稻葉求むれどもどさず。信長もどせと下知せられしをも肯はず。信長怒つて明智が髮を捽みひきふせてせめらるゝ。光秀國を賜り候へども、身の爲に致すことなく、士を養ふを第一とする由答ければ、信長怒りながらさてやみけり。東照宮御上京の時、光秀に馳走の事を命せらる。種々饗禮の設しけるに、信長鷹野の時立ちより見て、肉の臭しけるを、草鞋にてふみちらされけり。光秀又新に用意しける處に、備中へ出陣せよと下知せられしかば、光秀忍びかねて叛きしといへり。されば信長の暴なるもとより論を待たず。光秀土地を略せん爲に、老母を質にしてころしぬる不孝を、信長の賞せられたる、君臣共に惡逆の相あへる、終を全せざること理なり。

秀吉浮田を欺きて上洛の事

光秀信長を弑する時、秀吉備中より引返さる。此時備前の浮田八郎秀家幼少なれども、長臣老將の面々いかなる謀あるや料りがたければ、先使を岡山の城にやりて、一刻もとく馳上り、弔軍を志候、岡山にて相謀べしと云はせられける。浮田はもとより、光秀に心を通じければ、秀吉の歸路をふさぐべきやいかゞせんとゝふ處に、かく告來れば、さらば城中にて討ちとるべし、願ふ處の幸なりと、ひそかに悅びあうて其謀をぞ相議しける。秀吉六月七日の明がたに高松より引返し、午の刻ばかりに宮內に著きて、やがて岡山に赴くべしといひふらしけるが、俄に霍亂したりとてうち臥しければ、秀家の使來りたるに、近習の者共出逢ひて、只今霍亂にて吐瀉せしが、腹の痛少しやみて寢入候とあひしらひて時を移す。其間に、秀吉は奧州驅といふ名馬に乘り雜卒にまじはり、吉井川をわたり、片上を過ぎ宇根に馳せつけたれば、馬つかれたり。さて使を岡山にやりて、急ぐ事の候うてわき道を通りて過ぎ候ひぬといはせられしかば、浮田の人々皆あきれけるとぞ。

黑田孝隆思慮の事

秀吉信長の弔合戰せんとて、備中より引返されし時、姫路に立ちよらるべしと人々も思ひけるに、黑田孝隆姫路に馬を駐めらるべき事、少の間も然るべからず候。かりそめの旅にも、家出は遲々するが人情なり。今度は主君の仇を討つべき爲の軍にて候。大和の筒井細川を始め明智がしたしみある者ども馳加りなば、ゆゝしき大事なり。いかにやせんと、思慮のいまだ決せざる中に、いそぎておしつけられよと謀りたりければ、よくこそいひたれとて、一人も姫路へよりたらん者をば、忽誅すべしとふれさせられけり。孝隆先達て人を走らかし、姫路の町人ども河原へ出で粥をしたくして、軍兵にもてなすべしと下知したりければ、食肴を河原へ持出でたりければ、立ちよらずして山崎表へおし付けられけり。太閤記に、姫路に二日滯留といへるは誤なり。

池田家の使者筒井順慶を試る事

光秀信長を弑せし時、筒井順慶は光秀としたしければ、必興せしならんと人々思へり。池田紀伊守丈臣日置猪右衛門、土倉四郎兵衛、丹波山城三人を使として順慶のもとにやらせらる。三人承て、順慶もし明智にくみせば刺殺すべしと申す。紀州公、いやとよ、汝等死せばわが片手を折られたるに同じと制せられしかば、三人かさねて順慶と軍せんに、いくばくの手おひ討死か候べき。さらば三人も討死すべきにて候。三人をもて多くの味方にかへたまへ。順慶をうちとらば、光秀必ず敗北すべしと申して順慶がもとにゆく。順慶出であひて、いかでか光秀が不義にくみすべき。とく信長の弔軍せんといふに、げにも僞ならぬ體なれば、三人悦びて歸る道にて、山城今日順慶いなといはんに、刺殺さんと思ひて、座中をきつと見たりしに、かたへに十六七歳ばかりなる男の、順慶が刀持ちて居たりしつらだましひ只者ならず。順慶に飛びかゝるならば、頭二つに切わりつべく見えしと語りければ、日置も土倉も、されば我等もさ思ひつる事よといひけり。かの小姓は牧野兵太とて、武者修行して世に聞ゆる剛の者となりけり。

明智秀俊湖水を渡して坂本城に入る事

光秀信長を弑して安土の城を攻めおとし、左馬助秀俊に守らせて山崎に打向ひ、秀吉と戰ひて敗北せり。秀俊安土を出て光秀を救はんと京をさしてすゝむ處に、はや光秀討たれたりと聞えしかば、坂本の城に入らんと、粟津を北へ大津をさして行く所に、秀吉の先陣堀久太郎秀政に行あひけり。秀俊小勢なればうち破られぬ。本道は敵にふさがれつ。湖水に馬をうち入れ、およがせければ、秀吉の軍兵ども、汀に並居て溺れん有さまを見よと笑ひあへり。秀俊は白練に雲龍を狩野永徳にかゝせたる羽織を著、二の谷といふ冑を著、大鹿毛と名づけたる馬に乘り、年久しく坂本に有りて、大津より唐崎までの遠淺はよくしりたり。たやすく唐崎ばまに乘りあげ、ひとつ松の下にて馬には息あひの藥を飼ひ、追ひくる敵を見て居たりしが、又馬に乘り坂本に入る時、十王堂の前にて馬よりおり、手綱をもて堂に繋ぎ、矢立の硯とり出し、明智左馬助湖水をわたせし馬なりと札に書きて手とりがみに結つけ、坂本の城にいり、光秀の妻子は天守にいれ、安土より光秀が奪ひとり來れる不動國行、一字國俊の刀、藥研藤四郎の小脇差、なら柴の肩衝、乙御前の釜などいへる名物の器を唐織の肩衣に包み、天守より投げおろし、其後女童を刺殺し、火をかけて自害せり。二の谷の冑に羽織と黃金百兩添へて坂本の西敎寺に送りけり。後に山中山城守長俊が孫作右衛門友俊冑をのぞみ乞ひて得たりしが、程經て紀伊の士宇佐美造酒助孝定が許に傳はりぬ。羽織は行方をしらず。馬は無雙の駿足にて、秀吉志津嶽の軍に此馬に乘られしなり。

東照宮和泉國堺より御歸國の事

信長弑せらるゝ時、東照宮は泉州堺におはしましけるに、小勢にてかゝる亂れに、はる〴〵と三河へいかでか引きとらせたまふべきと、人々いろを失へり。東照宮素より地理をしろしめされ、河州飯森の

宮は要害の地なれば、其地を守りて軍あらんと仰せありて、森口に著かせ給ひし時、本多忠勝京都に御使に參りけるが、道にて變を聞き引返して來たり、敵大勢にて候らん、とく御歸國しかるべからんと申すを聞し召し、案内者はいかゝすべき、敵道を要らんは必定なり。やみ〳〵と討たれんは口をしからずやと仰せ有りける處に、信長より馳走につけられし長谷川竹丸、當國の交野郡津田のあたりは、信長の恩を蒙りたる者のあまた候へば、道しるべさせ候べしと申す。宇津越を經て山城の相樂郡を過ぎ木津川をわたり、それより宇治橋の上一里計東の瀬を渉り、江州信樂に出で、それより伊賀の上野、鹿伏兎越を伊勢の白子に至りて、船に召され然るべからんと定められけり。忠勝蜻蛉斬と名づけし槍を提げ、其邊の百姓を打具し、此殿の案内申せ といひて、それより道々の村々にてかくしたりければ、津田よりも案内者來りぬ。其日は山城相樂郡山田村にとさらせ給ひ、所々より心をよせし人々どもあまた警衛し奉る。穴山梅雪はこれまで從ひ奉りしが、ひき別れけり。

宇治より木幡越を、江州高島に至り、濃州に赴き、甲州に歸るべき旨を申してひき別れしが、一揆の爲に、山城の綴喜郡にて殺されけるとぞ。

其翌日木津川に至らせたまふ柴船二艘あり。忠勝からんといふに、肯ざれば、にくい奴かな切て棄てんといふに恐れてのせ奉る。やがて渉りをはらせ給ひて、二艘の船皆打わりて棄てたり。其あけの日、一揆石原村にあつまりて待ちかけたり。大和より從ひ奉りし、吉川善兵衛其子主馬助柏の木を馬じるしにして先がけして追はらふ。柏を家の紋にせよと仰せ有けるとぞ。それより宇治田原の地士山口玄蕃御膳を獻じて、宇治川に至らせ給へば船なし。榊原が士原田左衛門馬を乘入れ、瀬ぶみして打わたす。酒井忠次船一艘をさがし出して渡し奉り、雜卒にいたるまで皆わたる事を得たり。江州信樂までは嶮路なれども、警衛につき從へる人々多く、一揆手さす事もなし。多羅尾四郎兵衛光敏は世々信樂を領しけるが、其子長兵衛御迎に參りたり。人心はかりがたしと人々恐るゝ處に、忠勝いや〳〵光敏御敵するならば、彼が家に入らせたまはずともものがし奉らじ。一向入らせ給へと申せば、皆尤なりとて立ちよらせ給ふに、御もてなしを設け、人々勢を忘れたり。

又忠勝此とき多羅尾二心有りと見ば、とらへて刺殺すべしといひける故、立ちよらせたまふともいへり。

五日には高見嶺を打越たまふ。御供に候ひける服部半藏正成は、もと伊州生れの人なれば、忠勝下知して伊賀の案内者したりけり。國士あまた參りて警衛し奉りて、上柘植より三里半計鹿伏兎越といふ深山を越えたまひて、六日に白子の浦に著かせたまひて、長谷川竹丸秀一後藤五郎を始として、和州山州伊州の士に御暇たまはり、時を得て濱松に參るべきよし懇に仰せを蒙りけり。それより三河に事なく歸らせたまひぬ。伊賀は去年九月信雄攻入りて打したがへられし比、逃げかくるゝ者を求出し、殺害を專とせられしかば、國士ども三河に參りて、御恩を蒙りたる人々多かりしかば、其從類皆警固し

奉りけるとなり。やがて明智を追討の爲御軍を出されしに、伊賀の國士どもあつまりつどひて參りけるを、多くは大番に入れさせ給ひ、恩賞にあづかりけり。

小寺黑田始末の事

黑田美濃守職隆（後宗圓と稱す）は、備前國福岡の人なりしが、播磨の小寺藤兵衛政職に仕へて、子官兵衛孝隆（後如水と稱す）共に功名ありて用られけり。播州は其比所々に人々地に據りて守り軍せしが、小寺は五著に有りて姫路に小城をかまへ、黑田父子こゝに有りて、秀吉にたのみて信長の旗下に屬す。孝隆の子長政、其比は松千代といひしを、人質にして、秀吉居城近江の長濱に置きたり。此比毛利家の兵勢強かりしかば、小寺約を變せんとす。孝隆此は然るべからず、信長物あらき人なれども、一旦天下に旗をあげられん。行末はしらず先時の宜しきに隨ふべし。松千代を棄つるを悲みかく申すに非ずといさめけり。小寺聞入れず。孝隆父宗圓に父子とも誅せられぬべき密謀を告ぐ。宗圓物なれたる士五六人呼あつめ、所存を問ふに、官兵衛五著に至られなば危かるべしといふ。孝隆されば諫は尤なれども、事も見ずして姫路にたてこもらんは、君に弓をひくに非ずや。五著に赴きて力を盡し奉公し、かなはずば自害せん。其後人々心を合せ、父の御事たのみまかする由決斷せられしかば、人々父子おし隔られんはいかゝ候べき。只病とて五著の奴原に使をもて媚諂ひ欺くにしくべからず。討手來らば力なし。其後一戰を遂げて五著を打破るべし。罪なくて討たんとする惡逆の人、天の咎なからんやと口々にいへども、孝隆各存ずる旨は誠にことわりなれども、今病といはんに、實とは聞入れじ。必主君に叛くと人に誹られん事士の志に非ず。君に深く思ひ入りたる忠の空しくならんは、運のきはめなれば力なし。われ一人誅せられたりともいかにせん。此姫路をだに取れずは、天下の安危歲月を經ずして定るべしとて、とゝまる色の見えざれば、宗圓家の恥を思ひて身をすてんと思ひ定る事士の志なり。とく五著にゆきて事かなはずば自殺せよ。あとの事は心安く思ひ候へ。君の志たがふとも、われ叛くべからずといひしかば、孝隆打わらひ、さらばとて座を立てば、人々只今思し召しきられての仰は遺言にあらずや。もし五著にて難をのがれ給はずは、其時人々五著の城を枕にせんと誓ひけり。宗圓官兵衛は官兵衛の志をせよ。人々は人々の志をせよと下知せられしかば、孝隆五著に赴きけり。宗圓も君恩淺からざるは、人の存ずる處なり。今讒言を信ぜらるゝこそ悲しけれ。孝隆をやらずして引こもり、謀叛して命はをしき物ぞと敎るは、父の道に非ず。仇となりて身を殺すは恥をしる道なりけりとて、さめ〴〵と泣きたりけるが、さぞ五著にてたばかりて見んに、今姫路に弓をひく設なしそ。酒もりして、時々舞うたひて日をおくれといひしとぞ。孝隆は五著に行きて心おくべき人のもとに使して求め來れる肴ありとて饗し、しめやかに語りて打とけたる體なれば、いかにつくろふとも、心の外にあらはれぬ事はあらじなどいひあへり。又此を疑ひて黑田父子は謀たくましき者にてよき士あま

た有り。城にこもる用意せん間に、官兵衛を以て欺くべきも計がたしとて、姫路の樣を聞くに、宗圓金剛に舞ひまはせて打ちとけたる體なれば、さては別の事もあらじといへり。此時攝州荒木攝津守村重は毛利に屬し、信長と戰ひ利あらずして、有岡の城にひきこもる。此由小寺聞きて孝隆をよびて、われ毛利にくみすべきとは、内々荒木といひかはしたる故なり。今毛利家にたよらん事はわが過なりと覺ゆるぞ。されども此まゝにて手ぎれをせんに、表裏者といはれんも口をしければ、とく有岡にゆいて荒木を諫めて、もし聞入れば、秀吉に謀りて信長と荒木和平をとり行ふべし。攝州信長に從はば、われも眞に心をひるがへして信長に從ふべしといへば、孝隆聞きて、信長と荒木と和平は思ひよりも候はず。荒木度々信長に叛きたれば、いかで其言を信ぜらるべき。參りたりとも、いたづら事ならん。然れども辭し申せば勇なきに似たりとて有岡に赴く。路姫路に立よりて父子對面し、有岡に至らば、必首をはぬべきか、おさへて囚とするか、二つの中に過ぎ候まじ。五著に死なんより、有岡にて死候はば、信長も聞き又世のほまれともなり候べしと、思ひ切つたる色を、宗圓見て涙にむせび、しばし物をもいはざりしが、やゝ有つて、誠に困厄の至極なれども、名にかへて身をすつるは、義を思ふ故なりとて見送りしかば、孝隆有岡に赴きたり。小寺兼て村重に密に毛利に一味すべきに、黑田父子人質の松千代を信長に出し置きたれば、かの父子は織田に内通の志ありと告げしらせつれば、有岡の本丸によび入れ、生どりて牢におしこみけり。五著に此由聞えしかば、小寺いつはりて齒がみをなし、荒木が狼藉の次第遺恨深し。然れども此上は信長に一味のこゝろを易へて毛利に與し、官兵衛を引きとる謀や有べきといはせしかば、宗圓怒りて官兵衛生どりに成りしかば、是非の論なし。年老いたる身の子を失ひし事は、誠に力なき次第なり。然るに官兵衛をすくはん事いはれなきに非れども、先松千代を信長に出し候事は、君も又臣父子と相計れる處にて候に、今度官兵衛を有岡にて捕へたるは、荒木が横さまのふるまひなり。相はかれる處の人じちを棄てゝ、おしとめたる者を助くべきは逆ならずや。只順道に隨ひて天の冥見を待つにしかず。われわかき時より度々の軍に臨み、小寺の家の危難を救ひ候に、今齡かたぶき、たのみ切たる長子をすて候事は口をしく候へども、首をくだかるゝとも、毛利に一味せよとの仰をば得承らじとて、刀を抽き誓つてければ、使も言なくて歸りけり。宗圓が士ども五著を攻破らんといへども用ひず。村重心あらばいたはるべし。もし五著を攻めなば、村重も官兵衛を殺害すべし。しらぬさまにてあれよかくあらんと思ひて、官兵衛が女房をば潛に此比引とり置きたりとて驚かず。村重は小寺にたのまれて、孝隆を生どりたれども、己がかたきにも非れば、いたはり置けり。かくて信長有岡を攻むるに及びて、毛利家の後卷もせざれば、城落ちたりけり。孝隆は牢の中にあきれて有りける處に、栗山備後善助時々有岡にゆきてしのびて商家をかたらひ、牢の後の沼より姫路の事ども聞たりし事度々にて、案内をしりたれば、牢に走り行きて見れば、番人も落ちうせたり。此はと驚き且悅びて、善助すて置きたる斧にて鎖を破り、引きたてけれども、三年居か

がみ、其上に濕瘡を病みて起つ事あたはず。かたへなる牢中の人をたのみかきおはせて城を出で、寄手の陣にゆき、さて姫路に歸る事を得たり。秀吉播州に攻入るに及びて、小寺は但馬におち行き、黑田父子危難を脫るゝ事を得て、孝隆に宍粟郡を賜り、姫路を秀吉の城とす。後に如水と稱して智謀たくましく、秀吉の功臣第一と聞えしは、この孝隆なり。

井口兄弟武勇の事

黑田孝隆播州にて秀吉の命を承け、長の坪といふ城を攻落し、井口猪之介、三宅藤十郎に其城を預け、孝隆は秀吉の先陣たる處に、其城より逃落ちたる者ども一族を催し、其夜攻めよせたり。井口三宅人も少く攻破りて、普請もいまだせざれば守り難し。殿いまだ遠くはゆかせ給はじ。切りぬけてまゐり後卷の事申すべしと云合せ、三宅は百二十人計にて搦手に有りしが人數を殘し、二十人計りを連圍を出づる。敵利を得て攻入りたり。井口は大手にて防ぎ戰ひしが、翌朝辰の刻後卷の旗先見ゆる比、薙刀にて片股をなぎ落され、石垣にたより居たれども、敵恐れて近付かず。最後に大音あげ、此城の大將井口猪之介ぞ首とれとて自害しけり。藤十郎は後三宅若狹と武名あり。猪之介に三人の弟あり。六大夫甚十郎與一之助といふ。六大夫は播州北條の構を守りて討死しけり。ある時孝隆の士罪ありて討手を向けらるゝに、却て討手を切て兄弟三人町に出で、大なる屋に取こもりたり。甚十郎見て參らんといへども、孝隆ゆるされざりしに、再三に及びければ、さらばとてゆるされたり。甚十郎其處にゆくと、忽門の潛戸をひき放し、楯にとりて飛びこみ、戸を以て二人を打伏せ、一人は切殺し、打倒したる二人も切て、首三つとりて馬に乘り、二町計歸る處に、罪科人の從者主人の首を見て、槍にて甚十郎が馬上を目がけ飛かゝりて突く。つかれながら、其者を切つてすてたれども、痛手にて馬より落ち、少時ありて蘇生したるを戸板にのせ來る。孝隆膝を枕にさせ、手は如何と問はるゝに、如此に候と一言いひて終れり。兄弟三人皆わが爲に死たる事報ゆるに詞なしとて、孝隆其父與二右衞門が宅に自往て弔はれ、與一之助七八歳なるを呼出さる。既に九つに成りける比、三人の兄は勇氣ゆゝしき者なりけれども、人の性質は計りがたければ試んと思ひて、磔を見つるやと問はるゝに、見ずと答ふ。今夜は月明なり。それの所の磔木の下にゆきしるしを立て歸らんやといはるゝに、承候とて自御幣を切り竹につけてあたへらるゝを、與一持行きて立てんとするに、磔木動くを見て、死にきらぬか留をさしてとらせんとて木にのぼるに、驚きて磔木より飛下り逃るを、與一さてはにくき次第なりのがすまじと追ひかくる。せん方なく宮のありし内へ入り戸をたつれば、いつまで待ちても出づるをきらん物をと呼る。さまゞにすかし、名をいへども歸らざれば、殿の仰にておどしの爲に來たり。きせさせ給ふ帷子の片袖を證據にとりて、ゆるされよといふにより歸りぬ。朝鮮にて竹も木もなき廣野に一筋の道窪くて切通しに似て、其向ふ處大山の麓にて曲尺の如し。大穴を穿ち射手を籠め置きて、行きかゝる日本人あまた射殺され、屍相重れり。山かげの敵多少をしらざれば、すゝむ者なし。井口が

従者山崎喜兵衛見て參らん。馬を控へて待たれ候へといひすて走りこむ。井口も馬より下りて走り入り、山崎先射手三人を討とり、其首を持ちて大音あげて名のりたり。井口攻入り追ちらす。井口其時は兵助といひけり。此賞美に朱柄の槍をゆるされ候へと申す。率爾にはゆるしがたし。一日に首七つとりてこそ朱柄はゆるさるゝと申傳へて候と、人々申けるゆゑ、事延びにけるが、其後井口一日に首七つ山崎も首六つとりしかば、朱柄を兵助にゆるされたり。晩年に村田出羽吉次と稱しけり。

吉田六之介首供養の事

別所家にて首供養したる人有りと孝隆聞きて、秦桐若首三十一とりたるに惜むべきは死したりき。吉田六之介正利供養すべしといはれしに、正利首數二十七とりて候とて辭したりけり。孝隆小氣なる男かな、今年三十一歳なり。此後首とるまじとや。先供養して後に其數を合せよとて米百石あたへ、供養して播州青山の南に塚を築きたり。後所々の合戰朝鮮の軍までにとりたる首五十に及べり。後壹岐といふ。

生田木屋之介武功の事

天正五年黑田孝隆播州佐用の城を攻むる時、生田木屋之介夜中に忍びて城際に近づきより、懷中の小鋸をもて屏柱の根を切り目じるしをして、翌日城攻にかの柱に鈎繩を付て引倒し、先がけして城に入りけり。木屋之介もと隅田小介といふ、日向國隅田刑部少輔が嫡子なり。十六歳の時朋輩を討て出奔し、播州に行きて孝隆の士井上九郎右衛門を頼みけるに留置き、いまだ對面せざる處に、其夜隣家に人を殺し取籠りたる者あり。夫をからめ出すに付、即時に孝隆に申して、それより奉公しけり。攝州生田の城にて高名あり。これによりて生田木屋之介と姓名をたまはる。是その高名をながく顯さん爲とかや。

備前國福岡城合戰福井小次郎歌を遺して討死の事

文明十五年十二月十三日備前福岡の戰に、

備前はもと赤松氏世々領せしに、嘉吉元年赤松滿祐滅亡の後、備前をば赤松相模守敎之に賜はり、敎之が代官小鴨大和守備前に有り。應仁の亂の後、備前津高郡金川村玉松の城主松田左近將監元成を細川勝元相かたらひしかば、元成兵をあつめ小鴨を攻めんとするにより、赤松が家人ちりぐゝになりし者共、元成にくみし、小鴨を攻めおとしぬ。赤松兵部少輔政則元成を賞して伊福の郷に置きぬ。山名宗全細川勝元共に病死の後、京都は少しづかなれども、諸國は彌大に亂れ、松田が一族ども、備前西郡の中あまた押領す。政則を將軍家より功を賞せられ、播磨備前美作を返し賜りぬ。山名右衛門督政豐これを怒り、文明十一年九月京都を出て、但馬の國に馳下る。かゝれば政則も播磨に馳せつけて、此ついでに備前の松田が恣に攻めとりたる所ををさめたゝさんとせり。元成此山を聞き、兵粮用意の爲にしたる所は返すべけれども、伊福の郷に於ては、軍功によりて賜はりたる

處なれば、返すべからず。これは事に托してわれを打亡んの謀ならんとて、金川に城を構ふ。此城は麓には大川流れ峰高く、四方嶮にて要害よき地なり。されども後巻の手だてを謀り、備後國山名俊豊に告げて、備前を切りとりまゐらすべしといひければ、俊豊是を悦べり。政則備前に赴き、松田がおして己が地にしたる所々をとり返しければ、文明十五年九月山名も備後の尼道を出て、同國國分寺に著き、三千餘をかり催し、十一月七日備前の國に打入りしかば、松田が一族相あつまり、邑久郡福岡の城の西北の山に陣とりたり。福岡の城は東西に大川流れ、中に島山あるを、城に據りて政則の守護代浦上喜三郎則國を始として、二千餘人たて籠り、川上の瀬は長船右京亮等に野伏を添へて陣どりたり。十一月二十一日おしよせて合戰あり。浦上が家人に楢村與三兵衛同又四郎とて兄弟あり。是より前に元成に奉公しける因ありしかば、密にかたらひて、十一月二十三日夜半風はげしき便に陣屋に火をかけたり。寄手内通に力を得て、やがて攻めよせたりしに、城中きびしう支へ戰ひて追返す。其後事あらはれて楢村兄弟をからめとり、これを誅しぬ。寄手其後相はかりて、十二月十三日に、又富岡といふ小山に兵を出す。城よりも打て出で、散々に相戰ふ。寄手も城兵も討たるゝ者多し。

福井小次郎はもと京都の人なりしが、四歳の比、父源左衛門當國の在番の時連下り、城中にありしが、ことし二十一歳なるが、其日の軍に父子の間を敵味方におし隔てられ、父は城中に入りたると思ひ、走り歸りて尋ぬるに見得ざれば、又城外に打出て寄手に向ひて、福井小次郎と名乗り、たてざま横ざまに切て廻りしが、あまりに戰ひ疲れしを、家人肩にかけて城中に引入りしに、淺手深手二十六所被りければ、終に死にたり。父城に歸りて小次郎が手箱を開きて見るに、あまた書置たる其中に、母の方へ幼少より別れまゐらせて、此まゝに討死せば、御なげき有らんこそ心にかゝり候へ。しばし此世に殘り給ふとも、終には逢ひ奉るべきにて候へば、思しめしわけてなぐさませ候へと、こまゞ〳〵と書きて、おくに、

生れこし親子の契りいかなれば同じ世にだに隔てはつらん

と書たりしによりて、思ひ定めたる討死なりと、人皆をしみけるとぞ。

再福岡合戰藥師寺額田片岡三士討死の事

文明十六年正月六日又福岡にて軍あり。城兵敗北する處に、藥師寺四郎左衛門薙刀をとり返し合せ、爰にて討死するよとて支戰ふ。同彌四郎等四郎左衛門を討たせじととつて返し、津阪の山の麓より、城際まで僅の兵にて多勢を防ぎて拂退きにしけり。寄手の中に福屋九郎右衛門とて剛の者、鍬形打たる冑を著、透間もなく四郎左衛門に切つてかゝりしに、四郎左衛門が家の士返し合せて、福屋は討たれぬ。されども寄手彌おひつめしかば、藥師寺次郎左衛門、額田十郎左衛門、片岡孫左衛門三人引返し、枕をならべて切死にしたりけり。是は三人必死を約束したる故とぞ。是より前三人物がたりせし

時、次郎左衛門いひけるは、此度の軍必味方打ちまくべし。松田はもとより當國の者なり。後卷を味方より申せども、播州の加勢も來らず。政則眞弓峠の軍に打まけ、姫路に引退きしと聞ゆれば、味方は力を失ひぬ。さらばとても打死すべき身にて、人の後にながらへてあらんも本意にあらず。重て軍あらば、必討死せんと語りければ、兩人聞きてわれ〳〵も同じく存ずる事ぞとよ、互に同じ處に討死せんと約束しけるが、今日次郎左衛門打出づるとて、唯今敵の手にわたるべき首なり。最後の對面すべしとて、鏡に向てにつこと笑ひて出でしとぞ。額田は岡本筑後守に向ひて、子にて候又三郎は一子なれば、とりわけて不便に存ずるなり。われと一所にあらば必死をのがるべからず、宜しく計ひたまはれといひければ、心得たりとて引きわかちしかば、けふ討死をせざりしとなり。片岡はわが家來に向ひて、わが首必敵にとらるべし。これをしるしに死骸を尋ねよとて、小よりをもて左の二の腕を二重に結ばせたりしが、果して是をしるしに死骸を求め得たりとかや。

卷之六

山崎合戰の時堀秀政寶寺の山をとる事

山崎合戰の時堀久太郎秀政の士の子何がしといへる者、明智がもとに奉公して有りしが、光秀夜のいまだ明けざる内に、寶寺の山に兵をおしあぐべしと謀りしを、父のもとに告げやりて、おもひもよらず敵味方となり、明日は一戰に及ばん事を歎きける。其書狀を則秀政に見せたりければ、秀政夜半に寶寺の山におし上り、陣し待ちかけたりけるを、いかで知るべき、夜明方に、明智が先手押寄せたる處を、秀政山上より鐵炮を打ちかけ不意に切つてかゝり、追崩して一戰に利を得たり。

森寺政右衛門武名の事

山崎の合戰に、明智が先陣と護國公の先陣と戰をいどむ。時に侍大將森寺政右衛門忠勝眞先かけて敵を追ひたつる。森寺が馬印槍木笠なりしを、明智が者共見て、けふ槍木笠の馬じるし持たせたる大剛の者下知せし有樣、目をおどろかし候。姓名を承らばやと、度々呼はりけるを、秀吉聞きて、けふの軍森寺が一人の武名をあげしとて、桐の紋付きたるはをりをあたへられけり。

則武三大夫功名の事

山崎の軍に堀尾帶刀吉晴の士則武三大夫首を取りて吉晴の前に來る。吉晴おもひしよりも出かしたり

と、詞をかけられしかば、則武怒つて首を提げてすゝみより、かゝる時は、大將も目のくらくなる物に候。則武三大夫が取つたる首よく御覽候へと罵る。吉晴もにくき奴哉といふまゝに、刀を抽いて斬られしに、胄の星を削りたり。則武眞一文字に敵の中にかけ入り又首を取りて歸る。吉晴は必則武は討死せんと悔みおもはれし處に、則武來たれば、大に悅んで、汝をさきにほめたる詞賞する餘りに、おもひしよりもといへる、剛の者にいふべき詞にあらず、わが過にてこそあれ、汝が二度の先がけ大きにすぐれしよと感せられけり。

瀧川一益厩橋を退く事

天正十年瀧川左近將監一益は信長の命により、關東の管領として諸將の質をとり、上野の厩橋にありける處に、六月七日信長弑せらるゝの變を聞き、老臣ども事をかくさんといへども、一益惡事千里といふ諺あり。祕すること能はじとて、上州嶺の城主小幡上總介信眞、鷹巢の城主鷹巢三河守信尙、金山の城主山良信濃守國繁、館林の城主長尾但馬守顯長、小股の城主澁川相模守義勝、倉賀野の城主倉賀野淡路守秀景、白倉の城主白倉左衛門佐、藤岡の城主內藤大和守秋宣、安中の城主安中越前守、高山の城主高山遠江守重光、五閑の城主五閑刑部、小泉の城主富岡六郎四郎、石倉の城主長根縫殿介、大戸の城主大戸民部直光、木部の城主木部宮內貞利、和田の城主和田右兵衛大夫信業、那波の城主那波對馬守宗元、武州忍の城主成田下總守、深谷の城主深谷左兵衛憲盛、松山の城主上田又次郎政朝等の諸將を招き、信長の變をつげ、各の人質を歸し、いそぎ上京して弔軍すべき旨をかたる。諸將大に感じ、此一大事を告げて人質を歸されんと候に、いかでか二心候べき。人質を共まゝ置きて仰に從ふべしといへば、一益諸將の義心謝するに詞も候はず。北條の表裡定めて一益を討取りて、上野をおし取るべきならん。此方より打向ひ一軍せんものをとて、城には同姓の彦次郎忠往を守りに置き、一萬計の兵を率ゐて神奈川に押出す。

一說に、北條家より人質を渡し、はやく城を出でよ、さらずば一戰すべしと云送る。一益吾信長の命を受け、關東の管領たり。今危に臨んで何ぞ北條が下知に付くべきやとて、兵を出せりともいへり。

北條氏直果して小田原より兵を出し、武州兒玉郡本庄に著きて、先陣北條安房守氏邦神奈川におし寄す。一益は川を後にして相戰ふ。大敵支へ難く討たるゝ者多し。一益厩橋に歸り、其日討死せし人々の姓名を過去帳に書きて、黃金を添へ寺に送りて供養し、諸將をあつめ暇乞とて酒宴し、一益鼓をうち、兵の交り賴ある中のとうたひければ、倉賀野淡路守、名殘今はと鳴くとりと囃し、終夜酌醉ひて太刀刀取出し、上州の諸將に引出物にし、懇に暇を乞ひて、六月二十日厩橋を打出で、各人質を歸しけれ共、皆請取らずして驛馬等の事沙汰し、是を送りて笛吹嶺に至る時、國人の人質悉く歸し、木曾路より歸京す。瀧川彦次郎は一益が長男三九郎二男八丸を伴ひ木曾路にかゝる時、一揆起り八丸

を奪ひとられしを、一益が士古市九兵衛一揆を追拂ひ、八丸を奪ひとりて、一益と同じく長島に歸る。

一說、神奈川の合戰に八丸生捕られしを、古市追討ちて其敵を切りふせ、八丸を奪取つて連歸るといへり。また笹岡平右衛門津田治右衛門ふみ留りて討死しける、其間に一益兵を納めて厩橋に歸るといへり。笹岡平右衛門は、一益の馬とりより取りたてられ、氏は笹岡彦次郎是をあたふ。武功度度に及びて、士大將となり、武者奉行たり。又酒宴は倉賀野にての事ともいへり。

關東にて、一益厩橋を引きはらひたるふるまひ、殊に賞美しけるとぞ。

光秀愛宕山にて連歌の事

天正十年五月廿八日、光秀愛宕山の西坊にて百韻の連歌しける。

光秀　西坊　紹巴

ときは今あめが下しる五月かな

水上まさる庭のなつ山

花おつる流れの末をせきとめて

明智本姓土岐氏なれば、時と土岐とよみを通はして、天下を取るの意を含めり。秀吉既に光秀を討つて後、連歌を聞き大に怒りて、紹巴を呼び天が下しるといふ時は、天下を奪ふの心あらはれたり、汝しらざるやと責めらるゝ。紹巴、その發句は天がしたなると候と申す。しからば懐紙を見よとて、愛宕山より取來て見るに、天が下しると出たり。紹巴涙を流して、是を見給へ、懐紙を削りて天が下しると書換へたる迹分明なりと申す。みなげにも書換へぬとて、秀吉罪をゆるされけり。江村鶴松筆把りにて、あめが下しると書きたれども、光秀討たれて後、紹巴密に西坊に心を合せて、削りて又始の如くあめが下しると書きたりけり。

幸田彦右衛門が母義死の事

織田信孝秀吉と弓箭をとる時、信孝の乳の人を人質に秀吉のもとに出し置かれしを、磔にして誅せらる。かの乳の人の子は、幸田彦右衛門とて信孝の士大將なり。是より前秀吉信孝の長臣等をかたらはるゝに、岡本下野守は同心して信孝に背きけれども、幸田は背かず。幸田が母誅せらるゝに及びて子の彦右衛門に書を送りて、我今空しく成ること、ゆめ〳〵歎くべからず。親は必子に先だつ習ひなり。唯忠義を守りて、君にな背き參らせそと言遺はしければ、聞く人感じあへり。天正十一年四月十八日、秀吉の先陣信孝の地に責入る時、幸田兄弟いさぎよく討死したりけり。幸田が母は實に漢の王陵が母の志とも云ひつべし。但し王陵が母は天下をしろしめすべき高祖の事を識りたれども、只今危難に迫れる織田家に忠を盡せといへる、眞にありがたきことなるべし。

志津が嶽合戰秀吉智謀の事

佐久間玄蕃盛政柳瀨にて中川清秀を討取りける時、秀吉長濱より一騎がけにて來たられけり。志津が

嶽に到れば日暮れぬ。陣の相去る事二里計なり。盛政使を以て早くも軍を寄せられ候。相待ちて候程に夜明けば、矢合仕るべしとぞ言送りける。秀吉聞きて、是より申さんに、ゆゝしくも承り候。明日いさぎよく軍をとげ候べしとて、使を返して後、吾に怠らせ夜討せんとの事ならん。遠き異國の張良はしらず、我を謀るべき者、日本に有りとは覺えずとて、野にも山にもかゞりを透間なく焚きて、白日の如し。佐久間は敵人馬の行程を急ぎて疲れたる處へするりと押寄せ、打破らんとおもひけるに、秀吉の謀に、夜討の支度空しく成りにけり。

堀七郎兵衞見切の事

志津が嶽の合戰に、堀久太郎秀政兵を分ち出さんとする時、其臣堀七郎兵衞押留めて曰く、勝家の陣より、佐久間が陣に頻に使來ると見ゆ。疾引きとれとの事ならん。若し引取らば玄蕃本の道をば歸るべからず。しからば間近き所にて戰ひ有るべし。玄蕃引取らずば、勝家必來りて軍あるべし。此二つを出づべからず。兵を分たずして待つべしといふに、玄蕃も退かず、柴田も進まざりしかば、勝家運盡きたりと云ひしが、果して敗北しけり。又志津が嶽の事を老功の人に問ひしに、勝家の詞のごとく玄蕃引取らば勝利を全うすべし。玄蕃が言の如く、勝家押詰め來らば、必敗軍すまじきなり。兩將互に猶豫して、勝を失ひたりとぞかたりける。

志津が嶽七本槍の事

志津が嶽にて佐久間が人數亂るべきを、秀吉見て近習の人々に向つて、爰ぞ槍を合せよと詞を懸けられれば各競ひ進む。福島市松、加藤虎之介、加藤孫六郎、片桐助作、平野權平、脇坂甚内、糟谷助右衞門七人なり。其夜秀吉今日の七本槍の者とて呼ばれけれども、誰といふ事を知らず。其時指を折りてかぞへられしかば、前に進み寄りたり。是より志津が嶽の七本槍と世に唱へけり。中にも福島壹番に進んで槍を合せたる上、首を取りたりしかば、五千石あたへられけり。其餘は皆三千石與へられぬ。福島は紙の切裂じなへの指物、加藤嘉明は紫ほろ、清正は紙のしで馬れん、片桐は銀の切裂えづる、平野は紙子の羽織、糟谷は金の角取紙のえづるの指物さゝれたりとぞ。

石川兵助戰死の事

志津が嶽の前夜、石川兵助と福島市松と口論し、既に刺違ふべき體なりしを、座に有りし面々明日の軍に身を捨てゝ高名を遂げらるべきに、こはいかなる事ぞと押留めければ、石川面々の前にて、口も得明かざる市松、何とてこはき槍先に向ふべき、明日わが後影を見よかしと言捨てゝ出でけるが、直に柳瀨に赴きて、只一人眞先にすゝみて討死しけり。人々其勇氣はいかめしけれども、其怒りは戒とすべしといひあへり。秀吉石川が弟長松に感狀を與へられけり。其文に曰く、

今度三七殿依二違武一軍二美濃大垣一之處柴田修理亮勝家出二張柳瀨一欲レ遂二一戰一之時兄兵助先赴合レ槍令二斃死一拔群之撥勳發於二眼前一見レ之爾雖レ爲二若輩一念二兵助之壯志一與二秩千石一向後愈可レ抽二忠

節一者也。

天正十一年七月五日　　秀吉

石川長松殿

とかゝれたり。

佐久間盛政生捕らるゝ事附久右衛門安次源六郎實政が事

志津が嶽の軍破れて佐久間を生捕り來る。秀吉見て、汝は武勇逞しき者なり。助けて國を與ふべし。二心なからんやと問ふに、盛政冷笑ひ、我に國を與へなば、汝を生捕り搦めん事、今日我身の上の如くせん。新に恩を受くるとも、柴田を忘れんやといふ。死すべきに及びて、大紋紅裡廣袖の小袖白帷子に空だきして呉れられよ。一生の終りに風流を盡したし。是一つの望なりと云ひしかば、秀吉其望にまかせられしかば、大に悅んで是を著たりけり。玄蕃其時二十七歳、みな人をしみあへり。

柴田亡びて後、其從士佐久間久右衛門安次源六郎實政兄弟紀州に遁れ、粉川法師三池を語らひ、河内霧坂に城を構へ、後亦南河内天野山の國見を要害にして度々軍しけるが、遂に秀吉に攻落さる。後に小田原に入り、北條亡びて、兄弟金澤の稱名寺にありと、秀吉傳へ聞き、伯父勝家の爲に吾を仇とする志、誠に大丈夫といふべし。今日本平均しぬれば、心を改めよとて、安次に一萬五千石實政に一萬石與へて、蒲生氏郷に附せらる。兄弟氏郷に一禮しける時、躍きけるを、人皆笑ひしかば、氏郷物の思慮なく、汝等が奉公ぶりを、彼に競ぶる事よ、兄弟とも壘障の士にあらざる物をと言はれけり。

尼子家の十勇士

尼子家十勇士と世に唱へけるは、山中鹿之介、薮原狡之介、五月早苗之介、上田稻葉之介、尤道理之介、早川鮎之介、川岸柳之介、井筒女之介、阿波鳴戸之介、破骨障子之介なり。

信雄長臣を誅せられし事

秀吉信雄を打亡さんと謀りて、先信雄の長臣岡田長門守、津川玄蕃、淺井田宮丸、瀧川三郎兵衛をまねき、懇にもてなして後、信雄に自害をすゝめよ、さらば恩賞あつく行ふべしと語られけり。聞入れずば首を刎ねん氣色なる上、神文を書けよと責めらるる。四人力なく承りぬと言ひて、起請文を書きにけり。秀吉も約を背かじと神文を出だされけり。これは一人づつかたらふべきを、一同に招きたるは、信雄に告知らする者有りて、殘る者を誅せさせんとの謀なり。又みな秀吉に實に心服せずとも、既に神文を書たれば、疑ひて一和すべからずと思慮せられたるなるべし。瀧川素僧なりしを、信長呼出し、四萬石の地を賜りし身なれば、長島に歸られ、信雄に斯くと告げ申せば、頓て三人を誅せんとて、長門は飯田半兵衛、玄蕃は土方勘兵衛、田宮丸は森源三郎と計手を定められけり。土方承りて、長門をば臣に仰付けられ候へ打留め申さんといふ。飯田既に定りたる上は何の申條のあるべき

ぞといへば、信雄さらば長門をば土方討ち候へ。飯田は既に下知したれば、討ちたるに同じとて、長門を土方に讓りけり。土方が斯く言ひけるに故あり。土方は始彦三郎と云ひけるが、太く逞しく、胸より手足に至る迄、毛生ひ熊の如くにて勇猛の士也。長門常に土方に語りて、殿は人の申す事輕々しく信ぜられて、日比我を疎まるゝよと度々云ひけるを、土方夫れはたはぶれか又は汝の心の逸ひたるならんといへば、長門いや〳〵此長門をば、必誅せらるべし。其時汝討手なるべきよ。たやすく討たるべき身にあらずといへば、土方聞きて、討手の仰を奉らんに、此勘兵衛ならで又誰かあるべきと語りたるに、長門仰に寄りて、此七つ胴切落したる脇指にて、汝が頭を斬破らんと云ひける詞に依りて、斯は申せしなり。天正十二年三月三日の禮に、岡田信雄の前に出でけるを、相圖とせられけり。岡田其日は脇差を横たへて進み出る。信雄新に造らせたる鐵砲を見よとて指出し、此臺尻の穴は何の爲ぞと問はるゝに、岡田少し差うつむく時、土方つと寄り引組んだり。岡田己をやといふまゝに、脇差を七八寸抽きけれども、大力に強く抱かれて抽きも放たずねぢ合ひける處を、信雄土方放せ我自ら切らんと詞を懸けられしに、臣と共に斬らせ給へとてはなさず。信雄放ざればいつまでも斬るまじといはれしかば、土方岡田を突きはなしざまに、小脇差を抽て指通せば、信雄すかさず切つて殺されたり。津川は此騒ぎを聞きて走り來りけるが、信雄に行逢ひ、刀を取延べて切りたりしに、廊下の長押に切り付けたるを、飯田傍より刺殺しけり。淺井をば森討留めたり。是よりして秀吉と弓箭をとられけり。

平松金次郎始末の事

平松金次郎重之甲州の溫井と同じく天龍川を渡る。平松先達て陸に上り、船に殘れる從者溫井に無禮の事ありて、忽ち切殺しけり。扨平松に斯といふ間もなくてと言ひければ、無禮する者は吾も捨置かじとて色も變せず。人皆平松を誹りける處に、幾程なく長久手の軍に、平松と鳥井金次郎と先を爭うて槍を合す。平松が相手は森武藏守長可の士山田八右衞門とて、始め播州三木の城主別所長治に仕へて名高き勇士なり。平松肥え太りて小男なりしかば、東照宮さぞ走廻り不自由ならんとて常に笑はせ給ひしに、其日御前に進み出、不行步者今日槍を合せて候と、立ながら申して傍若無人の有樣なり。賞せられしかども猶不足におもひけるに、前田利家の士山田出羽其時平一郎とて秀次に仕へしが、秀次に申して一萬石の祿にてまねかれけり。平松是に約し京に赴く時、心易き朋友に暇乞して立ち去りけるを聞し召し、追々討手を出させ給ふ。大剛の平松なればとて、第一番に渡邊半藏、續いて河村善七郎、大久保與一郎、坂部治兵衞段々に追かけける。坂部袋井にて逢ふ。平松は久能へ行く。本坂越に遠州可睡齋に曹洞宗の禪寺立寄ると物語す。坂部は兄三十郎に用の事有て横須賀へ行くとて打連れたり。道の別際にて久しく逢はじと馬より下り暇乞する時、坂部平松を一太刀斬りたるに、いかゞしたりけん切外しければ、平松坂部が眉間を切る。坂部眩みけれ共、さしもの者にて、落人あり打留めよと呼はるを

聞き、近所の郷民群り出るにより、平松可睡齋へ入りたるを取圍み、横須賀よりも馳集り寺を取卷きけれ共、平松は爰に居らずといふを、小僧を捕へて責問ふにより、平松何方へも逃ぐる者にあらず、爰にて腹切んとて立出で坂部三十郎に向ひ、治兵衛は殊に親しく語りけれども、不便ながら身にかゝる火を拂ひて是非なく切りたりといふ。三十郎聞きて治兵衛疵淺しと答ふ。平松吾斬る程にて助るべきや、日比の交故とゞめは刺さざりきというて腹切る時、三十郎介錯せんとすれば、平松治兵衛を吾手にかけ、今汝に首を討たれんは心よからずとて同心せざりしとなり。

又一説に、平松は度々口論の時後れあり。殊に遠州新井の渡り舟にて、柏原新五郎平松が從者を討ちたるに、おめ〳〵として有りければ人々嘲笑ふ。東照宮聞召し、人は何共いへ平松が眼ざし剛の者なりと仰せられしが、果して長久手にて懸り兼たる處に、平松茜の羽織を著十文字の槍を提げ進み出で、池田家の軍兵の眞中に槍を入れたりける。其後出仕の中にて諸士に打向ひ、吾胎内より厚恩を請けみだりに一命を捨てじと思ひしが、今は早思ひ殘す事なし、誰にても出られよ、撫切にすべし。昔の金次郎とな思はれそ。殊の外あら者に成りたりと大言しけるに、一人も答ふる者なし。平松が勇名高く聞えて、先年天王寺勝曼の槍貝殼塚の槍、備前八濱の槍をこそ言傳へたれ、平松が槍は近き頃稀なりと世の人賞しけり。秀次一萬石にて招かれしかば、平松立退きけるを聞し召し、小栗又市、渡邊半藏、河村善七郎、坂部治兵衛を追手に出させ給ひ、岡崎へ早飛脚にて本多作左衛門にも御下知有り。平松終に袋井の北なる可睡齋にて自害すともいへり。

水野勝成高名并行狀の事

長久手の軍に、水野忠重の嫡子勝成は、目を病みて冑を著ず、鉢卷したりけるを、父見て、汝が冑はゆばり壺にしたるかと罵られしかば、父ながら餘りの詞かな、眞先かけて首を取るか、吾首を敵にとらるゝか、二つの中よといふまゝに、馬引寄せて打乘り、もろ鐙をあてゝかけ出す。忠重あれはいかにとて、太田重助といふ士をして呼歸されけれども耳にも聞入れず。又水野喜右衛門はせ來り引留めんとするを、勝成はたと睨んで、疊の上の諫は聞きも入るべし。只今大軍の中にかけ入り功名せん時、止まれとて引返す樣や有るといひすてゝ、秀次の將白井備後守が陣に突いてかゝり、冑首をとりてはせ歸る。此日の一番首なり。勝成あら者にて人を物ともせず、忠重の心に忤ひ、虛無僧となりて國々をめぐりて武者修行す。後に忠重死して、東照宮勝成に三州刈屋を賜はり、日向守と稱して大阪の時大和口の先陣として大功有りし人なり。勝成十萬石を賜ひて後、愈士に下り身をいやしくして、すべて士に貴賤はなきものなり。主君となり從者となり、互に賴みあひてこそ、世はたつ習ひなれ。されば、大事の時は身をすてゝ忠義をなす事ぞかし。汝等我をば親と思はれよ、我汝たちを子と思はんと、常に士にいはれけり。年老いて鷹野に出づる時、行步かなはず、蒲團にのりて士にかゝれ、士番所にてはふとん共に下に居て、年寄ての鷹狩をかしかるべし。鳥とらん爲にあらず、心ありての事なりと度

度いひて打過ぎられけり。或時鷹狩の野にて、昔勝成に仕へし士を見かけ、いかになつかしや、我方にて祿三百石なりしに、立去りて越前にて千石の祿と聞く。今爰に來られしはいかにと問ふに、彼士仰の通、祿は越前にて增し候へども、殿の下をいたはり、懇にもてなし給ふなじみ、祿には換へがたく暇乞うて歸り候ひぬと申せば、勝成大に悅び、折にふれ思ひ出せしなりとて、卽日に祿を增與へられけり。その後勝成隱居して又鷹狩の時、彼士の家の門閉ぢたるを見て、いかにと問はるゝに、美作守の心に背く事有つて、暇を乞走りぬと答へしかば、彼者は越前の祿千石を捨てゝ、小祿の我家を慕ひて歸りし者なるに、いかに作州は思へるにや。かくいふ勝成は若き時心得過ちて武藏の金川根笹流の弟子となり、尺八一本携へて虛無僧となりて、日本國をめぐり、或時は堂塔に夜を明し、或時は野にも山にも日を暮し、樣々に難難にあひ人にも誹られしが、一言虛妄をいふ事なく、不仁のふるまひせざりし故にや、今福山十萬石を賜りぬ。然れども、下の情をしる事はこれ虛無僧たりし故なり。返すゞも惜むべき士を失ひぬるよ。美作は下の事はしられぬぞかし。すべてよき士は、主君又は頭の下知をも無理なる事は心服せず。たとひ少しの過ありとも、能士は二度も三度も知らぬ體して、猶已みがたくば傍輩に諫めさせんものを、美作の政事なげかしきぞとて、泣かれけるとかや。

本多忠勝忠勇の事并忠信の冑の事

東照宮小牧山に陣しておはしませしが、秀吉兵を分ち中入すと聞し召し、敵の迹に從うて向はせ給ふ。小牧には石川伯耆守數正、酒井左衞門尉忠次、本多平八郎忠勝を殘させ給へり。然るに秀吉大軍を出して、長久手に向はれけるを見て、忠次は秀吉の本陣樂田へ押寄せ、火をかけて攻め擊つべしと云ひけれども、石川秀吉後に變有りと聞きて、彌怒られなんと强ひて押へて止りけり。忠勝は秀吉の馬じるしを見るより、僅に五百計引具し、小牧にかけ出で、小川一筋隔てゝ秀吉に相ならび、長久手さして馳向ふ。路にて足輕を進め、鐵砲を打かけ、一軍せんとすれども、秀吉見ざる體にて取合はず。龍泉寺の前にて、忠勝馬を川に打入れ口を洗ふ。秀吉、あの鹿の角の立物の冑を著たるは大將よ。誰か見知りたると問はるゝに、稻葉伊豫守道朝、過し年姉川の軍に武者出立見知りて候。本多平八郎にて候と申もあへぬに、秀吉涙をはら〳〵と流し、五百に足らぬ士卒をもて、吾八萬の軍にかけ合はさんとする、千死に一生もなきぞかし。然るに道を隙どらせ、己が主君の軍に勝利あらせんとの志、勇と云ひ忠と云ひ、誠に類なき本多かな。秀吉運强くば軍にかたん。あたら者を討つべからずとて、弓鐵砲を制せられけり。斯て忠勝長久手に馳付きたれば、軍終りて敵味方ともに見えず。こはいかにといふ所に、味方打勝小畑に入らせ給へりと聞き、もみにもんで追付き奉り、御馬の傍に乘り寄せ、云ひがひなくも小牧に捨てさせ給ひ、かゝる軍に合ひ不申と申しければ、聞し召し、取敢へず汝が躬は我身なると思ひて小牧にとゞめ、後に危き事なくてこそ、軍には勝ちたれと仰ありけり。其後天正十八年秀吉北條を打亡し、七月二十六日野州宇津宮にて、平八を呼ばれけり。忠勝は下總の廳南に有りけるが、急

ぎ參る。秀吉諸大將並居たる中に呼出し、熊野より佐藤四郎忠信が冑を得させたるものあり。四郎が忠義後世まで語傳ふ。四郎に劣らぬ人に著せなんとおもふに、誰か有るといはれしに、答ふる人なし。其時秀吉四郎にまされる者は平八なり、仔細はしかゞ〳〵なりと、長久手の軍物がたり、忠勝の有樣詳に言はれて、卽冑を忠勝に賜りければ、忠勝面目身に餘る心地して出でられけるに、其晩又忠勝を招き、傍の人を遠ざけ、自茶を興へ、けふいくらも諸大將並居たる中にて、汝が武勇を褒擧げたるは、秀吉が恩ならずや。主君の恩といづれぞと問はるゝに、首を低れて物言はず。頻にとはれければ、忠勝承り誠に忝しとは申せども、累世の主君の恩とならぶべきにあらずと申されしかば、秀吉愈感ぜられけり。

一說に、忠信の冑を賜はりけれども、悅ぶ色なし。いかにといへば、いやとよ、忠信武勇さのみ羨しくもなし。主君と仰ぎし九郎判官も吾爵位も同じ、唯世々家に傳へたる鹿の角の冑こそよけれと言はれしとぞ。後忠信の冑は二男忠朝に讓り、鹿の角の冑は嫡子忠政に讓られたりき。忠朝もおもふ所やありけん、冑にしころも付けずして置かれしとぞ。

榊原康政秀吉を誹りて札を立てられし事

小牧陣の時、榊原康政秀吉の事を誹りて札に書き、織田家に向ひて弓を引く事、不義惡逆の至なりと書きて、所々に立てたるを、秀吉齒嚙して怒り、康政が首をとらん者には、十萬石の地を與へんとぞ觸れられける。其の後東照宮と和平して、婚姻の約ありける。始の使に康政を賜はるべしと秀吉申されて京に上りしに、秀吉對面し、小牧にて札を立てたる時、汝が惡き首を一目見ん事をのみ思ひしに、今斯和睦に及べば、其志を悅び思ふなり。此事を直に言はんが爲に迎へたり。小平太と呼ばんは如何なり。敍爵然るべしとて、式部大輔とは此時よりぞ申しける。儲饗禮有りて厚く馳走ありけるとぞ。

初鹿傳右衞門が事

勝賴亡びて後、武田家の士多く東照宮に仕へ奉る。前に領したる祿地を書きて奉れと仰出されけるに、初鹿傳右衞門は加藤駿河守が二男にて、兄の源五郎は川中島にて討死しけり。傳右衞門其祿を受繼ぎたりし故、祿地を書きて出しけるが、駿河守が二百五十貫の地をも合せて書記せり。駿河守が嫡子丹波三男を彌平次と云ふ。兄弟共に傳右衞門は源五郎が祿をこそ申すべけれ、駿河守が祿を合する事の有るべきやと言事聞えて、本領四百貫のみ下し賜りぬ。傳右衞門人は皆親兄弟の祿地を記し出して、其儘賜りたるに、吾ひとり不然とて、御朱印に墨を塗り、諂はざるゆゑに、かゝる有樣なりといふを、岩間大藏左衞門訴へ申して、無禮なりと仰せ有りて祿を召放さる。翌年長久手にて傳右衞門密に御旗本に來り、眞先かけ三宅彌次兵衞と爭ひて首を取る。傳右衞門は內藤四郎左衞門が傍に參りて申し給はらんやと云ふを、其間十間計にて御覽ぜられ、傳右衞門連來れと仰せられしかば御前に跪く。いかに汝が無禮なれども、けふ軍の先がけしたればゆるすぞと御詞に、傳右衞門涙を流しける時、三宅先

に臣を一番高名と御詞をかけさせ給へど、傳右衛門は猶すゝみて、首を取り候と申しければ、三宅が實なる志を感じさせ給ひけり。

秀吉東照宮の御陣へ戰書を贈られし事

東照宮の小牧の陣を、秀吉二重湟の城の櫓に上り見やりて、高山右近大夫幸任を呼んで小牧に書翰を送り、一戰せんと思ふなり。十三萬の軍兵陣を整へて押出し、後に柵の木結ひて引退かざる手立てせんはいかにと云はれしかば、高山是は思召し止らせ給へ。小牧よりの返書必怒らせ給はん事を申來るべしといへども、秀吉増田長盛に書翰を書かせ、長岡忠興に敵陣の木戸なる道に立てよと下知せらる。高山色を變じ、仰なりとも行くなとぞ制しける。秀吉、忠興は弓箭のはげしき所へは思ひもよらじ、剛の者を使にせんと言はれしかば、忠興高山を睨みてつと立て馬に乘り、竹に書翰を挾み乘行きて村だつたる松原の小塚の上に押立てゝ歸るを見て、秀吉悦ばる。やゝ有つて小牧の陣より月毛の馬に乘り紅の母衣掛けたる武者書翰を取りて歸る。しばらく有りて、金の枇杷へらの指物さし、鹿毛なる馬に乘りたる武者、書翰を竹にはさみ元の所に立てけり。あれ取來れと言はれしかば、忠興又馬に乘り馳行きて取歸るを、秀吉披きて讀まるゝに、東照宮の返書にはなく、渡邊半藏重綱水野太郎作正重が書簡にて、其詞に、後に柵結ひて一足も引くまじきと思ひ定めて軍あらん事、兎も角もの事に候。三河者下部に至るまで、一足も逃ぐると申す事露計も不存候とぞ書きたりけり。秀吉讀みも終らず怒られければ、高山、されば斯候はんとて申したる事よと居たけ高に成りて申す。秀吉冷笑ひ馬牽出させ、ひたと乘り、僅四五騎計にて松原の小塚に上り、臀を打たゝき、敵の大將是喰へと大音に呼はるを、小牧より唐冠の冑に孔雀の尾の羽織著たるは秀吉よ、あますなとて、鐵砲を打ちかくる。秀吉、天下の大將軍には矢の中る物かはと言ひて、しづ〳〵と歸られけり。

東照宮蟹江御出陣の事

尾州蟹江に瀧川一益中入すと告來る時、祐筆尊通といふ者、御出馬可被成者也と書きけるを、東照宮此可の字を削れ、今日に於ては一字も大切なり。大敵を前に置き可二出馬一とはおくれたり。出馬するとは、其時をぬかさぬなりと仰せられけり。

東照宮の御軍略に依つて蟹江城降參の事

東照宮長久手の軍に勝たせ給ひ、勢州蟹江の城前田與十郎を御攻めあらんとて打向はせ給ふ所に、加勢多く馳入りけるを御覽じて、敵いかほども城中へ入れよと仰せられしを、酒井左衛門尉忠次承りて、何とて押留給はぬぞやと申す。東照宮いかゞ思ふぞと御尋ありしかば、忠次城は堅固なり、多勢こもりなば爭か攻落すべき。いかなる御心か候と申すを聞召し、大將謀を言ふやうや有ると仰せられけるが、其後援兵の乘來りける船を追拂はせ、粮道を絶たせ給へば、粮忽乏しく成りて、城を渡し降參しけり。東照宮四十二歳の御時なりとかや。

九鬼嘉隆蟹江の港出船の事

蟹江にて井伊直政兵をすゝむ。秀吉の舟手大將九鬼大隅守嘉隆、日本丸といふ大船に乘り、蟹江の港に漕入れて打上り、堤を隔て戰はんとせしが、引退きて船に乘るところに、入江の港に、東照宮の兵船角新造といへるを横樣にして、左右に亂杭をうち、眞中に取圍まんとす。直政は追かくる。九鬼が者共多く討たれ、水主楫取驚騷ぎて船を出し得ず。かゝる處に、九鬼が士村田七兵衛鐵砲に藥を込め、問宮造酒允が舳先にて下知しけるに、大音上げて靜に相だめにするを、兩軍なりを靜めて見物す。其中に九鬼が者共ひた〳〵と船に乘組みたるは、村田が躬を捨てゝしづめん爲の謀ゆゑなり。斯て村田おもふ矢坪に中りて、問宮倒れしかば、九鬼が者共力を得、鐵砲を打ちかけ、船を乘浮めて港を出でにけり。

中村一氏紀州の一揆を追拂はれし事

秀吉小牧に陣を出す時、紀州の根來雜賀の一揆を押へんため、中村式部少輔一氏を岸和田の城に置かれけり。紀州の一揆、秀吉大阪を打立つと聞きて、二萬三千計二手に分れ、一手は東の山際より堺に向ひ、一手は岸和田に押寄する。はやり雄の若者ども、二騎三騎城を出て寄手に向ひしかば、士大將早川助右衛門、川毛惣左衛門引歸れと使をやるを、一氏聞きて、かゝる時進んで行き重りたる武者を引かんとすれば、敗北するものよ。いざ打出でんとて、鐵蓋が峯と名付けし冑の緒を締め城を乘出す。

先に進んだる者共、菅笠の馬印をふりかへり見て、すはや殿こそ出給へ、軍は勝ちたるよと言程こそあれ、一萬餘の紀州勢に面もふらず切掛り打破りて、七筋に分れて逃るを追ふ。一氏は三百計にて堂の池といふ所に控へて、先陣の歸るを待つ處に、堺海道に馬煙くらう見ゆ。是は堺に向ひたる敵の返し來れるなり。荒手の大軍にかけ合ひて戰はん事思ひもよらず、疾城に楯籠らんと口々にいへば、一氏いや〳〵退くならば、味方氣挫けて打負けなん、一寸も退く時は、先陣を捨殺し城をも攻落さるべし。一揆は何百萬もあれ、先陣をだに切崩すならば、二陣は忽敗北すべし。我に任せよとて、敵の一同にかゝりがたき地の理を料り、堂の池を前にして大敵を待たれけり。一氏、馬をば悉く城へ返し候へ、馬を引付け置く時は、引退きたき心の起るぞとて將儿に腰かけ、旗本三百計の勢槍を膝の上に置きて折敷きたり。新藤勘左衛門強弓矢纖早の手利なるが散々に射る。射しらまされて手負死人倒れ重りてためらふ時、一氏弓の者の羽壺を勘左衛門に渡せと下知せられしかば、愈指詰引詰射ける矢に、あだ矢なかりけり。一氏麾を取りかゝれというて立上る。黑田如水は大阪にありしが、岸和田に敵押寄すると聞き、子の長政十四歲になりしが、岸和田にあれば、いざすくはんとて、七百計にて敵の後にかけ來るを一氏見て、愈すゝみをめきさけんで切つてかゝり、追立て八百餘の首を取りたり。如水は、長政いかにとおもふ處に、黃羅紗の羽織著て鹿毛なる馬にのり、今朝討取りし首を鞍の四方手に付けて馳巡るを見て、悅ばるゝ事大方ならず。秀吉一氏に感狀賜ひてけり。一氏は豐臣家諸將の中にも勝れし勇

將なれば、加藤嘉明もうらやみ慕ひて、吾子の明成を式部少輔になしけるとぞ。

竹中重治の事

竹中半兵衛重治は、美濃の菩提の城主なり。後に秀吉の軍奉行たり。謀略有る人なれども、打見たる處は婦人のごとし。軍に臨む時も猛威なる事なし。馬の皮にて包める甲を著、木綿の羽織一の谷と名付けたる冑の緒をしめ、靜り返りて居けり。重治向ふ度毎に、士卒戰はずして既に勝ちたりと勇みあへり。重治或時軍物語せしに、子の左京いまだ幼かりしが、座を立ちければ、重治軍は國の大事なり、何方に行くと問ふ。厠にゆくと答ふ。重治玆に溺をたるゝとも、軍物語の大事の席を立つ事やあるといかられけり。

戰國の士功を讓る事

稻葉治左衛門は美濃齋藤家の士、戰場にて必眞先に獨進み出で、芒の如くなる所に居ける故、世の人是を芒の治左衛門と言ひけり。澤喜藏は美濃飛騨に隱れなく、若き頃より功名有り。芋がら畠の槍澤一番なりと言ふを、吾にはあらず稻葉なりと云ひて、互に讓りて決せず。澤は吾早く進みたれども、稻葉がほろの手をしむる際に、先に乘込んだり。實は一番稻葉なりといふ。人皆是を賞しけり。有吉武藏が足輕鐵砲に槍を持添へて、鐵砲を搏ち、其上に一番槍を合せたるが、吾一番にあらず、園部儀大夫がほろの手をしむるを見て駈出でぬ。園部が一番なりと讓りしと同事にて、戰國にかゝる士はまれなる事にこそ。

羽柴勝雅敵を免す事

羽柴下總守勝雅の許に二藏三藏とて物し有り。いづれの城にての事にや有りし。下總守城より出て働き引取りたるを、敵付來る。二藏三藏門を固めて、揚簀戸を下して敵をたてこめたり。勝雅下知して門を明けて、敵二人を出して討取らず。近藤石見守加勢たりしが、其仔細を問ふ。たてこめられたるは死地に入りたる敵なり。是を討たば城兵餘多死傷すべし。打ちとめたればとて、軍の勝敗にあづからずと答ふ。石見守武功の人なりし故、大に感じたり。

卷之七

前田利家末森城後卷合戦の事

瀧川一益佐々成政等信孝を推崇みて、秀吉と弓箭を取りしに、天正十二年九月成政八千の兵を率ゐて、加州金澤の城主前田利家の士大將奥村助右衛門永福後に伊豫が守る所の能登の末森の城を圍む。成政旗本を以て後卷を押へ嚴しく攻むる。此城だに打破らば、能登は一日に討從ふべし。後卷なき中に乘取れと下知しけり。奥村僅に三百計の士卒にて玆を詮度と防ぎけるに、餘りに強く攻められて、今は是までなり。自害せんと云ひけるに、助右衛門が妻小袖をかい取り、鉢卷をし刀を横たへ、女房に粥を手桶に入れさせ、塀裡の人々に自ら飲せ、昔楠とやらん云ひし大將の、日本國を敵にして城に籠りたりしと聞く。明日は金澤より後詰の候べきに、只一夜防ぎ給へと云ひて打廻るを、奥村見て、けふの振舞男子に優れり。此城を女の力にて持得んは口惜しと自負の色あり。此城たやすく落つべからざるを見て、火攻にせんと云ふ者あり。成政、いや〳〵大手の城門を取つて、富山の城門とすべし。又石動山の衆徒も吾に心を合す。火攻にはすべからずと下知して、既に二三の丸を攻取りて夜の明くるを待居たり。末森より金澤へ行程九里計、其日酉の刻に斯と告げて、夜の明くる迄は堅く守るべしと申送る。利家聞きもあへず、金澤の城の廣間へ出で、利長を呼んで、汝は城の留守せよと下知せらる。利長、いや〳〵

眞先かけて佐々を打破るべし。殘止まらん事思ひもよらずと申されければ、利家さらば父子打向ひ、敵の不意を討つに利あらん。軍兵を整ふるに及ぶべからず。馬に鞍だに置くならば、一騎駈に打出でよ、一足も疾く出づるを今宵の功とすべしとて、富田與五郎後越後守に汝津幡に行きて不破彦三に末森の後卷の先手せよといへと下知せらる。富田己が宿所に馳歸り、馬引出し打乘り、諸鐙を合せて駈行きけり。利家士卒みな汁をかけて飯をくへとて物具せらる。庭には黑の馬を引立てたり。利家の北の方後芳春院三方にのしを入れ、父子に參らせられ、扨人々聞き給へ、我は利長の母なり。今日の後卷は誠に大事の軍なるべし。各〻心を合せ功名し給へ。末森を敵に取られなば、各〻達も討死し給へ。我も人手にかゝり候ふまじとて、利家の側近く進みより、末森を敵攻落しなば、討死せさせ給へ。利長も母が此詞を能聞かれよ、生死の別れなりといはれしかば、利家あら心よや、成政を打破らん事必定なりといひもあへず、物具の上帶を締め結べる端を切つて捨て馬に打乘る。父子の兵五百計に過ぎざりけり。利家馬上にて味方の小勢は吉事なり。佐々が思ひもよらざる所に切つてかゝり打勝つべし。奥村討たせなば生きがひなしと言ひつゝ、津幡の町を北へ打過ぎられたる時、富田乘來る。津幡は金澤より四里餘りの行程なり。利家、汝いづくに寐て有りけるぞと罵らるゝを、富田聞きて、津幡に馳付き不破が門を叩き申渡し、不破物具著て候を見て打出で候へば、はや門外に旗を指出し候ひぬ。何國にか寐申すべきといふ。利家尙聞入れざりしかば、富田怒つて其日の一番槍を合せけり。是利家士を激するの術な

るべし。利家の士卒追々馳せ付きければ三千餘りに成りけるを、二陣に分け、一陣は敵の後に打ち掛り、一陣は敵の旗本に突いてかゝる。成政軍兵疲れし上、思ひ寄らざる所に、奥村も門を開きて打つて出でしかば、成政大に敗北せり。是天正十二年九月十一日の軍なり。後に聞くに、成政山の尾崎を越え敗軍を集め陣を立直し、見よ〳〵今前田といふ男が、勝に乘り陣を亂してかゝり來るべし。大返しにして利家を打取るべしとて、物見二騎を出せしが、乘歸りて、敵は城を後にあて、靜りかへりてかゝり來るべき物色候はずといふ。成政謀違ひけり。

末盛後卷の事、加越合戰記に見えし處、大同小異にて詳なる故、併せて爰に記す。利家は加州の内石川川北能登全州を治め、金澤の城に有り。成政は越中の守護にて新川郡富山の城に有りしが、越中立山さら〳〵越の難所を僅に從者百計にて忍びて打通り、東美濃へ出で、秀吉と織田家の弓箭大敵にたやすく勝ちがたからむ。成政北國より攻登りて、前後より挾打て秀吉を亡しなんには、加賀、能登、越前三州を賜り候へと信雄に相約し、またさら〳〵越より富山に歸り、佐々平左衞門神保安藝守と相計り、成政の二人の女ありし中、一人は秀吉へ人質に出し置きたりしかば、其妹を利家の二男利政に妻すべき由を、平左衞門して言はせしかば、兩家緣を結び目出度といひあへり。天正十二年七月二十三日成政の使、佐々平左衞門金澤に赴き祝ひの物取調へ相贈りけり。利家篤實の人なれば、成政の奸謀有りともしらず、引出物して悅びの上、村井又兵衞を謝禮の使とせらる。

成政八月は忌候とて延置き、夜々北の櫓にて軍評定せられけるに、心付て密に利家にしらする者あり。利家虛實辨へがたしといへども、怠りて不意の變に打負けなば、弓箭とる身の恥辱なりとて、加越の堺朝日山に城を構へ、村井又兵衞を大將として、千五百餘りにて守らしめんため、柵を付廻る處に、八月二十八日成政より佐々平左衞門前野小兵衞に五千の兵を指添へて押寄せたり。加賀の者共居住の支度せんとて、金澤に歸りたるも有りて、折節七八百には過ざりけり。されども村井大剛の者にて味方を勇め立つる處に、利家馬廻りの士阿波賀藤八江見茂十郎見廻に參合せしが、急ぎ歸りて注進を賴まばやと云ひければ、兩人色を變じ、金澤にありとも斯る事を聞かば馳せ來るべきに、參合せたるこそ幸なれ、然るに空しく歸れといふ事や有ると怒りければ、村井聞きて、誠に賴母しき事悅ぶに餘り有り。但し路次に一揆起りなんは必定なり。各歸りに恐あらば、爰に止られよと云ひしかば、兩人此詞を聞きて、扨は路の一揆を恐れて歸るまじとや、さらばかけ歸て申さんとて、馬に打乘り、金澤へ四里半計なる道を、只一時に馳歸り斯と申せば、利家さらば後卷せよとて、不破彦三、田野村三郎四郎、片山内膳、岡島喜三郎、原隱岐、武部助十郎などを打具し、貝を吹かせ揉みにもんでぞ急がれける。折しも大雨降りしかば、成政の兵も一時に攻破難しとや思ひけん、城を攻めずして引歸しぬ。是より和談破れければ、能州七尾には利家の弟五郎兵衞安勝、同孫右衞門良繼、高畠織部、中川清六、長九郎左衞門等三千餘にてこめ置き、能登、加賀、越中の堺末

盛に、奥村助右衛門に千秋主殿助土井伊豫を添へて千五百計こめられたり。加州津幡の城には前田右近、越中の堺鳥越には目加田又右衛門、丹羽源十郎を籠められたり。成政も俱利加羅の嶺に城を構へ、佐々平左衛門二千餘、利波の城には前野小兵衛に二千、青山の城には國士菊地伊豆守、荒山に城を築き、神保安藝守氏春の家老袋井隼人に守らせて、七尾の押とす。神保は成政の聟なり。四千の兵をもて森山を守りけり。利家斯と秀吉に告げられければ、秀吉聞きて佐々を疑ひ、加州に又左衛門を置きつるは、吾謀りしに違はざりけり。利家兵少しといへども、必成政に切勝つべし。頓て師を出し成政を討亡すべきよとて、使者に黄金三十兩與へられぬ。九月十一日成政末盛へ押寄せ、二里計かたへの坪井山に切所を前に當てゝ陣し、佐々平左衛門、山下甚八、前野小兵衛を始として八千餘攻めよせ、外構の町家に火をかけんとす。土井伊豫町家を燒かれては、生きがひなしとて二百計にて突いて出で、散々に戰ひけれども、大敵にかけ合せ終に討死す。城兵も爰を專途と防ぎける間、速に落つべしとも見えざりしかば、成政後卷心元なしとて、神保安藝守氏春に四千餘を差添へて、川尻といふ所に陣して、加州の道を塞ぎたり。利家末盛より告來ると等しく、金澤を打立ち、不破彦三村井又兵衛を先陣とす。

一說に、成政きびしく攻めて、二三の丸水の手を乘りとり、本丸に攻詰めたり。末森の飛脚息切るばかりに、金澤に馳來り、文箱を投げけるとぞ。

十一日未の刻の事なり。末森は水に乏し。廣岡の水を汲みてさゞいに入れ、急ぎ追付けよ。後卷の土産にせんとぞ下知せられける。偖同國松任といふ所、金澤より三里計隔りて利長居城なれば、とうとう末森へ向はれよと言送られけり。金澤より四里計なりける津幡の城へ急ぎ押付られしかば、弟の右近秀繼廓外に出向ひ、利長を待たるべきやといはれしかば、城に入れしに、利長戌の刻ばかりに津幡に馳著かれけり。利家悅んで吾成政と若き頃より數度の軍に逢ひつれども、利家を越したる事一度もあらず。されども成政侮るべきには非れども、無二無三に一合戰して勝利を得ん事掌の中にありと、大音揚げて呼はり勇み進まれけるに、寺西治兵衛入道右近と相議し、はや末森は落ちたるならん。殊更川尻に神保多勢にて道を切塞ぐと聞え候へば、後卷はいかゞ候はんと申す。利家大に怒り、きたなき詠は必口にも出すまじき事ぞとよ。人は一代名は末代とこそきけ。奥村や土井を捨殺して已來、たとへ日本の主となるとも、此恥辱すゝぐべからず。成政大軍にもあらばあれ、吾馬廻り計にても快く軍して勝負を決せん事不足なし。いかに村井汝は如何思ふぞ。是非一戰と思ひ定めたるぞと詞をかけられしかば、又兵衛聞きもあへず、有無の一戰の外何の是非か候べきと云ふ。利家悅んで、村井が心も吾に同じとて、早打立たれしに、右近茶漬飯を進め、且上手の占師の山伏の候、召して軍を占はせられんやと問ふ。利家景色よからねど、夫々とて呼出されげり。五十計の山伏なり。懷より書物を取出す。利家ともあれ、後卷に決定したるよ、能見よといはれしに、山伏書